キャロルがオタクになってしまった

岸寄空路

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特に仮面ライダーに嵌っている模様。

目次

番外編
劇場版（つぽいナニカ）――1
戦姫絶唱シンフォギアー1
キャロルがオタクになってしまった
7
メダルいっぱい、夢いっぱい――16
エルフナイン登場！――24
キャロルＶＳ龍也――31
全ての始まり（前）――36
全ての始まり（中）――47
全ての始まり（後）①――59
全ての始まり（後）②――66
全ての始まり（終）――73
やりすぎたかもしれない……――81
龍也とキャロルの出会い（過去編）前
94
龍也とキャロルの出会い（過去編）後
――102
キャロルと二課――114
怪人とロボ――120
二人目の転生者――125
変身――137
改造人間（ただしどんな改造かは言っていない）――143
事件後――155

聖遺物ゲットだぜ！ ―― 164
無印０．５話？ ―― 179
戦姫絶唱シンフォギア無印
変わらぬ覚醒 ―― 189
第23話 ―― 199
迷い藻掻きながら ―― 211
増える謎 ―― 222
混戦① ―― 232
混戦② ―― 240
混戦③ ―― 249
偽物と本物 ―― 259

番外編
劇場版（つぽいナニカ）

『フロンティア事変』から三ヶ月経ち、暫しの平和を満喫していた奏者達の前に現れた金褐色の髪の謎の少年。
「す、すいません。あの、袴龍也さんに会いたいんですけど……」
彼と龍也は出会い、そして――
「は、初めましてお父さん！」
「……え？」
未知の戦いが始まる。

龍也の未来の息子と名乗る少年「リュウガ・M・袴」。その存在に「誰が母親だ!?」と騒ぐ奏者達。混乱する響、リュウガの身のこなしを気にする翼、気にしてない振りしながらかなり気にしてるクリス、「言われて見ると似てる」とリュウガの顔を観察する奏、表面上は冷静さを装うマリア、そんな姉を落ち着かせようとするセレナ、髪の色から「もしかして……」と隣を見る調、「ち、違うデース!? た、たぶん……」と頬を赤くして否

定する切歌。
「何を騒いでいる？」
　そんな状況に現れたキャロルにリュウガは声を掛けた。
「あ、お母さん」
「ん？　……ああ、未来か平行世界から来たのか？」
『お母さん!?　ってか理解早!?』
　母親が判明し更に混沌が増す奏者達。落ち着いた頃にリュウガは語る。何故、自分が未来から来たのかを。
「僕は悲劇を止めるためにやってきました」
　それは今までに類を見ない最強の敵。
「ある実験が行われています」
「実験？」
「聖遺物と生物の混合、生まれながらの融合症例、生物でありながら聖遺物でもあるそれは感情に左右されず物事を合理的かつ冷徹に考える完全生物として生み出されました」
「その名は『ネオ生命体』。それが活動し始めるのが＊＊月＊＊日」
「明日じゃねえか！」
　Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ協力の下、実験施設を破壊するために龍也、響、翼、クリス、セレナ

は出撃した。
「やあ、初めまして奏者の皆さん」
　しかし、既に手遅れだった。
「今日から僕が人間達を管理して守ってあげる。君たちは休んでいいよ」
「あなたに人類を任せられない！」
　研究員達を皆殺しにしたネオ生命体は最強の怪人を創り出す。
「な、なんだこいつは……!?」
「名付けるなら『ネフィリム・ドラス』かな」
　黒い体色に黄色い目、炎の様な翼を持つ怪人のあまりの強さに倒れる響達。
「なら、こいつでどうだ！」
『タカ！トラ！バッタ！　タ・ト・バッ・タトバ・タ・ト・バッ!!』
　オーズに変身して立ち向かう龍也。しかし、それでもドラスには敵わない。
「お父さん！」
「リュウガ!?」
「僕も戦います！」
『ジクウドライバー』
「それは……！」

「変身！」
『ライダータイム！　仮面ライダージオウ！』
　ジオウに変身するリュウガもまたドラスに立ち向かう。そこに更なる援軍が。
「シンフォギアの代わりに持ってきたデース！　行くデス調！」
『ＪＯＫＥＲ！』
「ＯＫ、切ちゃん」
『ＣＹＣＬＯＮＥ！』
「「変身！」」
　切歌と調が仮面ライダーダブルに。
「妹が戦っているのに黙って見てる訳にはいかないわ」
「あたしも翼の相棒だし、じっとしてるのは性に合わない」
「「変身」」
『ドライブ！　タイプスピード！』
『Ｃｏｍｐｌｅｔｅ』
　マリアが仮面ライダードライブに、奏が仮面ライダーファイズに。
「私も響と戦う！　変身！」
『ＨＥＮＳＨＩＮ』

「キャストオフ」
『ＣＡＳＴ　ＯＦＦ』
『Ｃｈａｎｇｅ　Ｂｅｅｔｌｅ』
　更に未来が仮面ライダーカブトとなり共に戦う。
「そっちが数を増やすならこっちも増やすよ」
　しかし、嘲笑うかのように現れる無数のドラスを前に全員のこころが折れかけた――
その時
「なんだ？　あのオーロラは？」
「え？　……まさか」
　そこに現れた助っ人。特別出演
「ここは……どのライダーの世界だ？」
「門矢士ぁぁぁぁぁ!?」
　仮面ライダーディケイド現る。
「だいたい分かった。そいつを倒せば良いんだな」
「君は何者だ？」
「通りすがりの仮面ライダーだ！　覚えておけ！」
　四人の奏者と七人の仮面ライダーがドラスを打倒していく。だが――

「無駄だよ。君たちがドラスを倒すよりも僕が創る作る方が早い」
　無限と錯覚しそうなほど、ドラスは創られていく。
「こうなったらガタキリバで！」
「待て」
「士？」
「どうせならこれを使ってみろ」
「これは!?」
　そう言ってディケイドが取り出した三つのメダル。そこに刻まれた絵を見て龍也は驚きながらも受け取る。そして三枚のメダルをオーズドライバーにセットして叫んだ。
「変身！」
『クウガ！　カリス！　一号！　ガ～タガタガタ・キリッバ・ガタキリバッ！』
　そして誕生する『仮面ライダーオーズ　レジェンドガタキリバコンボ』。
「負ける気がしねえ！」
　そしてここから逆転劇が始まる――
「と言う夢を見た」
「夢オチで終わらせるな」

戦姫絶唱シンフォギア—1
キャロルがオタクになってしまった

「……おい、龍也」
「なんだ」
「俺はお前の言葉を信じて遥々アメリカにまで来た訳だが」
「で？」
「お前……嘘をついたな？

こいつ全然ゼ〇トンに似てないぞ！」

そう言ってとんがり帽子を被った幼女――キャロルは目の前にいる白い怪物を指さす。

「だから何度も言っただろ！　そいつはアルビノ・ネフィリムで俺の言ったネフィリムはまだ見れねえんだよ！　あと、ゼ〇トン言うな！　せめてラギュ・〇・ラギュラと言え！」

「元ネタ的には一緒だろ！」

「監督的には違うんだよ！」

「あの～」

「「なんだ！」」

「えっと、お二人はどちら様でしょうか？　あと、ここは危険ですので避難した方が――」

銀色の装甲を纏った少女が（少女視点で）訳のわからない会話をしている幼女と自身の妹分と同い年ぐらいの龍也と呼ばれた少年の二人組に避難を促す。

彼女の名はセレナ・カデンツァヴナ・イヴ。つい先ほどまで目の前にいる怪物、アルビノ・ネフィリムを止めるために絶唱を歌おうとしている最中に突然天井が崩れた為に

中断せざる得なくなったのだが、そこから彼女の思考が停止する事態が立て続けに起こった為に先ほどまでフリーズしていた。

何が起こったかというと、崩れた天井から「俺、参上！」のセリフと共に幼女現れる。それに引っ張られる形で少年が落下。着地した後にネフィリムを観察。そしてなぜか始まる口論。

あまりの急展開に思考が停止するのも致し方がない事だろう。

それでもすぐに正気に戻り二人の心配するのはセレナが優しい証だと言える。さすがマリアの妹。

「だが断る」

その優しさは幼女には届かなかった様だが。

「いや、なぜ断る」

「ここまで来たらタダで帰るつもりはない。何らかの成果は得る！」

「具体的には？」

龍也の問いに幼女はあくどい笑みを浮かべ懐から小さなボトルを取り出す。

「こいつを倒して成分を手に入れる！」

「おい！　キャロルお前、何時の間にビルドにまで手を出した！」

「錬金術師に不可能は無い！」

「最近、錬金術師の枠から外れてきてるぞ?!」
「危ない！」
　龍也とキャロルの話を聞くことに飽きたかの様にネフィリムが攻撃を仕掛ける。その光景にセレナは反射的に声を上げるが間に合わず二人にその剛腕が襲い掛かる。
　だが――
「おっと」
　龍也の右腕に白い籠手が現れネフィリムの攻撃を受け止める。
「……え?」
　信じられない光景に思わずセレナは固まる。
「とりあえず、こいつを倒せば満足か?」
「お前だってその心算で付いて来たくせによく言う」
「……ふん」
　龍也は懐から謎の絵が描かれた白いカプセルを取り出しスイッチをスライドさせる。
「ゲシュペンスト！　エクスバイン！」
　二つのカプセルを腰のホルダーにセットし、赤と黒の謎のアイテムで読み込む。
『Ｃｒｏｓｓ　Ｃｏｍｂｉｎｅ！』
「合体！」

『Ｇｅｓｐｅｎｓｔ　ｔｙｐｅ　Ｈａｋｅｎ！』
『Ｅｘｂｅｉｎ！』
『Ｓｔａｒ　Ｌｏｒｄ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂｌａｃｋ　Ｇｈｏｓｔ！！！！』
次の瞬間、龍也の体が光り輝き、その光が収まると全身に黒い鎧を身に纏う龍也が立っていた。
その鎧は下半身の装甲が厚く頭部は鎧の上にゴーグルが装着されている。
「行くぞ！　ジェット・マグナム！」
龍也は左腕のプラズマ・ステークを帯電させるとネフィリムの懐に入り込むと勢いよく殴った。
「――――！」
「プラズマ・ファング・スラッシャー！」
声にならない叫びを上げるネフィリムに追撃とばかりに牙型のビーム刃が生えたクロスブーメランを投擲しネフィリムの腕を切り裂く。
ネフィリムが怯んだ隙に龍也はプラズマ・ステークの一本を引き抜く。それは鍔から伸びる幅広な重力で形成されたエネルギー剣、グラン・ロシュセイバー。
それに加えて左手に銃剣ナイト・ファウルを持ち、再びネフィリムへの攻撃を開始する。

「喰らえ！」
　至近距離でナイト・ファウルのマシンガンを連射しセイバーで何度もネフィリムを斬る龍也の姿を見てセレナは見惚れていたが「ハッ！」と正気に戻り絶唱を唱えようとするが――
「やめておけ」
　キャロルに止められ中断する。
「で、でも――」
「命を懸ける必要は無い。龍也は強いからな」
　そう溜め息をつきながら話すキャロルの目には信頼の色が見えセレナも落ち着きを取り戻す。
「これで決める」
　ネフィリムを弱らせた龍也は距離を取りナイト・ファウルとセイバーを収納しライフルを取り出す。そしてライフルを胸部の開口に接続する。
「グラビトン・ブラスターァァァ!!」
　龍也が叫ぶと同時に強大な重力波がネフィリムを飲み込んだ。
　轟音を上げながら周りを破壊していく黒い光線は数秒経つと細くなっていき、やがて照射が止むとそこには何も残っていなかった。

「……やりすぎたか」
「……ゴメン」
「次からは威力を抑えろよ」
「……しばらく使いたくない」
「とりあえず瓦礫に埋まってる奴らを救出するぞ。――と、その前に」
キャロルは龍也によって瓦礫どころか地面が抉れて土が剥き出した場所を探る。よく見るとそこにはネフィリムだったと思わしき白い蛹が残っていた。それにキャロルはボトルを向けると粒子に似た何かがボトルに吸収された。
「成分回収、と」
「マジでフルボトルかよ……」
「細かい事を気にしてないで早く瓦礫をどけるぞ」
「細かいか？」

「まあ、描写するまでもなくあっさり終わるのだが」
「メタいわ」
「あの」

「「ん？」」
「ありがとうございます。おかげで助かりました。姉さんやマムまで助けて頂いて――」
「お礼なら――」
　セレナの言葉を遮りキャロルはセレナに空のボトルを向ける。するとセレナから銀色の粒子が発生する。
「これで良い」
「おい待て。今、何を回収した」
「帰るぞ」
「無視かよ！」
　キャロルは懐からＵＳＢメモリに似たアイテムを取り出しスイッチを押す。
『ＺＯＮＥ！』
　そしてそれを腰のスロットに差し込み叩く。
『ＺＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「早く掴まれ。置いて行くぞ」
「少しは俺の話を聞いてくれないかなぁ!?」
「――ったく」と文句言いながら龍也はキャロルの肩に手を置く。

そして二人の姿は掻き消えた。

後に残ったのは――

「……えー」

呆然としたまま、立ち往生するセレナ達だけだった。

メダルいっぱい、夢いっぱい

「フフフ」
「キャハハ」
　ガブッ、ガブッ、ゴックン。
「まさかこうも上手くいくとわな」
「ガリィちゃんもびっくりですよ」
　ガブッ、ガブッ、ゴックン。ガブッ、ガブッ、ゴックン。
「……」
「ん？　どうした龍也？」
「……一言、言いたい事があるんだが」
　ガブッ、ガブッ、ゴックン。ガブッ、ガブッ、ゴックン。ガブッ、ガブッ、ゴックン。
「なんですかー？」
　キャロルとオートスコアラーの一体、ガリィ・トゥーマーンを見ながら龍也は無表情で告げた。
「……もう止めても良いんだぞ。ガリィ」

「……何をですかー？」
「それ以上――

セルメダル食べなくて良いから！」
そう。先程から聞こえる音はガリィがセルメダルをその歯で噛み砕き飲み込む音だ。何故そんな事をしているのかと言うと、元々『聖杯』の力を与えられ錬金術の行使に必要な『想い出』を扱う能力に長けると言う特徴が有ったガリィは現在『想い出』の代わりに『欲望』を扱っている。それというのもキャロルが『仮面ライダーオーズ』を視聴し「欲望とはここまでの力を生むのか……」と感心した様な顔すると「これも錬金術師が創った……だと……！　ならば俺にも出来るはずだ！」と真剣な表情で研究室（龍也の家の地下、何時の間にか勝手に増築していた）に籠り、数日後には作成すると言う偉

業を成し遂げた。
ちなみにその時に「出来たぞ！　今日がセルメダルのＨａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙだぁぁぁ!!」とテンションＭＡＸで叫びながら目の下にクマを作って出てきたので龍也が俵担ぎでベッドまで運んだと言う出来事も有るがキャロルは覚えていない。
「べ、別に、ガリィちゃんは、うぷっ、平気でっすよー。ゲフッ」
「明らかに限界だよね！」
最早イメージカラーよりも青くなったのではないかと思うほど弱っているガリィに「もういい！　休め！」と止めに入る龍也。
ちなみにキャロルと一緒に笑っている時もその目から光が消え失せており、自動人形であることも有ってちょっとしたホラーと化していた。
「ミカァァァ!!」
「呼んだかゾ？」
あんまりな光景に思わず大声で火のオートスコアラー、ミカ・ジャウカーンを呼ぶ。それに応えるかの様に龍也の隣に現れる。
「ガリィから欲望貰ってあげて！　早く！」
「良いゾ。ちょうどお腹空いたところだゾ」
そう言ってガリィに近づくミカに漸く龍也は落ち着きを取り戻す。

「――ったく、ここまでメダル食わす事はないだろ」
「どこまで行けるか試してみたくなってな」
「少しはガリィの事も考えてあげて！」
キャロルのガリィに対する所業に思わず文句を言うがキャロルは悪びれもせず自身の好奇心を満たそうとした事に龍也のガリィを心配する声がチフォージュ・シャトーに響く。
ちなみに今のチフォージュ・シャトーの役目はかつてと違う。今のチフォージュ・シャトーは――
「クエー（訳：ただいまー）」
「帰ったか」
「あれは……コンドルヤミーか」
ヤミーの集めたメダルの収集所になっている。
今のキャロルは錬金術の行使に『想い出』を償却していない。代わりに簡単に数が増え、エネルギーも大きい『欲望』から生まれたセルメダルを代償として消費している。
なんせ、たった一枚を人に投入するだけ人一人分に簡単に増え、『想い出』と違い尽きる事が無いのだから『想い出』よりも遥かに効率が良い。その為キャロルはセルメダルを創り出した。……決して趣味が高じた結果では無い。例えそうだとしても理由とし

ては八割ぐらいだ、とキャロルは言うだろう。
「クエッ（訳：今週の納品分です）」
「ご苦労」
「さすがシンフォギア世界の政治家だな……。よくもまあ毎度の如く大量のセルメダルを」
ヤミーの役割はセルメダルを増やす事。そしてキャロルの作ったヤミーは取り憑いた相手の『欲望』をセルメダルに変換する。それを上手く活かす為にキャロルは秘密裏に各国の重鎮に護衛代わりにヤミーを取り付けている。これにより政府は使い捨て可能で強力な護衛をキャロルは大量のセルメダルを手に入れられると言うＷｉｎ―Ｗｉｎの関係が成立している。
「これでも欲望は減退しているはずなのだが……？」
「それはそれで人の醜さがわかってしまって気分が滅入る」
「クエ～（訳：考えない方が良いですよ）」
護衛として使われているヤミーは全て『欲望』をセルメダルに変換する機能しかなくグリードが生み出すヤミーの様な個性は無い。その為か取り憑かれた相手は以前よりも『欲望』が抑えられる。
それを利用して汚い政治家をマイルドにしてやろうと龍也が考えたのがヤミーの護

衛化な訳だが、予想以上に強欲な人間が多く龍也もげんなりしている。
「……もうちょっと搾り取っても問題なさそうだな」
「……賛成」
「クエ（訳：了解しました）」
メダルはいっぱいだが、（醜い）夢欲望もいっぱいだった。

＊ここから先は時系列的に不可能なネタ

セルメダルを手に入れる為に響の欲望を煽るキャロル

「立花響！　今なら焼肉食べ放題の無料チケットを付けてやるぞ！」
「……そ、そんな物に惑わされたりしない！」
「今の間と動揺はなんだ」
クリスにツッコミを入れられるが響は聞かなかったことにしてキャロルを見つめる。
「誰かを巻き込むような真似をするなら私が止める！」

「更に有名ホテルのバイキング無料チケットとスイーツバイキングのチケットも付けるぞ！」
「どうしてもと言うなら考えなくもないよ！」
「おいコラ」
「じょ、冗談だよ～」
　クリスに睨まれて響は冷や汗を垂らしながら否定するが目が泳ぎまくっていた。
「フッ……どうやら意志は固いようだな」
「当然だよ！」
「揺れまくっていただろ」
「――ならこれはどうだ」
　そう言ってキャロルは懐から手を突っ込みある物を取り出す。
「もってけダブルだ！」
「それはアタシのセリフだぁああああああ!!」
「ば、倍になったからって……！」
「とっておきだ！　寿司を奢ろう！　回らないのだ！」
「よろしくお願いします！」
「釣られるなぁあああああああああああああああ!!」

クリスちゃんが仲間になった時点で政府所属なのでこの交渉は（金銭面的に）成立しないため没。

エルフナイン登場！

「龍也、こいつは今日から俺の助手を務める」
「エルフナインと申します。よろしくお願いします」
「あ、ああ、よろしく」
　ある日、キャロルが二人に増えた。正確にはキャロルが廃棄予定だった自身のホムンクルスがキャロルの助手として研究に協力するらしい。
「それで？　エルフナインを助手にしてどうする気だ？」
「ふむ、実は前から難航している物が有ってな……」
「嫌な予感がするが何だ？」
　あのキャロルが難しいと言うぐらい代物だ。きっと凄まじい物――
「コアメダルだ！」
　その言葉を聞いた瞬間、龍也はキャロルにアイアンクローを仕掛けた。顔を掴まれたキャロルは悶え苦しんでいる。
「お・ま・え・は！　いい加減にしろよ！　何でもかんでも創るんじゃない！」
「ま、待て龍也！　今回はちゃんとした理由がぁぁぁ!?」

「お、落ち着いてください！」
数分後、キャロルにストレスをぶつけた龍也は漸くキャロルを解放した。
「で、その理由って何だよ？」
「――っ、あ、ああセルメダルの件でな」
「セルメダルがどうした？」
今現在も各地からヤミーが集め貯蓄されているセルメダル。順調にたまっているから問題ないと思われるが、と龍也は考える。しかし、次のキャロルの言葉を聞けば納得するだろう。何故なら――
「順調に貯まり過ぎて置き場が無い」
「あぁ……」
そう、予想以上に順調過ぎたのだ。なにせセルメダルは人の欲望から生まれる。その欲望が強ければ強いほどセルメダルの量も増える。結果、チフォージュ・シャトーからメダルが溢れるのではと危惧するレベルにまで至っていた。
ちなみに少しでも減らす為にガリィだけでなくレイア・ダラーヒムとファラ・スユーフもメダルを食べる作業を行っている。ミカは『想い出』を――今は『欲望』だが――搾取する機能を持たない為に除外されている。
この事にミカは「自分に搾取機能が無くて良かったゾ」と述べている。

「でも、それがコアメダルを創るのと何の関係が有るんだよ?」
「そこは僕が説明します」
　龍也の疑問に答える為にエルフナインがオーズのＤＶＤを持って説明を始める。
『仮面ライダーオーズ』を見る限りコアメダルの特徴はセルメダルより強力で何度使用しても消滅することはない。で、間違いないですか?」
「まあ、そうだな」
「そこが問題なんです」
「?」
「極論するとコアメダルは無限に使えるエネルギーの塊、つまり賢者の石の完成形に近いんですよ」
「え」
　エルフナインの言葉に呆然とする龍也。龍也も予想外なのだ。まさかコアメダルが賢者の石と同等だとは。だが仮面ライダーではよくあることだと思いだし、すぐに冷静になった。
　無限に進化するライダーのベルトに埋め込まれているし、希望の魔法使いでも出てきたし、黒い世紀王に埋め込まれた王の石も賢者の石の様な何かだし。……最後のだけはカウントしてはいけない気がする。

「だが、そんな物は簡単に創れんよ」
「ですからセルメダルのエネルギーを一枚に集中して回数制限付きのコアメダルを創ろうという結論に至りました」
　龍也は「なるほど」と納得した様に頷く。確かに無限に使えるアイテムを創るより現実的だ。
「と言う訳で早速、その装置を創り始めたいと思います」
「だから俺達はしばらく工房に籠る」
「……わかった。頑張ってくれ」
　ちなみにこの時、龍也はこう考えていた。
（昔のキャロルならともかく、今のキャロルだと脱線するだろうから時々見に行くか）
　後日、龍也の予想通りに深夜テンションでおかしくなってコアメダル作成装置ではなくウィザードリングの開発を行っていたキャロルにジャーマンスープレックスを喰らわす仕事を行う羽目になった。
　そこから更に数日後。
「できたぞ！」
「できました！」
「……そうか」

テンション高めの二人は円盤型のアイテムを持って工房から現れた。
「どうした龍也？　暗いぞ？」
「……それは、……いや、実際に見た方が早い」
「？」
そう言って龍也はキャロルとエルフナインを連れてチフォージュ・シャトーに向かった。
「「うわぁ……」」
キャロルとエルフナインがドン引きした声を上げる。
何故なら二人の目に映っているのは――

黙々とメダルを噛み砕くガリィ、レイア、ファラの三体のオートスコアラー。おそらくメダルが砕けたのだろう、大量に発生している屑ヤミー。それを笑いながら狩ってい

くミカ。

そんじょそこらのホラー映画が可愛く思える光景だった。

「こ、これは……」

「よ、予想外ですぅ……」

「悪いけどすぐにその装置使ってくれないか？　さすがに三人が哀れ過ぎて……」

龍也の言葉を聞き二人は頷くとすぐに装置を起動する。すると大量のメダルは装置に吸い込まれていく。ある程度減った処で装置を止めると装置の中心には金色の縁に赤い鳥の絵が描かれたメダルが出来ていた。

「上手くいったな！」

「この調子でいきましょう！」

「頼んだ」

こうして大量のセルメダルはコアメダルに変わった。しかし、時間が経てばまた貯まるため、定期的にこの作業をしなければいけないだろう。

「そうだ、エルフナイン。お前に褒美をやろう」

「え、いいですよ、そんなの」

「まあ、貰える物は受け取っとけばいいだろう」

「龍也さん……わかりました！　では、遠慮なく」

「よし、龍也」
「おう」
「あれ、龍也さん？　なんで僕を羽交い絞めに？　キャロル？　そのメモリは『ＧＥＮＥＭａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』へ？「痛みは一瞬だ」え？　えっえ!?　ま、待ってください「そぉい!!」へぶっ!?」
これによりエルフナインの体は性別無からキャロルと同じ女性の体に変わった。
だが、その後、龍也とキャロルの二人は正座で説教を受ける羽目になった。

キャロルＶＳ龍也

「龍也ぁ……！　覚悟はいいな？」
「待て。落ち着くんだキャロル」
　現在、龍也とキャロルの二人は亜空間にて向かい合っている。キャロルは全身から怒気を発し、それに対して龍也は距離を取り様子を見ている。よく見ると龍也は冷や汗を流しながら口元が引きつっており、キャロルもガイアメモリを取出し戦闘態勢に入っている。
　一触即発と言えるほどの緊張感が漂っていた。
「貴様ぁ、なんで、なんで――
　俺の分のクッキーを作らなかった!!」

それもすぐに霧散したが。
「だから材料が足りなかったんだから仕方がないだろ!?」
「それでも、それでも俺の分を取っといても良かっただろうが！」
なぜこんな事になったかと言うと、昨日の事だが龍也がエルフナインの為にクッキーを焼いた。この男、実はお菓子作りが趣味で甘い物を作るのも食べるのも好きと言う筋金入りの甘党だ。前世の時もコーヒーは砂糖無しで飲む物ではない、と話していたほどだ。
その為か龍也のお菓子作りの腕はプロには及ばないが一般家庭の中でも上位と言える。このお菓子の味をキャロルは気に入り時々作る様に強請ってくるのだ。
閑話休題。
エルフナインにクッキーを作り振る舞った事をトレーニングの為に亜空間に入る直前にガリィから聞き「なんだと!?」と叫び本気モードになってしまったのだ。
「また作ってやるから！　冷静になれ！」
「関係ない……！　食べ物の恨みを知れ……！」
……ここまで怒っている理由に実は乙女的嫉妬心が有ったりするのだが龍也が気づくのはしばらく先だろう。
『ＬＵＮＡ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』

「げ」
「行け！　マスカレイド・ドーパント！」
キャロルが使ったのはルナメモリ。幻想的な不思議な特殊能力が秘められているとされる。ぶっちゃけなんでもありな能力だ。
バトライド・ウォー創生では仮面ライダーエターナルが分身をしたので分身として他の怪人を創り出す使い方もできるだろう
ガイアメモリならマスカレイド・ドーパントを、セルメダルならヤミーを、といった風に。
『ＬＵＮＡ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「追加だ！　ヤミーもくれてやる！」
「数多くない!?」
更にキャロルはセルメダルを取り出しマキシマムドライブで多種多様なヤミーの軍団を創り出し龍也を取り囲む。
「大丈夫だ。これは訓練だ。例え難易度が上がっても殺しはしない――痛いだけだ」
「それ、言葉の前に〝死ぬほど〟とか付きません!?」
最早どうしようもないと悟った龍也は「こうなりゃやけだ！」とジードライザーとカプセルを取り出す。

「ゲシュペンスト！　エクスバイン！」
『Ｃｒｏｓｓ　Ｃｏｍｂｉｎｅ！』
「合体！」
『Ｇｅｓｐｅｎｓｔ　ｔｙｐｅ　Ｈａｋｅｎ！』
『Ｅｘｂｅｉｎ！』
『Ｓｔａｒ　Ｌｏｒｄ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂｌａｃｋ　Ｇｈｏｓｔ！！！！』
「おりゃぁ！」
　鎧を纏った龍也は全力でマスカレイド・ドーパントを殴りつける。殴り飛ばされたマスカレイド・ドーパントは他のマスカレイド・ドーパントやヤミー達を巻き込みながら消滅した。
「ほれほれ、どんどん倒していかないと、これがノイズだったらどうする？」
「ちくしょうっ！」
　ナイト・ファウルを乱射しながら龍也はドーパント＆ヤミーに立ち向かっていくのであった。

　その光景を見ながらキャロルは物思いに耽っていた。

（そろそろ原作一期一話……ツヴァイウイングのライブが迫っている）

龍也に見せてもらったアニメ『戦姫絶唱シンフォギア』がこの世界と酷似している事は事前に聞いていた。だからこそセレナとネフィリムの戦いにも介入したのだから。

……まあ、ゼ〇トンのそっくりさんを見たかったのも事実だが。

（はっきり言ってアニメと同じなら立花響の命が危険だ。今後の事を考えると少なくとも生存していてもらわなければ怖すぎる）

すでに龍也と自分自身もイレギュラーと化した以上、どうなるのかわからない。

だから考えうる限りの万全を尽くす。そう決めたからこそキャロルは戦力と権力を蓄え龍也を鍛えているのだ。

……決して趣味とか私怨が混じっている訳ではない。少なくとも１００％ではない。

（いざとなればこのメモリを使うか……）

そう考えながらキャロルは龍也の様子を見ながら懐にあるＥの頭文字が書かれたメモリに触れるのだった。

全ての始まり（前）

「龍也。このチケットあげるわ」
「こ、これは――」
　母親から渡されたチケットを見て龍也は驚愕を隠せないでいる。なぜなら――
「ツヴァイウイングのライブ……。なんで？」
「前からテレビでチェックしてたから購入しといたのよ。……ファンなんでしょ？」
　ファンの部分を小声で言う母の表情は悪戯に成功した子供の様だった、と龍也は語る。
「キャロルちゃんの手前、言い出せなかったんでしょ？　内緒にしといてあげるから楽しんできなさい」
「あ、ああ」
　実際はファンではない――と言う訳ではないがツヴァイウイングを調べていたのは別の理由だ。
　理由はただ一つ、原作一期一話、全ての始まりとも言えるその舞台に介入するために。
（キャロルには悪いが一人で行こう）

チケットは一人分だし。そう自分に言い聞かせる。本当の理由を隠して。
会場を見る限り今回のライブが原作の舞台である可能性は高い。だからこそ行かなければならない。なにせ――不確定要素は自分やキャロルだけでないのだから――。

――の、ノイズだぁー!!
誰かのその言葉を聞き悲鳴と怒号が響き渡る。
ある者は我先にと逃げ出し、ある者は恐怖で動けなくなる。
一人の歌女がこれから起きる地獄を幻視し咄嗟に懐のネックレスを握る。だが目の前で槍と化したノイズによって最初の犠牲者出ようとしていた――だが
「ゲシュペンスト！　エクスバイン！」
『Ｃｒｏｓｓ　Ｃｏｍｂｉｎｅ！』
「合体！」
『Ｇｅｓｐｅｎｓｔ　ｔｙｐｅ　Ｈａｋｅｎ！』
『Ｅｘｂｅｉｎ！』
『Ｓｔａｒ　Ｌｏｒｄ　Ｄｒａｇｏｎ　Ｂｌａｃｋ　Ｇｈｏｓｔ!!!!』

「究極！　ゲシュペンストキィィィック!!」
その雄叫びと共に黒い塊が襲い掛かろうとしたノイズを全て炭素に変えた。
ステージ上に着地したそれを見て歌女――天羽奏はようやく黒い塊が人型であることに気づいた。
ノイズを炭素に変えたのは黒い鎧を纏った人間だった。
先ほどの声から男、それも声変わりしてから間もないぐらいの少年と思われる。そんな少年がノイズ相手にまるでヒーローの様に腕を組みノイズを見ている姿に奏は、一緒にいる風鳴翼は、観客たちは不思議と安心感を覚えた
「ニュートロンブラスター！」
その掛け声と共に少年は合わせた胸部の開口からビームを放った。ビームはノイズ達を消し飛ばし天へと昇っていく。その光景に思わずその場にいた人々は見惚れるが――
「何してやがる観客共！　とっとと避難しやがれ！」
少年の言葉に観客達は動き出す。そこに先程の様な恐怖一色の表情ではなく、安堵が見え隠れしていた。
「翼！　私達も行くぞ！」
「うん！」

――Ｃｒｏｉｔｚａｌ　ｒｏｎｚｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｚｉｚｚｌ
――Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ
奏、翼の二人は聖詠を詠いＦＧ式回天特機装束――シンフォギアを身に纏いノイズと対峙する。
奏の槍がノイズを貫き、翼の剣が切り裂く。観客は避難に夢中で見る者は少ないが歌いながら戦う彼女達の姿は危機的状況でなければ見惚れてしまうほどだ。
鎧を纏っている少年――龍也も負けずにナイト・ファウルに付いた剣、フェイクリッパーでノイズ達を切り裂いていく。
（予想以上にノイズの数が多いけどこれなら！）
龍也も装者二人もこのままならいける。そう思い始めていた。
だが――
『Ｇｉｇａｎｓｃｕｄｏ』
『Ｓｉｅｇｅｒｌｉｏｎ』
『Ａｌｔ　Ｅｉｓｅｎ』
『Ｗｅｉ・ｒｉｔｔｅｒ』
「!?」
「なんだ!?」

謎の機械音声が聞こえ、振り向いた先にいたのは2、3メートルサイズのデフォルメされた4体のスーパーロボット達だった。

その光景を横目で見ていた龍也は鎧で表情は見えないが内心焦っていた。

（ジガンスクードとズィーガーリオンにアルトアイゼン、ヴァイスリッター!?　またスーパーロボットかよ！）

龍也の言う通り以前にもスーパーロボットは現れた。その話はまたの機会に話すとして、翼も奏も謎のロボット達を前にして動揺を隠せないでいる。

その隙を突くかの様にアルトアイゼンが右腕の杭――リボルビング・ステークを龍也に向けて構えて突進してくる。

「危ない！」

翼が龍也に向けて警告するが既に遅く龍也の眼前にまで杭が迫っていた。

そして、何かが砕ける音が周囲に轟く。

気づけば龍也の眼前は金色で塗り潰されていた。よく見るとそれは巨大な金色の硬貨だった。

『ＪＯＫＥＲ！』

『『『シャバドゥビタッチヘンシ～ン！』』』

「「「「変身」」」」
『ＣＹＣＬＯＮＥ！　ＪＯＫＥＲ！』
『フレイム、プリーズ！　ヒーヒー、ヒーヒーヒー！』
『ウォーター、プリーズ！　スイー、スイー、スイー、スイー』
『ハリケーン、プリーズ！　フーフー、フーフーフー！』
『ランド、プリーズ！　ドッドッドッドドドンドン！　ドッドッドン』
　謎の声が聞こえたかと思った直後、カーボンロッドが、水が、風が、金色の硬貨がスーパーロボットに当たり、ロボット達は弾き飛ばされていった。
「……げっ」
「何で嫌そうな声を上げる龍也」
「失礼ですよ。龍也さん」
　声を掛けられて龍也が振り向くとそこにはマフラーを身に着け右側が緑、左側が黒になった髪にアルファベットのＷの形をした髪飾りを付けた――所謂ライダー少女――姿のキャロルが立っていた。ちなみに大人バージョンだ。
　しかも表情が別人の様に変わる。肉体的なことを考えるなら相方はエルフナインなのだろう。
「いや、何故に来たし、と言うか何時作ったダブルドライバー。そしてなんでライダー少

女？」
「一つずつ答えてやる。一つ目は俺も調べていたからに決まっている。二つ目はこんな事も有ろうかと、と言うやつだ。三つ目はこっちの方がお前好みかと思ってな？」
　そう言って胸を持ち上げるキャロルから思わず目を背ける龍也。
「そ、そんな事より！　俺が一人で来てる事まで知ってたのかよ!?」
「龍也さんの事が心配だったんですよ。ね、キャロル」
「うるさい」
「ガリィちゃん的にはー有象無象がどうなろうと知ったこっちゃないんですけどー」
「真っ先に来た奴が何か言ってるゾ」
「うっさい!!」
「一人で地味に戦うのは感心しない」
「ここから私達も一緒に戦います」
　更にキャロルの後ろにはそれぞれの属性の色に合わせた装飾がされたローブを纏ったオートスコアラー達が勢揃いしていた。
「なんで全員来ているんだよ」
「全員お前が心配だったからだ」
「えー」

「(それってマスターが龍也を心配しているって事なんですけどー)」
「(たぶん、自覚してるけど目を背けてるゾ)」
「(マスターはもう少し派手に好意を表に出すべき)」
「(それが出来たら苦労しないでしょうが)」
「なんか言ったか?」
「「いえ、何も」」」
　オートスコアラー達の会話は幸か不幸かノイズ退治しながらキャロルと会話していた龍也には聞こえていなかったが、キャロルには聞こえていた様で睨まれてそれぞれロボットとの戦いに移る。
「アタシはデカブツをやるゾ」
「じゃあガリィちゃんはあの青いので」
「派手に戦えそうな角付きをやろう」
「では私は白いのを」
　オートスコアラー達はそれぞれの相手を決めて戦闘を開始する。
　その様子を見ていた翼は龍也とキャロルに近づく。
「援軍に感謝します。ですけどこのままじゃジリ貧に――」
「なに、こちらには切り札が有る」

「なんか嫌な予感がするけど、なんだ！」
　龍也の不安げな声を無視しキャロルは『ＺＯＮＥ』のガイアメモリを使用する。
『ＺＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
　ＺＯＮＥの効果でキャロルの手にどこかの宇宙人の顔に似た形のアイテムが転送される。それを空に翳すと光り始める。
『バトルナイザー、モンスロード！』
「行け！　ゴモ……ゴライアス！」
　キャロルが叫ぶとアイテムの中から四角い光が現れ、その光は全身が紫色で両腕が槍の様な形をした恐竜に似た完全聖遺物・ゴライアスとなった。
「いろいろ待てぇぇぇ!!」
　その光景を見ていた龍也は大声で制止を掛ける。鎧で表情が見えないがなんとなく血管が浮き出ているのを幻視したと後に翼は語る。
「ツッコミたい事は幾つも有るけど！　一つだけ言わせてもらう！　何時の間にそいつを手に入れたぁぁぁ!!」
「ダインスレイフを探し各地の遺跡を巡っている時に見つけたのを思い出してな。前にアメリカに行った時に回収しといた」
「あん時かぁぁぁ!!」

「あの――」
「なに!?」
「の、ノイズが……」
翼に言われて龍也がノイズの方を見ると今まさに観客に襲い掛かろうとしているところだった。
「やべ――」
「任せろ！　ゴライアス！　超振……ライトニングディザスターだ！」
「もう突っ込まないからな！」
キャロルの指示にゴライアスは両腕にエネルギーを溜め、巨大なビームに変えてノイズを薙ぎ払った。
「」
「レイア！　戦闘中悪いがセルメダルを！」
「了解」
あまりの光景に翼は絶句しているが、そんな翼の様子を無視してキャロルはレイアに指示を出す。
キャロルの指示を聞いたレイアは両手にセルメダルを持ち構える。そしてセルメダルを観客に向かって弾き出した。

「な、なにを――」
「黙って見とけ」
弾かれたメダルは突如、観客達に現れたメダル投入口に入っていく。観客達からヤミーが現れ観客を連れ去っていく。
「な……！」
「後は奴らが安全な処まで連れて行く」
「その発想は無かった」
予想外のヤミーの活用法に思わず龍也も感心した声を上げる。
「ま、待ってください！　先ほどのロボット達は――」
「あれぐらいなら俺の最高傑作達が何とかする」
そう言ってキャロルはゴライアスの制御に集中する。
（エルフナイン、索敵を頼む）
（はい、わかりました）
エルフナインもある確認の為にキャロルに協力する。
（……）
この戦いを観察する者の正体を知るために。

全ての始まり（中）

「もう少しで出口だ！」

「助かった！」

ツヴァイウイングのライブに来ていた観客達は何人か脱出が済み、残りの人数もかなり減っていた。

原作通りなら１２８７４人と言う死者数だったが、原作知識よって可能となった龍也によるノイズへの先制攻撃、龍也の一喝による冷静さを取り戻した事による観客の迅速な行動。更にキャロルの創ったセルメダルによって生み出されたヤミーによる救出作業によって出入り口に殺到する観客が減った事により原作とは比較にならないほど犠牲者が大幅に減る事なった。

その中には本来なら大怪我を負うはずだった少女も含まれた。

「ハァハァ」

その少女も出口に辿り着き原作と違う結末を迎える

はずだった。

「それじゃ困るんだ」
「え？」
　不思議なほどに耳にはっきり聞こえた言葉に少女は反射的に振り向く。少女が振り向いた先にいたのは全身黒ずくめフードを被った――おそらく男性がいた。
「君は主役なんだ。英雄（ヒーロー）なんだ。そんな君が舞台に上らないなんて許されるはずがない」
「な、なにを……」
　少女は男から距離を取る。男が何を言っているか理解できなかったからだ。
「だから……君には舞台に戻ってもらうよ？」
「へ？」
　思わず間抜けな声を上げる少女の肩を誰かが叩く。誰か確認するために振り向くとそこには騎士に似た鎧――いや、ロボットが立っていた。
「おい！　あんた何やって――」
　少女の様子に気づいた他の客がロボットに近づいた瞬間、彼らの首は胴体と泣き別れしていた。
「ひ!?」
「モブ如きが僕の邪魔をしないでくれ」

あまりの光景に少女は腰を抜かしかける。しかし、ロボットに掴まれて崩れ落ちることもできずにいる。
「大丈夫。君に待っているのは栄光の未来だ」
そんな言葉が聞こえたが少女の耳に届くことはなく、少女は意識を一瞬失った。
そして、少女が気づいた時にはそこは――

「ガリィちゃん、行きま～す」
『クラーケン！　プリーズ』
ズィーガーリオンと対峙したガリィはキャロルが創ったプラモンスター、イエロークラーケンを呼び出す。しかし、呼び出したイエロークラーケンはガリィと大差ない大きさである。
「イカちゃん、お願いしますねー」
ガリィに言われクラーケンはズィーガーリオンに突撃する。
ズィーガーリオンはその突撃を腰に有った銃剣ブレードレールガンで受け止める。そこからズィーガーリオンはクラーケンを弾き飛ばし、ブレードレールガンで打ち抜く。

「そんなのじゃイカちゃんはやられませんよ～」
　ガリィの言う通り、クラーケンに当たった銃弾は全て弾かれた。その光景から倒すのが困難と判断したのか、すぐさまズィーガーリオンは高速でガリィの下に向かう。
「！」
「おや？　イカちゃんの次は私ですか？　けど――」
　ズィーガーリオンのマシンキャノンがガリィに向かって撃たれる。
「豆鉄砲でやられるほどガリィは弱くないですよー」
　だが魔方陣によって全て防がれた。更に魔方陣から追撃として氷塊がズィーガーリオンに向けて射出される。だが、ズィーガーリオンに全て回避される。
「すばしっこいですね……」
　ズィーガーリオンは機動力が高い機体の為に攻撃を当てるのは容易ではない。
「あまり時間はかけたくないんでー、本気で行きまーす」
『クラーケン！　Ｓｈｏｗ　Ｔｉｍｅ!!』
　ガリィのベルトから音声が鳴るとクラーケンはパーツ別に分離しガリィに装備された。
「では早速――」
　クラーケンの触手と自身の両腕に氷の刃を出現させ、高速移動でズィーガーリオンに

近づく。
「おや？」
　両腕の刃で斬りかかるがズィーガーリオンはブレードレールガンでそれを防ぐ。だが――
「それだけで良いんですかぁ？」
　そこからクラーケンの触手でズィーガーリオンの四肢を突き刺す。そのまま触手で持ち上げる。更に追撃として機体そのものを凍結させていく。
「これでもう動けませんねー。残念でした」
　ズィーガーリオンを見てガリィはつまらなさそうに一言呟いた。
「所詮はただの機械人形ですか」

「地味に頑丈」
　レイアは角付きと表現した機体、アルトアイゼンと戦っていた。レイアが投げたコインは全てアルトアイゼンに当たっているが致命的な損傷は一つも与えられていない。アルトアイゼンもその為かダメージを気にせずレイアに突撃してくる。このままでは懐に入り込まれるのも時間の問題だった。接近されても戦えるがアルトアイゼンの頑

丈さを考えれば時間が掛かるのは容易に想像できた。
「ならば」
『ゴーレム！　プリーズ』
それ故にレイアはプラモンスター、バイオレットゴーレムを呼び出した。
『ゴーレム！　Ｓｈｏｗ　Ｔｉｍｅ!!』
ゴーレムはパーツ別に分離するとレイアに装着される。
「派手に手を増やした」
レイアの言葉通り、ゴーレムの腕がレイアの肩から直接生える形で接続されている。文字通り手を増やしたのだ。
「！」
その姿を見たアルトアイゼンは両肩に内蔵されたベアリング弾を大量に発射する。
それの応じるかの様にレイアは自身の手とゴーレムの手の合計四つの手から大量のコインを投擲しベアリング弾を打ち落としていく。アルトアイゼンはベアリング弾が打ち落とされていくのを気にせずレイアに接近する。
だが――
「！」
「コインだと括った高がそうさせる」

アルトアイゼンは何時の間にか自身を囲んでいた屑ヤミーに纏わり付かれていた。
「セルメダルを混ぜただけなのだが……存外上手くいくものだ」
捕えられたアルトアイゼンは屑ヤミーを振りほどこうとスラスターを噴かす。
「派手に終わらせる」
それを見たレイアはコインを巨大化させて屑ヤミーごとアルトアイゼンを挟み潰そうとする。だがアルトアイゼンも両腕で巨大コインを押しとどめる。
「私の腕はまだある」
身動きできなくなったアルトアイゼンにゴーレムの手に持たせた巨大コインで上から叩き潰した。アルトアイゼンは爆炎を上げて名前の通りのスクラップへと変えられた。
「任務完了」

「さあ、始めましょうか」
ファラ・スユーフはヴァイスリッターと対峙していた。
「！」
ヴァイスリッターはネオ・ブラズマカッターでファラに斬りかかる。

「あら？」
　それをファラはソードブレイカーで受け止めるとエネルギーで出来た刀身は霧散した。
「通用するのですね」
　接近戦は通用しないと判断したヴァイスリッターは空中に退避しオクスタン・ランチャーＢモードで狙撃を開始する。
　ファラは飛来する弾丸を風で弾道を変えて防ぐ。
　その様子を見たヴァイスリッターはオクスタン・ランチャーをＥモードに変えてビームを放つ。
『ユニコーン！　プリーズ』
　ファラはそれに対抗する為にプラモンスター、ブルーユニコーンを呼び出す。
「行きましょう」
『ユニコーン！　Ｓｈｏｗ　Ｔｉｍｅ!!』
　ファラの左腕にユニコーンが装着される。そして自身に向けて放たれるビームを高速回転させたユニコーンの角で受け止める。
　ビームを防ぎ切ったファラは風の力で飛んでヴァイスリッターに接近する。更に竜巻を発生させてヴァイスリッターを捕える。

「これで終わりですわ」
逃げることのできないヴァイスリッターをファラは高速回転しているユニコーンの角で容赦なく貫いた。風穴を空けられたヴァイスリッターは爆散し跡形もなくなっていた。
「思っていたよりも大した事はなかったわね」

「こいつ堅いゾ」
ミカはカーボンロッドでジガンスクードを殴りつけながらその頑丈さに面倒くさそうに呟く。
「ガルーダを使っても攻撃力が足りないゾ……」
オートスコアラーの中でも最強であるミカには戦闘能力の強化はあまり行われていない。それ故にミカもうんざりした表情でジガンスクードを睨む。だからと言って倒せない訳ではなく、ただこのまま戦うと時間が掛かり過ぎる事が解るが故の発言だ。
「アレしかないゾ。うん、仕方がないゾ」
と言いながらただ単に自身に追加されたある技を使いたいだけである。近くにキャロルか龍也が居れば「おいやめろ、バカ！」と止めに入る様な技だが搭載したキャロル

と教えた龍也が悪いのである意味自業自得である。
ミカはバーニングハート・メカニクスを発動させる。その様子を見ていたジガンスクードはギガ・ワイドブラスターで応戦しようとする。
「ほっ！　はっ！」
しかし、ミカはあっさり躱しカーボンロッドを掌から射出し牽制する。そのまま一気に接近し――
「捕まえたゾ」
正面から抱きついた。だがジガンスクードは両腕部のシーズシールドから高圧電流を放ちミカを破壊しようとする。しかしミカは平然と技を放つ準備をする。
「とっておきと言うやつだゾ」
ミカの全身から高熱が発生し空気が揺らぐ。
「確か……ウルトラダイナマイトだゾ」
その瞬間、ミカの体は大爆発を起こし、ミカとジガンスクードは爆炎に飲み込まれた。そして双方ともにバラバラに爆散した。
「おおー！」
訂正、ミカの頭だけはキャロルの足元に吹っ飛んできた。
「その技はいざという時以外に使うなと言ったはずだが？　ミカ」

「メモリを使っていいならやらなかったゾ」
　ミカの頭を持ち上げながらキャロルは溜息をついた。ウルトラダイナマイト――ウルトラ兄弟の6番目が使う自爆技だ。これをミカに使える様にしたのは最強のミカでも倒せない敵を確実に倒す為、つまり最後に切り札と言っても良い技だ。それでもミカが使おうとしたのは実際に使えるかどうか試す為でもある。まあ、興味本位なのも否定しないが。
「マスター、これ使います?」
　ガリィが触手でグルグル巻きにしたズィーガーリオンを引き摺って持ってきた。
「そうだな、成分だけ回収しとこう」
　そう言ってキャロルはフルボトルでズィーガーリオンから成分を回収する。
「処分しとけ」
「了解で～す」
　キャロルの命令を聞きガリィは触手でズィーガーリオンを雑巾絞りの様に締め上げて潰した。
「ふむ。これで機械人形共は全てスクラップか」
「これで安心して――」
「いやぁぁぁー!!」

「!?」

スーパーロボット達を全て破壊し、ノイズも粗方退治し一安心とキャロルと龍也が気を抜いた瞬間、少女の悲鳴が響き渡った。

その声を聴き特に龍也は驚愕した。何故ならその声に聞き覚えが有ったからだ。その声の主を確認する為に目を声の聞こえた方へ向けると

「嘘だろ……なんで……立花響がいるんだよ!」

全ての始まり（後）①

　響が気づいた時、周りの景色は一変していた。先ほどまで自分がいたライブ会場に逆戻りし、目の前には騎士を彷彿とさせるロボットが自分から距離を取り剣の形をした銃をこちらに向けている。その光景を見て彼女は

（私死ぬんだ）

　自身の命を諦めた――

「うおおぉぉぉ――！」

　その絶望を払うかの如く奏がラフトクランズに挑みかかった。

「早く逃げろ！」

　奏の言葉を聞き響は逃げるために立ち上がろうとするが体が震えて動けなかった。無理もない。本来ならノイズから逃げ切り助かるはずだった、その直前に謎の人物に元の場所に戻されると言う絶望を味わった彼女は『同じことを繰り返すのではないか』その疑念が頭から離れず彼女は動き出すことができなかった。

　響のその様子を含めて全て見ていた龍也もまた動けずにいた。奏と戦っているのはラフトクランズ・アウルンを青色にした機体。それを見た龍也は何が起きたのかを察し

た。ラフトクランズはラースエイレムという範囲内の時間経過を完全停止させる「ステイシス・フィールド」を展開する機能を持っている。範囲がどれほどか解らないが下手に介入しても停止されるだけだ。それ故に動けずにいた。
（だが、このままっていう訳にも……！）
「龍也」
　ガリィにミカを預けたキャロルに声を掛けられて龍也は漸く思考のループから抜け出した。
「俺とエルフナインで隙を作る。お前はその間に立花響を連れて逃げろ」
「……できるのか？」
「俺を誰だと思っている？」
「……任せた」
　キャロルの言葉を信じ龍也は背中のスラスターにエネルギーを溜める。
「行くぞ、エルフナイン」
『ＡＣＣＥＬ！』
「いつでも行けますよ、キャロル」
『ＣＹＣＬＯＮＥ！　ＡＣＣＥＬ！』
　キャロルの左半分の髪が赤く染まり、瞳の色も青くなる。

「機を逃すなよ」
「わかってる」
　龍也の返事を聞きキャロルはダブルドライバーからアクセルメモリを取出しながら走り出した。
『ＡＣＣＥＬ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
　マキシマムドライブを発動させたキャロルは急加速し一気にラフトクランズに接近する。
　同時に龍也もスラスターを吹かして響の下に向かう。
「アクセルストームグランツァー！」
　キャロルはそのまま奏と戦い後ろを向いているラフトクランズに向かって跳び、風を纏った後ろ回し蹴りを繰り出した。その一撃はラフトクランズの頭部に直撃し、ラフトクランズの体勢を崩した。
　それと同時に龍也が響を抱きかかえて戦線を離脱する為に空へ飛ぶ。
「え？　ええ!?」
「捕まってろ！」
　予想外の状況に動揺を隠せない響。そんな響の動揺を無視してコンサート会場の外に出た――

はずだった。
気づけば元の位置に戻っており、頭部を損傷したラフトクランズが龍也の肩を掴んでいた。
「チィッ!!」
時を止めて元の位置に戻された事を理解した龍也は舌打ちしながらラフトクランズに向かって裏拳を繰り出す。しかし――
「グゥッ!?」
一瞬の間に自身が殴り飛ばされ、響から引き剥がされる。同時に奏の下に現れて再び戦いを始めるラフトクランズに今度は心の中で龍也は舌打ちをする。
「龍也!?」「龍也さん!?」
一連の流れを見ていることしかできなかったキャロルとエルフナインが悲鳴に似た声で同時に龍也を呼ぶ。
「だ、大丈夫だ……、それよりも」
振出しに戻った。
その事が三人の心に暗い影を落とす。ラフトクランズの能力で上手く事は運ばないとは解っていたがそれでもここまでの行動が無意味に近くなると落ち込まずにいるの

は難しいだろう。
「オートスコアラーの皆はどうだ？」
「下手に介入してもやり直しになるだけだ。場合によっては更に戦力を追加されることになる。……いや、既に投入されている」
「なっ!?」
ガリィ達の方を見れば彼女達を足止めするかの様に新たな機体が十数体――全てガーリオン――追加されてガリィ達の相手をしており頼る事も出来なくなっていた。
「八方塞がりかよ……！」
動こうにも動けない龍也達を、ラフトクランズと戦う奏を見て響は思った。自分を助けようとしてくれる人達がいる。生きて欲しいと願う人達がいる。
（逃げなきゃ）
絶望している場合じゃない。自分の生存を願っている目の前の人達と今頃この状況を知り待っているだろう家族と親友の為に、生きる為に響は立ち上がりその足でこの場を離れようとした。
それを嘲笑うが如くラフトクランズが動ける様になった響に向かってソードライフルによる射撃を仕掛ける。
「やめろぉぉぉ！」

その攻撃を奏は槍を回転させて防ぐ。だが、奏のダメージも大きく装甲が剥がれて飛んでいく。
「まずい!?」
響を守るために龍也は再びスラスターを噴かして飛び出す。
「エルフナイン！」
「はい！」
『ＬＵＮＡ！』
『ＴＲＩＧＧＥＲ！』
『ＬＵＮＡ！　ＴＲＩＧＧＥＲ！』
キャロルも自身の右の髪を黄色に、左側を青に変えてトリガーマグナムを構えた。
響に接近しながら龍也は考える。どうすれば響を守れるか。
（このままじゃガングニールの破片が当たる。なら――）
飛来する破片を響に直撃しない様にする為に龍也は――
「ぐあっ!?」
「え!?」
響を抱きしめて自分の体を盾にする形で守った。
「あ、あの――」

「い、いいからじっとしてろ！」

龍也の背中に奏の槍や装甲の破片が突き刺さる。鎧越しの為に怪我は少ないが幾つかの破片が鎧を貫き血が噴き出ている。

「で、でも血が――」

「お前の命の方が大事だ」

龍也自身、人生二回目である自分よりも他人の命の方が重いと何処かで思っており、それが原作主要キャラ相手ならより一層その意識が強くなる。

特に相手は立花響。装者でなくとも生存して欲しいと龍也は強く願っているのだ。何故なら龍也は前世の頃から立花響のファンなのだから。

全ての始まり（後）②

一方、ルナトリガーの姿となったキャロルはトリガーマグナムから射出されるエネルギー弾で破片を撃ち落としているが――

「キャロル！　サイクロンに変えた方が――」

「連射力が上がるが命中率が下がる！」

「ヒートは!?」

「火力が高い！　細かく散らばって危険だ！」

ソードライフルのエネルギー波の威力が高く響と龍也に向かって飛んでいく破片が多い。それぞれの破片は細かく小さい物が多いが元は聖遺物。小さい破片でもその強度は高く、大きい破片ともなれば一発で破壊できない。その為にキャロルも破片の全てを処理できずにいる。

「このままだと天羽さんも持ちませんよ!?」

「わかっている！」

響を守る為に奏がエネルギー波を防いでいるが、その姿はボロボロで今にも倒れてエネルギー波に飲まれてしまいそうだ。それでも立っていられるのは後ろに守るべき相

手がいるからなのとラフトクランズが手加減している事に他ならない。
だがラフトクランズの攻撃に奏の命の有無は考えられていない様にしか見えない。それ故に何か手を打ちたいキャロルだが現在オートスコアラー達はガーリオン部隊と交戦中。放置すれば何をするかわからない。翼も奏を助けようとしているがノイズが立ち塞がり近づけずにいる。
「やはり未完成だが、これを使うしか――」
そう言って白いメモリを取り出すキャロル。しかし――
「天羽奏！　一旦引け！」
「で、でも――」
「いいから早くしろ！」
その前に龍也が動いた。響を抱きしめながら片手にグラビトン・ライフルを構えて奏に指示を出す。
龍也の指示通りにソードライフルの射線上から退く。
「グラビトン・ライフル発射（ファイア）！」
グラビトン・ライフルから発射された重力波とソードライフルのエネルギー波がぶつかり合う。
ソードライフル側の威力が減退し押し返す。そのままラフトクランズへと重力波が

迫るが再びラフトクランズは姿を消した。
「何処に――がっ!?」
すぐ横にまで接近していたラフトクランズに気づかず龍也はクローシールドで胸元を切り裂かれた。よく見れば抱きしめていた響も引き剥がされている。
「こんのぉ！　――ぐうっ!?」
龍也はナイト・ファウルを取り出して攻撃を仕掛けるが、また殴り飛ばされて響から離される。響もまた状況が変わった事でラフトクランズに怯えて動けずにいる。
そしてラフトクランズはその手にガングニールの破片を持ち、最早原作と同じシチュエーションにするのを諦めたのだろうか、握りしめて細かく砕いた破片を掌底の形で叩きつけた。
「なっ……！」
「なんてことを!?」
砕いた破片が響の胸に突き刺さり少なくない出血が胸元から流れ始める。
「ちくしょう！」
「おい、大丈夫か！」
響のその光景を見届けたかの様にラフトクランズが消えると、響の様子を見た奏は響に近づく。意識の無い響に声を掛ける奏。その光景に歯噛みする龍也。その様子を見

てキャロルは懐からセルメダルを取り出す。
「頼む！　生きるのを諦めるな!!」
「……あ、う」
「！」
「キャロル！」
「軽く見た限り命の危険はないが、場所が場所だ。すぐに病院に運ぶぞ」
意識が戻った響に奏はホッとした表情をするが、出血は止まっていない。そこでキャロルはセルメダルを響に投入した。
「クエー！」
そして響からタカヤミーが生まれた。
「頼むぞ！　タカヤミー！」
「クエェ！」
タカヤミーは響を抱きかかえてスタジアムの外に飛んで出て行った。その光景に漸く一安心したキャロル達だが――
「……」
「龍也」
龍也は項垂れて顔を上げない。響を守りきれなかった事を悔やんでいるのだろう。

『ＬＵＮＡ！　ＪＯＫＥＲ！』
「後悔するのは後にしろ！」
「あだ?!」
「器用ですね。キャロル」
　そんな龍也の脛を容赦なく蹴って自分に意識を向けさせるキャロル。しかも、龍也が鎧を付けているからと言ってジョーカーに変更した上で蹴っている。エルフナインも鎧越しにも拘らずダメージを与えているキャロルに思わず感心してしまっていた。
「い、いてえな、おい！」
「後で愚痴ならいくらでも聞いてやるから残っているガーリオンとノイズを始末するぞ」
「どうやって?」
　痛みに悶えながらキャロルの言葉を聞き後悔するのは後回しにした龍也はキャロルに残りの敵をどうするのか確認する。
「こいつを使う」
「メダジャリバー!?　いつ完成させた!?」
「まだ試作品だ。だが試すなら早い方が良いだろ?」
　キャロルが何処からか取り出したのはメカニカルな見た目の大型の刀、メダジャリ

バーだった。
「こいつならノイズも斬れるだろ」
「原作通りの能力なら可能かもな」
「と言う訳で使え」
「俺が使うのかよ!?」
「ちなみにオースキャナーの代わりにジードライザーでも技が使えるぞ」
「何時の間にそんな設定を!?」
ツッコミながらもしっかりメダジャリバーを受け取る龍也だった。
「それにビームをぶっぱするより剣を振り回した方が気が晴れるだろ?」
「……サンキュー」
キャロルの気遣いに照れ臭そうに顔を背けて答えた龍也はそのままガーリオンとノイズの群れに向き直る。
「いくぞ」
『トリプル・スキャニングチャージ!』
メダジャリバーにセルメダル三枚を投入し、ジードライザーで読み込むとオースキャナーと同じ音声が流れる。すると、メダジャリバーがエネルギーを纏い始めた。
「はぁぁぁ――」

その様子を見ていたオートスコアラー達は射線上から退避する。翼もファラによって退避させられる。
「セイヤァァァ!!」
龍也の気合入れた叫びと共に空間は裂けてガーリオンとノイズは横一閃に景色ごとずれた。そして景色が元に戻ると全てのガーリオンは爆発し、ノイズは炭化した。
「……威力高すぎねえか?」
「メダル三枚では足りないかもしれないと思ってルナメモリのマキシマムドライブまで発動させておいたからな」
「マジで!?　どこ!?　あ、柄の処に差し込まれている!?」
龍也がメダジャリバーをよく見ると柄の処が透けており、ルナメモリが入れられていた。これにより効果範囲を広げたのだろう。
「おかげで実験成功だ」
「人を実験台にするな」
そんな二人の会話でコンサート会場での戦いは終わりを迎えたのだった。

全ての始まり（終）

「さて後始末を終えたし帰るぞ」
「いや待て」
「なんだ？」
「明らかに何か聞きたそうにしている二人はどうする？　あと、天羽奏の状態は大丈夫なのか？」
　龍也の言う通り風鳴翼と天羽奏が龍也達を見ている。だが二人とも満身創痍であり、特に奏はラフトクランズの攻撃を受けていた為に瀕死と言っても過言ではない。
「仕方がない。治療して口止めしとけば時間稼ぎぐらいはできるだろ」
「時間稼ぎ？」
「こんだけ派手な事をして奴に調べられないとでも？」
「あ」
　装者二人に目線を向けたキャロルの言っている事が解り「しまった」と言わんばかりの声を上げる龍也。今回の事で特異災害対策機動部、特に二課に所属しているある人物に狙われるのは確定だろう。

「まあ、俺がなんとかしてやる」
「……お願いします。キャロル様」
「無駄に敬語を使うな。気持ち悪い」
　そんな会話をしながら翼と奏に近づく。見れば奏の意識は既になく翼の膝に頭を乗せて横たわっている。
「あの――」
「天羽奏を治療してやる。だから何も聞くな」
「そ、そういう訳には――」
「放っとくと死ぬぞ」
「!?」
　奏の容態を聞き動揺を隠せない翼。薄々と奏に命の危険が有る事には気づいていたが認めたくなくて目を背けていた。そして、このままじゃ間に合わないかもしれないことも。
「俺なら助けられる」
「……本当ですか？」
「疑うのは構わんが時間は無いぞ？」
「……」

「どうする？　選択肢はないと思うが」
「……お願いします。奏を、助けてください」
「任せろ」
　翼の返事を聞きキャロルはあるメモリを取り出す。
「待て」
「なんだ、龍――タッツー」
「人をポ〇モンみたいに呼ぶな!?」
「??」
　ガイアメモリを使うと思っていなかった龍也がキャロルを止めに入ると何故かあだ名みたいな呼ばれ方をされて思わずツッコミを入れてしまう。その様子を見ていた翼は龍也とキャロルの会話の意味が解らず首を傾げている。ちなみにキャロルが呼び方を変えたのは念の為に龍也の名前バレを防ぐためだ。……散々本名で読んでいたので今更だが。
「そんな事よりガイアメモリを使うのか？　俺はてっきりシフトカーでも作っているもんだと」
「このメモリを使えば治療も可能だ。一応な」
「不安になる言い方だな。おい」

「あと、シフトカーはまだ研究中だ」
「やっぱり創っているのか」
　龍也と会話しながらキャロルは更に一枚のセルメダルを取出す。
「これぐらいで良いだろ」
『ＧＥＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
　メダルを握りこんだキャロルはジーンメモリのマキシマムドライブを発動させて奏にメダルを持つ手で触れた。そこからキャロルは奏にセルメダルを何枚か投入する。メダルを投入する度に奏の体に何度かメダルが浮かび上がり段々と傷が消えていき同時に血色も良くなっていく。
「仕上げだ」
『ＧＥＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
　マキシマムドライブを発動させてもう一度奏に触れる。
「これで治療できたはずだが……」
「……」
　キャロルの言葉に全員が奏を真剣な表情で見つめる。
「う、う～ん。あれ？　あたしは――」
「奏！」

「うお!?　つ、翼?」
「良かった……助かって……良かった……!」
「翼……心配かけたな」
　奏が助かり、目の端に涙を流しながら起き上った奏を抱きしめる翼。そんな翼を抱きしめ返す奏。龍也は二人の様子を見て鎧の下で笑顔を浮かべている。
「ふう……」
「お疲れさん。それにしても何をやったんだ?」
「簡単な話だ。遺伝子融合でセルメダルと天羽奏を融合させて一時的に『グリード』にした。正確にはなりかけていた火野映司と同じ状態に、な」
　さらりと驚愕の事実を告げるキャロルに龍也は硬直してしまう。
「その状態でセルメダル投入してダメージを回復して、最後に遺伝子組み換えで『健康な人間の肉体』に戻したから問題ない……はずだ」
「若干不安だけど……その言葉信じるぞ」
　しかし、龍也とキャロルは後に知る。『健康な人間の肉体』にした結果、ＬｉＮＫＥＲによる今まで体に残っていた負荷すらも消えていたことに。
　その事を知り二人して頭を抱えることになるのは、もう少し先。
「あの、ありがとうございました」

「あたしからも礼を言わせてくれ」
「何黙っていてくれれば良い」
「……それは」
「恩人だから正直に言うけどあたしらが黙っててもすぐにばれると思う」
「構わん。こちらから連絡入れるまで時間を稼いでいてくれればいい」
「そ、それなら何とかなるかと」
「そうか、なら頼む」
「ああ、解った。でも、できれば早めに頼むぜ」
「解っている」
　そう言ってキャロルと龍也は奏と翼から距離を取る。キャロル達の下にオートスコアラー達も集まったタイミングでキャロルはメモリを取り出す。
『ＺＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「また会おう」
　そしてキャロル達はコンサート会場から姿を消した。
　こうしてライブ会場の惨劇は原作の被害の１／５程度に収まり天羽奏の命も無事だった。しかし、立花響は融合症例になる条件が謎の人物によって成されてしまい、龍也の原作ブレイクは中途半端な形になり、この事を龍也はしばらく引きずることにな

る。

そして肝心の立花響は――

「響……」

響の病室の前に小日向未来が扉に手を掛けるのを躊躇しながら立ちすくんでいた。自分がコンサートに誘った結果、響は大怪我負ってしまった。その事に自分を罵倒し殴りつけたくなるほど後悔している。何故あの時、一緒に行けなったのか、もっと早くに知らせればコンサートに行く事を中止できたかもしれないのに。そんな後ろめたさから病室に入れずにいる。そうしていると――

「――――！」

「――！」

中で口論様なものが聞こえてくる。片方は自分の親友の声だと言う事に気づいた未来は先程まで躊躇いを捨てて扉を開いた。

そこには――

「お願いします！　インスタントごはんで良いんで買ってきてください！　病院食だけじゃ足りないんです！」

「クエッ！（訳：ダメです！）」

「そう言わずに！　どうか！　どうか!!」

二足歩行の鳥に似た何かにベッドの上で土下座しながら飯を集る親友がいた。
その様子を見た未来は深呼吸をして――
「何やってるの！　響!!」
思いっきり叫んだ。
当然この後、看護師が来て二人とも怒られた。

やりすぎたかもしれない……

「痛い……」

龍也は泣いていた。動かせない脚の痛みと精神的なダメージで。

現在、龍也は骨折で入院している。

なぜこんな事になったのか、それはツヴァイウイングのコンサート会場を立ち去った直後まで遡る。

キャロル達と共にコンサート会場から転移した後、鎧を解除した龍也はファラに羽交い絞めにされていた。

「キャロルさん……これはいったい？」

「罰ゲームだ」

「ふぁっ!?」

異様な雰囲気に思わずさん付けでキャロルを呼ぶ龍也。そんな龍也に目元を陰で隠した状態で目を光らせながら無慈悲に罰を与えると宣言するキャロル。

「……俺、なにかやらかしましたか？」

「独断専行」

「うっ！」

今回の龍也はキャロルにコンサートの事を伝えずに一人で行動した。その事にキャロルは怒っている。

しかも後先考えていないも同然の行動故に最初のラスボスに目を付けられたのはほぼ確実と言えるだから尚更だ。

「前に俺が命を狙われたからと言って一人で行くやつがあるか」

「……」

キャロルの言葉に気まずそうに目を背ける龍也。以前にもスーパーロボットが現れてキャロルに襲い掛かった事が有る。龍也が使っているカプセルもその時に手に入れた様な物であり、龍也の予想では自分と同じ転生者か、あるいは自分の行動が原因で発生したイレギュラーが生み出した物だろうが現時点では不明。解っている事は今回のコンサートに現れた事から原作知識の有る転生者、又は原作キャラそれも一期から存在する誰かだろう。

後者に関しては各期ラスボスぐらいしか当て嵌まりそうにないが。

閑話休題。

キャロルは龍也に行う罰の内容を思案する。

「俺の心配でやらかした事だから、情状酌量の余地はある」

その言葉を聞き龍也はホッと安堵の溜息を吐く。だがすぐにその表情は凍り付く事になる。
「骨一本で勘弁してやろう」
キャロルの無慈悲な宣告。龍也はその言葉の意味が理解できず動きが止まった。
数秒経ちキャロルが何を言ったのか理解できた龍也は顔を青ざめる。
「じょ、冗談ですよね？」
「……」
笑顔である。曇りの無い純粋さすら感じられる笑顔だが龍也には死神が笑っている光景にしか見えなかった。
「なに、安心しろ。すぐにくっ付く様に折ってやるし、他の怪我は治してやる」
「安心できる要素欠片もないんですけど!?」
怪我を治してから折る。と宣言されては安心など出来ないだろう。龍也も何とかして逃げようと足掻くが羽交い絞めされて
「自業自得だ！　諦めろ！　たかが脚の一本だ、問題ない！」
「あるだろ！　普通に日常生活に支障が出るって！」
「介護ぐらいはしてやる！　いいから大人しくしてろ！」
「それはそれで嫌だぁー！」

龍也の心情的には見た目幼女（中身数百?歳）に介護される事の方がダメージは大きいので断固として折られる訳には行かなくなった。仮に大人モードであったとしても年上の美女に世話される羞恥プレイは想像ですら精神的に辛い。ついでに補足するなら龍也的には普段の姿も大人の姿も好みである（可愛い、綺麗という印象の違いだけ）。だからこそ余計に介護されるのは恥ずかしいのだ。更に言うと肉体に引っ張られている節が有るが転生者でもある龍也の精神年齢はギリギリ２０代後半だ。異性（しかもどちらでも美が付く）の介護を平然と受けられるほど達観していない。

「ああもう、騒ぐな！」

『ＧＥＮＥ　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』

「ごふっ!?」

キャロルによる容赦のない腹パンが龍也を襲う！　同時に龍也の怪我も治療される。

「レイア！　やれ！」

「了解」

キャロルの命令にレイアは容赦なく龍也の左足を、具体的には左脛骨を折った。

「――――っ!!」

「はっ！」

龍也は声にならない悲鳴を上げながらファラに気絶させられた。

「よし。後は――」
『ＺＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「コンサート会場に送って終わりだ」
　キャロルはゾーンメモリを使って龍也を転送した。
「よし帰って交渉準備するぞ」
「キャロル……」
「ん？　なんだ、エルフナイン？」
「いくらなんでもやり過ぎじゃないですか？」
「悪いとは思うがこうでもしないと同じことを繰り返す奴だからな……」
　龍也の悪癖は時折、思考が極端になり馬鹿をすることだ。今回も自分一人で何とかしようとして後先考えずに行動した。普段はキャロルにツッコミを入れる常識枠のように振る舞っているが彼も大概変人と言われる部類である。何せキャロルをオタクにした原因は龍也なのだから。
「それに足を折ってまで偽装する馬鹿がいるとはフィーネも思わないだろ」
「キャロル……それ自分が馬鹿と言っているのと同じですよ」
「否定はせん」
「否定してください!?　それで折られた龍也さんが可愛そうですよ!?」

（どうせ後でツンデレしながら看病するんだゾ）
（面倒くさいから本人に言わないでくださいね）
そんな会話をしながらキャロル達は拠点に帰った。
ちなみに龍也はコンサート会場の階段下にて倒れているのを救急隊員に発見されてそのまま病院に運ばれた。

以上の事が有ってキャロルに骨を折られ龍也は入院中である。
「……はぁ、まあこれも必要な事なんだろ」
キャロルのやる事には意味が有るのだろう、と龍也は納得すると漸く泣き止んだ。
「……小腹も空いたし売店で何か買うか」
泣くのにエネルギーを使った為かカロリーが欲しくなった龍也は松葉杖を取って立ち上がろうとする。
「一人で行こうとしないでください」
「あ、エルフナイン」
ちょうどお見舞いに来ていたエルフナインがそれを止める。
「松葉杖、まだ使い慣れていませんよね」
「十代の男子に病院食だけは少ないんだ」

「食べるのがダメとは言っていません。使い慣れない内は一人で行動するのは危ないと言いたいだけです」

そう言ってエルフナインは龍也の横に寄り添うように並ぶ。

「僕が補助しますから安心してください」

「幼女に補助されるのはちょっと……」

そう愚痴る龍也だが「キャロルの方が良かったですか？」と言われ沈黙した。なにか別の問題が発生しそうな予感がしたからだ。

「何やってるの！　響！」

売店でお菓子を買って病室に戻る途中、女性の叫びが聞こえた。龍也には誰の声かすぐに分かり「響の嫁か」と呟いた。

「誰の事ですか？」

「エルフナインは知らないのか……。小日向未来のことだ」

「……ああ」

よく二人が名前を言っていたことを思い出したエルフナインは納得の声を出した。

「しかし病院内で叫ぶとは……何が有ったんだ？」

「聞こえた内容的に立花響さんが何かやらかした様ですけど……」

まさかヤミーに土下座しているとは思いもしないだろう。気になった二人は未来の声が聞こえた部屋に移動する。

「次から気を付けてくださいね」

『すいませんでした』

二人が着いた時にはちょうど看護師が響と未来を注意し終わって部屋を去るところだった。

「いったい何をやらかしたんだ？」

「気になりますけど接点の無い僕らが関わるのはよくないですし、部屋に戻りましょう」

「そうだな」

エルフナインの言葉通りにその場を去ろうとする龍也。去り際に響達の方に目を向けると、視線に気づいた響が申し訳なさそうに頭を下げた。恐らく先程の大声で迷惑をかけたと思ったのだろう。龍也はそんな響に会釈をする。

同時に響の肩からタカヤミーが顔を出して同じ様に会釈をした。

「ちょっ!?」

「――――ッ!?」

予想外の事態に響は声を上げ、龍也は驚きで固まった。

「クエ？（どうかしましたか？）」

この場にいる四人の内心を一言で表すなら「お前、何やってんの!?」だろう。

「えーと、二人はこの人？　のお知り合い何ですか？」

「俺もそいつに助けられたんだ」

数分後、落ち着きを取り戻した四人は病室内で話し合っていた。ついでに響の質問に龍也は嘘をついた。

「響のお見舞いに来たら訳の分からない人？　がいて思わず大声を……」

「気持ちは分かります」

「あははは……」

「まあ、怪人が病室にいればなぁ……」

未来はタカヤミーの存在にかなり動揺していたが自分より年下でしっかりしているエルフナインの説得でどうにか落ち着きを取り戻していた。

「それにしても〝噂の怪人〟がどうして響と一緒にいるの？」

噂の怪人とは言うまでもなくコンサートの時にキャロルが観客の避難に使ったヤミー達の事だ。空を飛び、人を軽々と持ち上げたり、高速で運んだりしていたのだ。目立たない訳もなく、情報規制など不可能に近かった。実際新聞には「謎の怪人が人命救助!?」の見出しが載った。

ちなみにヤミーの大半はキャロルの元に帰りセルメダルになったが、このタカヤミーだけが響の元に残り続けている。

閑話休題。

未来の質問に響は頬を掻きながら困ったように答える。

「いやー私にも分からなくてさ」

「どうして？」

「事件の時の記憶が無いんだ……」

予想外の答えに未来は固まる。龍也とエルフナインは「もしかして？」と目を合わせる。

「ただ、全部忘れたわけじゃなくてね、誰かが必死で守ってくれたり、助けようとしてくれていたのはなんとなくだけど覚えているの」

「そうなんだ……」

響の言葉に改めて響が危険な目に遭ったのだと理解し、辛そうな表情を浮かべる未来。

その様子を見ながら龍也とエルフナインは小声で話す。

「エルフナインこれって……」

「事件のショックで記憶を失ったか、キャロルがメモリーメモリを使った可能性があり

ますね」
「キャロルがやった可能性が高いな……わざわざヤミーを響に付けたままだし」
なぜタカヤミーを残していったのか？　疑問に思うがキャロルに聞けば良いか、と龍也はそれ以上考えなかった。だが同時に思った。
「置いていくなら俺達のことはスルーする様に言えよ……」
おかげで響はともかく未来に怪しい奴と思われている。その事に龍也はため息をついた。
「仕方がないか……」
記憶が無いのならばれる事もないだろう。龍也はそう思うことにした。それに龍也からすれば一期さえ乗り越えればなんとかなるのだから。Gのネフィリムは既に対策済み、GXは言うまでもなく、AXZはGXが無ければ問題無し。とにかく一期が最難関なのだと龍也は判断していた。
「え～と……」
「？」
考え込んでいた龍也は響の困ったような声で正気に戻った。
「どうかしたか？」
「その、お二人の名前を聞いて無かったなぁ、と思って」

「……ああ」

そう言えば自己紹介していなかった事に龍也達は気づいた。

「改めまして僕はエルフナインと申します」

「俺の名前は袴龍也。十四歳、中学三年生だ」

「あ、一つ上なんですね」

「袴先輩とお呼びした方が良いですか？」

「呼びにくいだろうから龍也で良い」

「じゃあ、龍也先輩で」

響の呼び方に龍也は「そういえば響に先輩呼びされるキャラいなかったなぁ……」とどうでもいい事を考えていた。

「私は立花響、好きなものはごはん&ごはん！　響って呼んでください！」

「小日向未来です。好きに呼んでください」

響は元気良く、未来はどこか距離を感じる声色で自己紹介をした。

「よろしくな。響、小日向」

「よろしくお願いします。響さん、小日向さん」

精神的に距離を感じる未来は名字で呼び、響は要望通り名前で呼んだ。それと同時に龍也は響に右手を差し出す。

それを見て響も同じように右手を出して握手したその瞬間――

「……え？」

龍也の右腕が取れた。具体的には肘から先が握手した同時に外れた。予想外の事態に響の思考が停止した。未来も固まった。エルフナインは呆れている。

「何をやってるんですか龍也さん……」

「一回やってみたかったんだ。何も知らない相手の前で腕を外すとか漫画とかでたまにあるだろ？」

龍也の言葉にエルフナインは非難の目を向ける。龍也も最初は満足気にしていたが、エルフナインと響達の様子を見て流石に気まずそうにしている。

「謝りなさい」

「ごめんなさい」

龍也はエルフナインの指示に素直に従った。その後は当然、三人から責められる事になった。

龍也とキャロルの出会い（過去編）前

「本当に驚いたんですからね！」
「悪かった」
　響を驚かせた龍也は何度も頭を下げていたが文句を言われ続けていた。
「お詫びと言っちゃなんだが……」
「？」
　自業自得とは言え責められるのに疲れた龍也は懐から何かを取り出す動作をする。
「これを貸そう」
「これは？」
　龍也が取り出したのはポータブルＤＶＤプレーヤー。そしてアニメＤＶＤ。
「入院中は暇だろ？　時間つぶしにちょうど良いぞ」
「でもこれ龍也先輩も使うんじゃ……」
「俺は他にもあるから」
　そう言って取り出したのは漫画、ラノベ、携帯ゲーム機。明らかに物理法則を無視した数を取り出していく。

「いったい何処に隠し持っていたんですか!?」
「手品師か何かですか？」
「似たようなことはできる」
「……腕外したのも含めてですか？」
「悪かったと思ってるから……そんな冷たい目で見ないでくれ小日向……」
　龍也は転生時に貰った特典は亜空間の様な所に前世の世界に有ったオタクグッズを保管している。しかも中身は今も増え続けており、持ち主である龍也ですら全容を把握できていない。最近ではプラモデルまで出てきたこともある。
「まあ、驚かせてしまったお詫びに他のも貸すし、欲しかったら布教用もあるから遠慮なく言ってくれ」
「布教用って……」
　龍也の発言に未来は呆れた声を出す。
「未来、私オタクって呼ばれる人初めて見たかも」
「私もだよ。響」
　彼女達は知らない。二年後に同じ様な人種に会い、親しくなるなど。
「俺の部屋番号を教えておく。暇つぶししたい時は遠慮なく言ってくれ」
「あ、はい」

「あまり変なのは勧めないでくださいね」
そう言って龍也とエルフナインは元の病室に戻って行った。

「さて、暇だしゲームでも――」
「ストップです」
病室に戻った龍也はベッドに横になり懐からゲーム機を取り出そうとするがエルフナインに止められる。
「腕の点検をしますから渡してください」
「えー」
「驚かすためだけに外したりするからです。諦めてください」
エルフナインの言葉に龍也は「仕方ないな」と言わんばかりの態度で右腕を取り外す。
「聖遺物なんですから、もうちょっと慎重に扱ってください」
「悪かったって」
エルフナインは龍也の右腕になっていた物からガイアメモリを取り出す。メモリにはDの文字が書かれている。メモリを取り出すと人間の腕だった物は白い龍の手を彷彿とさせる籠手に似た形状へと変化した。
「ダミーメモリの方は特に問題ありませんね」

メモリを検査しながらエルフナインは鞄から道具を取り出して検査していく。ただ、あくまで簡易的な検査だったのだろう。数分も経たない内にダミーメモリを義手となっていた物に挿す。

『ＤＵＭＭＹ』

「とりあえず問題なさそうなので戻しますね」

「ああ」

龍也の腕に義手を戻すと一瞬で人間の腕へと変化した。その腕はどこからどう見てもただの人間の腕であり、継ぎ目の様なものすら見えない。

「問題無し」

「聖遺物なんですからさっきみたいな変な事に使わないでくださいね」

「ごめん、ごめん」

そう言いながら龍也は懐からゲーム機を取り出し電源を点ける。その様子を見ながらエルフナインは呆れた溜息を吐いた。

「龍也さんの腕は聖遺物の中でも特殊なんですから気を付けてくださいね」

「分かってるよ。少なくとも入院している間は自重する」

「普段から自重してください。――あ、そろそろ戻らないと」

時計を見たエルフナインは椅子から立ち上がる。帰る時間になったのだろう。

「僕は帰ります。入院している間は安静にしてくださいね」
「片足しか使えないんだから大人しくするって」
　最後に声を掛けてエルフナインは病室を出て行った。
「聖遺物の義手かぁ……」
　帰り道でエルフナインは龍也の腕の事を思い出していた。
「偶然とは言え龍也さんも凄い事してますよね」
　それが以前にキャロルの記憶を見たエルフナインの感想だった。それは龍也とキャロルが始めて会った時の記憶。龍也からすれば「運が良かっただけ」の出来事、キャロルからすれば「『奇跡』だと認めない。あれは必然」であった事。

　龍也がキャロルと初めて出会ったのは五年前、まだ龍也が転生してから十年も経っていない時だった。

　その日、龍也は両親と共にとある国の遺跡内を見学していた。遺跡巡りが趣味の父は長期休みの時に家族旅行を兼ねて各地の遺跡を探索する。無論、許可を貰って。その許可をどうやって取ったか聞いても「知り合いのツテを使ってるだけだ」としか答えない。実は二課と繋がりが有るのではと龍也は疑っていたりする。

そして、その趣味に付き合う形で龍也は何度も各地の遺跡に訪れていた。前世の経験はともかく、世間一般的には幼い子供でしかないにも関わらず。

遺跡に興味を示す方が珍しい年齢、むしろはしゃいで遺跡になんらかの損傷を与えないか心配されるぐらいの年齢だろう。だが、当時の龍也は良くも悪くもおとなしい子供だった。外で遊び回るよりも部屋で漫画を読むことの方が多く、同年代の子と遊ぶ時も一歩下がった位置にいて、まるで高校生以上の学生が子供の面倒を見ている様に見られた（大人と言うほど雰囲気は成熟していない）。家にいても部屋に閉じこもっている（隠れて前世のゲームで遊んでいた）事も多く、父親が遺跡に連れてきたのも龍也なら遺跡を傷つけないと思ったのと、何か別の事にも興味を持ってほしいと思ったからだ。

その事を知る由も無かった龍也であったが、結果的に父親の思惑通りになっていた。この世界が『戦姫絶唱シンフォギア』の世界だと知っていた龍也は遺跡に興味津々だったのだ。何せ、この世界には聖遺物が、神話の武器が実在する世界だ。いや、それどころかネフィリムの事を考えれば神話に出てくる生物も聖遺物として存在するかもしれない。であるならば、遺跡には聖遺物に関する情報が、原作に出てきていない聖遺物が眠っているかもしれないのだ。危険も有るだろうが同時に興味も尽きない。「ロマンが有る」と龍也は思っていた。だからこそ、龍也は興味深そうに遺跡内を家族で探索していた。いつもの様に。

いつもと違ったのは、その日、探索していた遺跡にノイズが現れた事だ。
遺跡は地下に有った為にノイズの出現警報にすぐに気づかなかった龍也は、壁に手をつこうとした。それはその壁からノイズが出てくるのとほぼ同時だった。龍也の右手は触れた先から炭化し始めた。その事に誰よりも早く気づいたのは龍也の父親だった。
息子の命の危機に反射的に体を動かしていた。探索用に持っていたナタを手に持ち、躊躇なく龍也の右腕の肘から先を斬り落とした。そのまま素早く体勢を整えると龍也と龍也の母を抱えて遺跡の奥へと走り出した。ちなみにこの時、龍也達の背後からもノイズが出現していたので龍也の父は唯一の逃げ道を迷いなく選んでいた事になる。
この事を知った龍也は後にこう語る。
「家の親父もＯＴＯＮＡだったかぁ……」
シンフォギアのＯＴＯＮＡは凄い。改めてそう思ったとか。
閑話休題。
ノイズから逃げていた龍也の父はある部屋へと辿り着いた。そこは遺跡の最奥であり、行き止まりだった。幸いなのはノイズがまだ追いついておらず、時間的に猶予が有った事だろう。だが、それも時間の問題であり打開策が無ければこのまま家族揃って炭素の塊へと変わってしまうだろう。父に抱えられていた龍也はここで漸く降ろされ、母によって応急処置が行われた。逃げている間に少なくない量の血が流れていたが、龍

也自身が残った左手で抑えていた為か幸い致死量には至っていなかった。
「何者だ？　貴様ら……」
龍也の止血を終えたタイミングで声を掛けられた。その声は少女の様な幼さを感じる一方で、声に似つかわしくないぞんざいな話し方だった。
「今日は人が来る予定は無かったはずだ。なぜ――」
その声の主を見て龍也はすぐに分かった。いや、思い出した。そして同時に疑問が湧いた。なぜ――
『こんなところにいる？』
その瞬間、龍也の心の声とキャロルの声は重なった。

龍也とキャロルの出会い（過去編）後

キャロルがその日、遺跡にいたのは理由があった。彼女は以前にもこの遺跡に訪れたことが有る。世界解剖計画「万象黙示録」に使える聖遺物、後に発見した魔剣『ダインスレイフ』を利用する事になったが、見つかる前までは各地を探索していた。龍也達が探索していた遺跡もその一つであり、キャロルが龍也に出会ったのは二回目の探索を行っているタイミングであった。

何故キャロルが一度探索した遺跡に再び訪れたのか、それは聖遺物を発見できなかったからだ。

聖遺物の反応自体は有ったため、存在するのは間違いなかった。しかし、どれだけ探しても見つからず、同じところをグルグル回ってしまっていた。錬金術を使おうとしても遺跡内では何故か上手く使えず、諦めて対策ができるまで放置する事にしたのだ。

キャロルが再び訪れたのはダインスレイフを手に入れた後、計画を練っている内にその遺跡の聖遺物を危険性に気づいた。錬金術になんらかの異常をもたらすのが謎の聖遺物の能力ならば、自身の計画の最大の障害に成り兼ねないからだ。完全聖遺物ならば既に起動している可能性が有り、欠片であれば放置している間に回収されてシンフォギ

アへと変えられるかもしれない。

それ故に再び遺跡を調査しようと思ったキャロルだったが、知らぬ内に遺跡が観光地になっていた為に簡単には調査が出来なくなっていた。内部までは一般人は入れない為、そこまで行ければ気にせずに調査できるが簡単には行かない。

どうするか悩んでいたが何故か一日だけ入場禁止となっており誰も近づかない事になっていた。あからさまに怪しくはあったが放置しておく方が危険と思いキャロルは遺跡へと赴く事にした。その日が龍也達の遺跡に行く日だった。

何故この日、遺跡への入場が禁止されたかと言うと、龍也の父の手によって表向きは誰も龍也達の居る遺跡の探索をする者はいない事にされていた。後に龍也がその事について聞くと、父はこう言った。

「コネが有れば大抵の融通は効くもんなんだぞ」

その回答を聞いた龍也は「どんな人脈有るんだよ。このＯＴＯＮＡは……」と戦慄するのだった。

閑話休題。

龍也は「やばい」と思った。相手は記憶を、「想い出」をエネルギー源としている。「想い出」を奪われた人間の末路を知っている龍也からすれば正しく「泣きっ面に蜂」と言うしかない状況だった。

対してキャロルはと言うと、事前の調査ではこの日にこの遺跡に立ち入る人間は他にいないはずだった。とはいえ不自然ではあったため、どこかの国の調査隊辺りが来ると予想していたのだが、まさか家族連れで遺跡の奥、キャロルが先程見つけたばかりの隠し部屋にまで入って来る人間がいるなど想定外でしかなかった。

お互いに驚愕の表情を浮かべてから一息つくと、遺跡の奥にいたキャロルの疑問に龍也の父は答えた。

「ああ、ノイズが現れてね。逃げ道が他に無くてこんな奥まで来てしまったんだ」

「ノイズだと？　ちっ、面倒な……」

龍也は父の言葉に対して舌打ちをしたキャロルの顔を見た。本当に心底面倒くさいと言わんばかりに眉間に皺を寄せていた。その様子を見ていた龍也の頭に疑問が浮かんだ。龍也の知るキャロルであればテレポートジェムが有るはず。それを使って逃げれば良いだけなのに、何故面倒くさいと言う感情が浮かんでいるのか、それが分からなかった。

キャロルからすれば謎の聖遺物の影響で錬金術の類がまともに機能しないため、下手にテレポートジェムを使えないのだ。それ故にここから逃げ出すこともできなくなっている。その状況でもキャロルにとっては面倒の一言で済むのだが。仮にここでノイズにやられてもホムンクルスの肉体を一つ失うだけで、記憶を別の肉体に移せば良い。

そっちの方が転送事故よりましだと判断したからだ。
「君は何故ここに？」
「貴様等が知る必要はない」
取り付く島もないとはこの事か。龍也の父の質問にキャロルは答える気は欠片も無く、ただ部屋の中央に有る何かを忌々しそうに見ていた。
「？」
キャロルが父を見ていない事に気づいた龍也はその視線の先を見た。
そこには台座の上から生えている腕が有った。それは黄金のライン模様で飾られた白い龍の手。龍也の目には神々しく輝いている様にも見えた。
古びた遺跡にそぐわない光沢を放つそれを見て龍也はすぐに理解した。あれは聖遺物だと。
「龍也……大丈夫だからね、大丈夫だから」
母親の心配そうな声が頭に入らないほど夢中で見ていたことに龍也は母に無言で笑顔を向ける。単純になんと言えば良いのか分からないのもあったが腕を失った痛みで笑顔が歪まないようにするのが精一杯だった。
「これは……？」
「……」

龍也の父も聖遺物に気づき疑問の声を上げるがキャロルは何も答えない。キャロルにもまだ分かっていなかったのだ。聖遺物が何なのか。

「……いや、今はそんな事より――」

――音が聞こえた。それがノイズ特有の奇声である事をこの場にいる全員が気付いた。

「まずい！」

龍也の父は焦りの声を上げる。だが打開策は無く、このまま死を待つ以外の選択肢は無かった。この場から何故か逃げられないキャロルも次の体に移る事を覚悟するしかなく、この場にいる全員が諦めの表情を浮かべていた。

しかし、龍也は違った。

龍也は聖遺物の前に立っていた。この状況を打開するには聖遺物に頼るしかないと悟ったのだ。そして、聖遺物に手を伸ばそうとする――

「待て」

龍也を止めたのはキャロルだった。

「お前はそれを使ってどうするつもりだ？」

どんな聖遺物かも分からないのに手を出そうとする龍也に興味を持ったのだろう。その目に宿っていた感情は咎めるものではなく、むしろ何の感情も宿しておらず精々

「珍しい動物を見つけた」程度の興味本位の目だった。
「思いついた事が有る」
「ほう……それは何だ？」
「この腕、形的に右手っぽくない？」
「それがどうし――おい、まさか」
キャロルの疑問には答えたと判断した龍也は聖遺物を台座から取り外した。聖遺物と台座の繋がっていたところは台座に固定するためか鋭く尖っていた。
その形を見て龍也は笑いながら小声で呟いた。その声は近くにいたキャロルにだけ聞こえた。
「ちょうどいい」
龍也はその聖遺物を斬り落とされた右腕に突き刺した。失った右腕の代わりと言わんばかりに。
「――――ッ!?」
当然ながらそれは同時に想像を絶する痛みが龍也を襲う事となった。あまりの痛みに声も出ない。キャロルは龍也が実際にやるとは思わなかった行動に呆然とし、龍也の両親も自分達の息子の行動に戸惑いを隠せない。まさか傷口に聖遺物を突き刺すなどと言う馬鹿げた事を子供がやるなど想像の埒外でしかなく、止める事も出来なかった。

そんな周りの反応を気にする余裕もない龍也は痛みに耐えながら口をパクパクと動かす。

「一回、だけで、良い、動き、やがれ！」

龍也が叫んだ瞬間、聖遺物は光を放つ。黄金色の光が室内を照らし出す。まるで陽の光を浴びたかの様な温かさにその場にいた全員が包まれた。

やがて光が止むと、聖遺物と龍也の腕は変化していた。血が流れていた傷口は聖遺物によって塞がり、聖遺物は龍也の腕に合わせたかのように形を変え、龍の腕そのもの様な見た目から籠手の様な人の手に近しい形へと姿を変えていた。

龍也が行ったのは一言で言うと立花響の真似だった。第一期にて聖遺物との融合体となったように自身の体と無理矢理一つにし、第二期の様にガングニールを気合と根性で自らへ適合させた時の様に龍也は聖遺物を自身に適合させようとしたのだ。龍也にとってもこれはギャンブルでしかなかった。聖遺物をくっつけるのはまだしも、適合できるかどうかなど、どれほど強い意志が有ればできるか分からないのだから。

しかし、龍也は賭けに勝った。

「……なるほど、だいたい分かった」

何かを理解した龍也はノイズの奇声が聞こえる方に近づく。

「イメージすれば良いんだな」

龍也は拳を構え、一回深呼吸をする。

「……『バオウ・クロウ・ディスグルグ』！」

龍也が呪文を唱える。それは前世の龍也が愛読していた漫画の呪文。すると、聖遺物から黄金の龍の腕が現れた。龍の腕は徐々に巨大化していく。部屋の壁すら突き抜けて、更に巨大になっていくその腕にキャロルは驚愕の声を上げた。

「な、なんだそれは!?」

「うおおおぉぉおおお!!」

龍也は雄叫びを上げながら腕を振るった。それは、まるで来るのが分かっていたかのようにノイズが現れるのと同時だった。遺跡の壁を抉り取りながら龍也はノイズを龍の腕で切り裂いた。巨大な龍の腕による攻撃を受けたノイズは炭素となって消滅した。

「やった……！」

ノイズが倒せた事に龍也は安堵の声を上げる。だが――

「……なんかミシッミシッとかいう嫌な音が聞こえるんだけど」

『お前が遺跡の壁を削り取ったからだ！』

父親とキャロルのツッコミに龍也は周りを見る。目に映ったのは自身の技で土が剥き出しとなった壁だった場所。ノイズを倒す事しか考えてなかったために、その後の事を考えていなかった。

「やべーい」
どこぞの禁断のアイテムのようなセリフを言った龍也の額からは冷や汗が流れていた。見上げると天井に亀裂が走り徐々に広がっていくのが見えた。
「うおおおぉぉぉ!!」
まずいと思った龍也は叫びながら右腕を上げた。すると聖遺物から光の帯が現れ、周辺の壁に張り付いていく。そして、一瞬、一際強く輝くと壁も天井も補強されたのかの様に亀裂や爪痕が埋められていた。
「な、な……」
「よし！　脱出するぞ！」
「待てええええ！」
「うおおう!?」
ノイズが出なくなったのも確認した龍也は外に出ようとすると激昂したキャロルが龍也の首根っこを掴んだ。
「貴様は、貴様はいったいなんなんだ!?」
「なんなんだって聞かれても……」
龍也が起こした予想外の出来事の連続にキャロルは混乱しきっていた。それも仕方がない。龍也の使った技は仮に聖遺物を使ったものだとしても法則性が無く、同じ聖遺

物を使ったものだと思えないのだから。
補足しておくと龍也の腕になった聖遺物は〝応龍〟の腕だ。応龍の能力は水を操る能力が高く雨を降らせ、嵐を起こす事も出来る。そこから雷を操る事も出来る……のは龍也の知識に有るスーパーロボット大戦に出てくる応龍皇の能力だが。他にも年老いると黄龍になると言われており、黄龍は五行で土の属性である。
バオウ・クロウ・ディスグルグが使えたのは龍也の中の雷と金色の龍のイメージから、壁や天井が補強されたのは黄龍が土属性であったためだ。五行の土属性は万物を育成・保護する性質を表し、保護の力で壁や天井の崩落を防いだのだ。ちなみにキャロルが錬金術を使えなかったのはこの性質によって「想い出」の償却が出来なかったためだ。
だが、龍也もそこまで聖遺物について理解している訳でもないので説明できないのだが。
「ただのオタクとしか言えないんだが……」
「訳が解らない事を言ってないで説明しろぉおおお!!」
掴みかからんばかりの勢いのキャロルから逃げる様に遺跡から出ていく龍也。その二人を龍也の両親は後ろからゆっくり追いかける。
「あの子の腕は……」
「後で包帯を巻いて誤魔化そう。聖遺物を取り付けたとなれば国が、政府が放っとかな

い」
　母親の心配そうな声に父親はとりあえずの対処法を口にする。
「聖遺物に関しては見つからなかった事にしよう。こうしてな」
　そう言って父親は地面に拳を叩きつけると地震にも似た揺れが起こり、聖遺物が有った部屋の天井が崩落した。
「これで少しは誤魔化せると良いが……」
「なんとかお願いできませんか？」
　母親の表情は不安気で有ったが、同時に強い意志を持って父親に視線を向けていた。
「龍也がまだ幼い内は汚い世界に触れて欲しくありません」
「分かっているさ。俺の目の黒い内は龍也を利用させん」
　自身の妻の願いを決して裏切らない。父親の目はそう語っていた。
「お願いしますね。光太郎さん」
「任せろ」
　後日、聖遺物の事を隠しきって龍也達は家に帰宅した。同時にキャロルは龍也の腕となった聖遺物の研究と、場合によっては龍也ごと排除するために裃家に何度か訪れる事になる。
　それから有る事がきっかけでキャロルが龍也のところに訪れる理由が変わる事にな

る。

それが語られるのはまたいずれ……。

キャロルと二課

『君が奏くんを救ってくれた……』
「キャロル・マールス・ディーンハイムだ。好きに呼べ。それと敬った話し方はしなくていい。オレもいつも通りに話す」
　龍也が立花響と邂逅していた頃、キャロルは特異災害対策機動部二課と、正確にはモニターに映っている風鳴弦十郎と連絡を取っていた。
『ならばキャロルくん……改めて、奏くんを救ってくれて感謝する』
「気にするな。……正直言って実験に使ったようなものだ」
　一時的とはいえ天羽奏を人外に変えたのだ。キャロルからすれば罵られても仕方がないと思っているぐらいだ。
『仮にそうだとしても命を救ったのは君だ。我々に感謝以外の言葉は無い』
「……お人好しめ」
　弦十郎の言葉にキャロルは小さく呟いた。
「……さて、単刀直入に言うとオレ達の事を知りたいのだろう？　それにノイズを倒したシンフォギアではない兵器の事とか、な」

『……そうだな。誰とは言わないが知りたがっている者は多数いる』

そう語る弦十郎の表情には申し訳なさが浮かんでいた。

「かまわん。こちらもそうなる事は理解している。むしろ教える為に連絡したんだ。無論、全てを語る気はないが」

『それでも何も語られないよりは良いさ。可能な限り教えてくれ』

最初から教えたくないことが有ると宣言するキャロル。これは弦十郎相手だからだ。原作の世界、平行世界であるＸＤを含めて信用できる二課のＯＴＯＮＡ達。彼ら相手であれば下手に誤魔化すよりもある程度正直に言った方が良いと判断したのだ。

「そうだな……とりあえず貴様らの疑問に十、それだけ答えてやろう」

『……それ以上は答えない、と？』

「内容次第では譲歩してやる。だがこちらも何もかも話すつもりもないと言ったぞ」

そう言うとキャロルは二課の返事を待つ。暫し悩んだのか少し間を置いて弦十郎は口を開いた。

『わかった。それで構わない』

「では、すぐにでも始めようか。こちらも暇ではないのでな」

『はいは～い、まずは私、櫻井了子からね』

「……」

唐突に映った櫻井了子にキャロルの口元が僅かに動いた。しかし、動揺は一切表情には出さずにモニターを見続ける。

『あの全身鎧の男の子についてなんだけど……聖遺物よね？』

笑顔を浮かべながら質問を口にした了子。だが、聖遺物か否か聞いた時、一瞬だけ目が鋭く細まったのをキャロルは見逃さなかった。

「そうだ。あの鎧は聖遺物だ」

『……詳細を聞いても良いかしら？』

「二つ目の質問とカウントして良いのなら、な」

キャロルの答えに了子は周りを見る様に視線を動かす。他の二課のメンバーにどうするか視線で確認しているのだろう。

『良いわ。それで答えてくれるかしら？』

「あの聖遺物の名は『応龍』。中国神話の神獣だ」

『応龍？　見た目はそんな風には見えなかったけど……』

「俺が改造してノイズと戦えるようにした結果だ」

内心、まだ未完成だが、とキャロルは愚痴を浮かべる。

『どんな改造したか知りたいのだけど――』

「止めとけ。正直言ってお前が作ったシンフォギアと比べたら未熟にも程が有る」

現状、応龍は鎧として無理矢理纏っている状態だ。ノイズと戦えるのは応龍自体がノイズと戦える機能を持っているため。龍也は融合症例となっているが立花響と違い元がシンフォギアではない。シンフォギアを纏えないのだ。ならば他のものをと言いたいが、少なくともライダーシステムはまだノイズと戦えない。もし、ノイズと戦えるならＯＴＯＮＡに変身させて全部解決してもらえるのだが。

『なら、ノイズを斬った剣は？　あれも聖遺物なのかしら？』

「あれはオレが作ったノイズを倒すための武器だ」

『なんだと!?』

キャロルの言葉を聞き弦十郎が驚愕の声を上げる。

『それを量産することはできるか!?』

「あれも未完成でな……」

『それでも構わない！　それがあれば――』

「使えても三回」

『……？』

「ノイズを倒せる回数だ」

キャロルの創ったメダジャリバーはセルメダルの力に耐えきれていない。オーズが使う物とは比べ物にならないほど耐久力が低い。

「それも剣を振った範囲に限定した場合だ。」
『聞いた話ではもっと広範囲のノイズを倒したって聞いたのだけど……』
「残念だがコンサートの時の様な広範囲はそもそも使う前に壊れる可能性すらあるし、使う事ができたとしても莫大なエネルギーに耐えきれず一回しか使えん」
　実際、龍也が使った物もガイアメモリと同時に使用した為か持ち帰った後に軽く叩くと砕け散ってしまったのだ。現在のメダジャリバーではセルメダルとガイアメモリの力に耐えきれない。その上、龍也に渡したのはできるだけ頑丈に創っていた物であり、それでも一回が限界だった。
　今キャロルが説明した通り、威力をそのままに範囲を狭くすれば使われる力も少なく済むため、使える回数を増やすことができる。具体的には広範囲はセルメダル三枚、限定すればセルメダル一枚に。
　それにキャロルはガイアメモリを二課に渡したくない。正確には了子に。だからルナメモリを使わなければノイズのみを斬るのが今の処はできないメダジャリバーの広範囲攻撃は使わない方が良いのだ。
「それでも良いなら一本ぐらいならやるぞ。無論、タダではやらんが」
『それなら政府の方に自衛隊の装備として買い取る様に動いてもらおう』

『正直、日本以外の国も欲しがると思うけどね』
「創り方は教えてやるからそっちで量産しろ。オレは忙しい」
キャロルにとって優先すべき事は他にあるため、メダジャリバーの量産をする気は無い。
『簡単に創れるものなのかしら?』
「一応、科学技術のみでも創れる。普通の剣として使うなら問題無し。さっきも言ったがノイズを斬るなら三回までだ」
お前なら余裕だ。と、思いながらキャロルは了子を見ていた。

怪人とロボ

「さて、あと三回質問に答えてやろう」
『回数減っていないかしら？』
「それ相応にお前らの疑問には答えたつもりだが？　質問のつもりは無かったかもしれんがな」
　再び、鋭い目つきになる了子。しかし、すぐに笑顔を浮かべる。
『……まあ、仕方がないわね。それじゃ次の質問――あの怪人？　は何か教えてもらえないかしら？』
　予想通りではあるが、ヤミーについての質問が来た。キャロルにとってこれは無視できない質問だ。何せ情報を集める為とは言え政府の要人の護衛としてヤミーを派遣しているのだ。仮にこの場を誤魔化したとしてもセルメダルの情報を完全に隠す事も出来ない。おまけにコンサートで使ったセルメダルも完全に回収できたとは言えない。
「オレが創った人工生命体……ホムンクルスと似た様な者だ。一般的にイメージされているのとは違うが」
『あれが……ホムンクルス……？』

「薄いが自我も有る。オレはヤミーと呼んでいる」
『ヤミー？　英語で〝美味しい〟って意味よね……』
「意味は気にするな」
　メダルを集めたいグリードや錬金術師にとって美味しい存在だからそう名付けられたのだろうし。……たぶん。
「ちなみに――」
　キャロルは懐からセルメダルを取り出した。
「肉体はこのセルメダルで出来ている」
『セル……細胞ってことね』
「ちなみにお前らが欲しがっている剣のエネルギー源だ」
『ええ!?　そのメダルが!?』
　手に持ったセルメダルを弾きながらキャロルは言葉を続ける。
「欲しいならこれもやろう。そちらで量産はできないだろうからな」
　実際は人間に投入すればヤミーとなって増える。しかしフィーネに必要以上の情報は与えたくないために言わない事にした。調べれば分かる事ではあるが、隠しとけば調べるのに労力を使う。苦労して調べたセルメダルの力を知れば、もしかしたらデュランダルの代わりにカ・ディンギルに使われるかもしれない。立花響が融合症例になる可能

性が高い以上、キャロルとしては可能性が低くともデュランダルが使われない様にしたいのだ。デュランダルを握った響が暴走して誰か死ぬかもしれない。既に原作とは違うのだ。この先どうなるかは未知数、原作に近いのかＸＤ時空か。無意味かも知れなくとも少しでも都合が良くなるように小細工をする。それ故に挑発じみた言葉も口にする。〝お前にはセルメダルは創れない〟、暗に櫻井了子に向けて。

キャロルのその意図が伝わったのか了子が眉に皺を寄せるのが一瞬だけ見えた。

（ふむ……）

その様子にキャロルは思う。〝櫻井了子の機嫌が悪い〟と。先程からフィーネとしての顔が度々浮かんでいる。感情が、いや、イライラが抑えられないと言ったところだろうか。

（あの様子だと嫌がらせは上手くいったようだな）

キャロルは自分の策が成功した事を悟り心の中で笑みを浮かべた。

「さて、ヤミーについてもういいだろう。他に聞きたい事はあるか？」

自身の策の結果が知りたくなったキャロルは話を進めさせることにした。

『そうね……なら、あのロボットが何なのか知っているのかしら？』

「ふむ……」

この質問が来る事も予想していた。キャロルとしては質問されなければ逆に聞いて

いただろう。
（少なくとも二課は把握していない。櫻井了子は……どっちだ？）
キャロルとしても完全に把握できているわけではない以上、情報の共有がしたい。
「詳細は不明だ。謎の物質で構成されている事とオレの命を狙ってきている事ぐらいしか分からん」
それ故にキャロルは正直に知っている事だけ話した。
『命を……？　何故そんな事を？　あ、待って。今のは質問じゃないから』
「別に構わん。それにオレも知らないとしか答えられないのでな」
心当たりはあるが、しかしキャロルはその言葉を口にはしなかった。
『ふむ……ならば、こちらでも情報を集め、キャロル君にも報告しよう』
「……良いのか？」
弦十郎の提案にキャロルは一瞬、呆けてから確認の言葉を口にした。
『かまわん。奏君達を助けてもらった恩を少しでも返したい』
「そういう事ならば遠慮なく利用させてもらおう」
何者が何の目的で動いているのか。映画の２６本のガイアメモリとは別で唯一創っていたメモリーメモリを使って響の記憶を覗き（ついでに事件当日数時間の記憶を封印）確認しても服装の所為で顔も性別も分からなかった。少しでも手が欲しいのが正直

なところ。言葉通りに利用させてもらうことにした。
「次で最後だが……何かあるか？」
『なら俺から一つだけ聞きたい』
「なんだ？」
　弦十郎は画面越しにキャロルを真剣な表情で見つめる。
『君の目的はなんだ？』
　その質問を聞いたキャロルは不敵に笑い――
「死んでほしくない奴らがいる。その為に動いているだけだ」
　はっきりと言い切った。

二人目の転生者

「ただいまー」

コンサートでの事件から暫く経ち、退院した龍也は家に帰ってきた。久しぶりの自宅に母と共に帰ってきた龍也は家に居るであろうキャロルとエルフナインに自身の帰宅を知らせる。

「いやーやっぱり自宅が一番――」

落ち着く。そう言いかけた龍也はリビングの扉を開けて見えた光景に固まる。

「あ、お帰りなさい。お邪魔しています」

「ただいま。紫ちゃん」

何故なら見知らぬ少女がテレビゲームをやっていた。ちなみにプレイしていたのはスーパーロボット大戦だった。母は普通に挨拶している。

「誰だお前は!?」

「地獄からの使者！　スパイダー〇ッ!!」

その気は無かったが龍也のネタフリに謎の少女はノリノリだった。

「えー改めまして、初めまして唄川紫（うたかわゆかり）と言います。紫と呼んでください」
「えーと袴龍也。よろしく。俺も龍也で良い」
紫と名乗った少女に戸惑いを隠せない龍也。何故ならその見た目が前世で見覚えが有ったからだ。
「失礼を承知で聞くけど……〝結月ゆかり〟って名前に聞き覚え有る？」
「あ、やっぱり解りますか」
そう。紫の姿はＶＯＣＡＬＯＩＤでＶＯＩＣＥＲＯＩＤの『結月ゆかり』そのものだった。声も全く同じで龍也は前世に見ていた動画を思い出してしまう。
「私のこの姿が解るならあなたも転生者で間違いないですね」
「あ、ああ。俺も転生者だ」
「ゲームのラインナップでなんとなくそんな気はしていました」
龍也の特典は前世の物なのでこの世界に本来存在しない物である。それを見て紫は龍也が転生者であるのではと判断していた。
「あれ？　父さんと母さんから聞いてなかった？」
「え？」
「二人には既に話してあるから」
ちなみにその時の両親の反応は、父は「前世の経験を活かしてより高みを目指せるな

！」、母は「あら、それならあまり子供扱いするのも良くないわね」と言った感じだ。龍也の感想は母よ、それだけで良いのか？　いや助かるけど。父よ、俺をどうする気だ？

その後、父による見た目年齢に合わないスパルタな特訓を受ける事になった。父曰く、「これくらいしなければノイズから逃げ切れないぞ！」だそうだ。その結果、龍也はＯＴＯＮＡの領域に片足を踏み込んでいる。

「そうですか……仲良しで羨ましいです」

「紫の両親は――」

「私の両親は話す前に亡くなったので」

「そうか……」

空気が暗くなってしまい龍也も何を話したら良いのか悩む。

「まあ、あの二人は気づいていたかもしれませんけどね。なんせクリスちゃんと同い年なのに『お姉ちゃんなんだからクリスちゃんをお願いね』と言い残していますからね」

「そうか――んん？」

紫の口から出た名前に思わず目を見開く。

「なあ、もしかして――」

「あ、私は雪音クリスちゃんの幼馴染なんですよ」

「マジか……」

「マジです」
目の前の転生者も原作キャラに関わっている事に驚愕で呆然とする龍也。すると――
「その所為で予定外の結果になったがな」
溜息を吐きながらキャロルが現れた。
「予定外？」
「本当ならフィーネより先に雪音クリスを確保するはずだった」
その為にヤミーを用意し、キャロルの仲間だと思わせないためにヤミーにガイアメモリを使い見た目をドーパントに変えてクリスの下に向かわせた。
「向こうは紫を確保して雪音クリスに対する人質にするつもりだったんだろうな。真っ先に紫を確保しようとしてな」
「浚われそうになっている紫をヤミーが助けた、と」
「代わりに雪音クリスは連れて行かれた」
だいぶ厄介な状況に龍也も溜息を吐いた。
「……どうなっていると思う？」
「ドーパントは紫を連れ去った悪、と認識しているな」
「間違いなくフィーネにとって都合の良い情報を刷り込まれていますね」

「紫を取り戻すには私の言う通りにしなさいって感じだろうな」
　三人揃って溜息を吐いた。
「……ところで、雪音クリスが帰国したのはコンサート前だよな？」
　空気を変える為に龍也が別の話題を振る。
「そうだが？」
「紫は今まで何処に隠れていたんだよ？　帰ってきたらゲームしてるし、母さんは当たり前の様に挨拶してるし」
「お前が入院する直前までチフォージュ・シャトーに匿っていた」
　龍也の予想通りの答えだった。まあ、他に匿う場所などないが。
「すぐに袴家に匿ってもらうのはまずいからな。表向きは行き倒れていた処をお前の母親が保護したことになっている。ついでに誘拐されてから保護される直前までの記憶は無いと言う事になった」
「よくそれで通ったな？」
「お前の父親に言え。『ちょっと待ってろ』と言ってどっかに電話したらここで暮らすことになっていたからな」
「いやぁ～、あれはもう『その時、不思議な事が起きた』としか言えませんでしたね」
　龍也の父親が動いた結果らしい。実際、龍也の父の知り合いにはＯＴＯＮＡとしか言

えない人が多い。ノブヒコとかホンゴウとかカザミとか。
　我が父ながら恐ろしくも頼もしい。龍也はそう思った。
「そういえば、紫も転生者なら何か特典を持ってるのか？」
　話を変えたい龍也は別の話題を質問した。
「ふふふ、そうですよね。気になりますよね」
　龍也の質問に嬉しそうに笑みを浮かべる紫。その姿は自慢したくて仕方がないと言った様子だ。
「では――お見せいたしましょう！」
　そう言って紫は懐から蛍光グリーンと蛍光ピンクの派手なアイテムを取り出した。それを装着した紫は更にグリーンとオレンジのアイテムを取り出す。
「それは!?」
「変身！」
『ダブルガシャット！』
　手に持ったアイテムをベルトに差し込みレバーを引くと音声が流れ出す。
『レベルアップ！　マイティブラザーズ！　二人で一人！　マイティブラザーズ！　二人でビクトリー！　X！』
「仮面ライダーエグゼイドダブルアクションゲーマーレベルX！」

「おおー」
「更に……だーい変身！」
バックルのレバーを開閉し再度変身する紫。
『ダブルアップ！』
『俺がお前で！　お前が俺で！　ウィーアー！　マイティマイティブラザーズ！　ヘイ！　ダブルエーックス！』
『ノーコンティニューでクリアしてやるぜ！』
予想通り仮面ライダーエグゼイドダブルアクションゲーマーレベルＸＸＲとＸＸＬに分離する紫。
「……一つ質問良いか？」
『なんでしょう？』
「どっちも紫で良いのか？」
「あ、いえ私ＸＸＬが紫です」
「……じゃあそっちは？」
「あ、どうも紫ちゃんに感染しているこの世界唯一のバグスターです。燈（あかり）とお呼びください」
「お、おう」

会話しながら紫と燈の二人は変身解除する。するとＸＸＲだったバグスターの姿を見て龍也は確認の質問をする。
「〝紲星あかり〟？」
「あ、はい。そうです」
またもやＶＯＩＣＥＲＯＩＤにそっくりの姿に呆れる龍也。
「なんでこう、見覚えが有る姿なんだ？」
「ああ、それなら単純に私達を転生させた神の趣味ですよ」
「は!?」
予想外の事実に驚く龍也。当然だろう。龍也自身も見た目はペルソナ５の主人公と見た目そっくりなのだから。その理由が神の趣味だとは知りたくなかった。
「いや、転生前に見た目と性別はどうなるか聞いたら『選ばなかった場合はこっちで好き勝手に決める』とか言っていたので。まあ、前世の記憶も知識ぐらいしか残らないとの話でしたので特典は生き残ること優先で決めたんですけどね」
親によって決まるとかではなく神の気まぐれで容姿が決まると言う不安しか感じない情報を聞いて、そう考えられる紫に思わず尊敬の目を向ける龍也。
「まあ、いいや……。もう一つ聞いても良いか？」
「なんでしょう？」

「他のガシャットは有るのか？」
「当然！」
そう言って紫はドヤ顔して金色のガシャットを取り出す。
「エグゼイドなら当然！　これを貰わない理由などありません！」
「ハイパームテキか」
「これが有ればノイズなど怖くありませんからね！」
確かにムテキゲーマーならばベルトが壊されでもしない限りピンチに陥る事は無いだろう。だが同時に疑問が浮かぶ。
「それが有るなら雪音も守り切れたんじゃないか？」
変身する隙も無かったのだろうか？　と考えながら紫に質問する龍也。
「そ、それは――」
「そいつはマイティブラザーズとハイパームテキ以外のガシャットを持っていない」
「……え？」
引き攣った笑みを浮かべる紫の代わりにキャロルが回答する。その答えに龍也は一瞬、言葉を理解することができなかった。
「いやいやいや、なんでその二つだけなんだよ!?」
「転生者は三つの特典を貰えるのは覚えているか？」

「当然。そもそもキャロルにそれを教えたのは俺だろ？」
ちなみに龍也の特典は
1．▪四次元ポケット（本人の任意で開閉）
2．▪ポケットの中身をラノベ、漫画、ゲーム、アニメや特撮のＤＶＤまたはＢＤにする
3．▪新しく作られたものを含めて補充、追加していく
というむしろ三つで足りるのか、聞かれんばかりの内容である。戦闘？　最初はする気など無かったと言っておこう。
「紫の場合、一つ目がマイティブラザーズＸＸガシャット、二つ目が自身に感染しているバグスターの相棒が欲しい。三つ目がハイパームテキガシャット」
「あれ？　それだと――」
「お前の予想通りだ。マイティブラザーズでは無敵モードすら使えん」
「意味無いじゃん！」
龍也の言葉に紫は目を背けて口笛を吹いている。燈は苦笑し、キャロルは天を仰いでいる。ちなみに本来ならゲーマドライバーすら無くガシャットだけの状態だったのだが、流石に可哀想に思ったのか特別サービスで付いてきたらしい。言われるまで気づかなかった紫に神は残念なものを見る目を向けていたらしい。最初からエグゼイドの変

身アイテム一式にしとけばよかったのだから残念ながら当然としか言えない。
「だからこいつは今までレベルXの状態で捕虜の状態から脱走し雪音クリスを抱えて逃げ続けていた処をイチモンジとか言うカメラマンに保護されたらしい」
「まあ、この世界じゃOTONAに遭遇でもしない限りは逃げ切れるか……」
「ふ、二人共！　そ、そんな可哀想なものを見る目で見ないでくださーい！」
「あはは……」
龍也とキャロルの「こいつ大丈夫か?」と言わんばかりの視線に紫は半泣きで両手両膝をついた。燈は遠い目をしながら乾いた笑いしか出ない。
「まあ、これをサンプルに他のガシャットを創ってやるから我慢しろ」
「すいませんがお願いします」
キャロルがマイティブラザーズXXガシャットを持って行き、燈が頭を下げてお願いしていた。
こうして袴家に二人の同居人が増えるので有った。後日、クラスメイトにその事がばれた龍也は嫉妬した男子生徒達に追いかけられる事となるが特に語る予定は無い。
「龍也さん」
「これからお世話になります」
『コンゴトモヨロシク……』

「その言い方止めろ」

変身

「マジでどうしろと……？」

その日、龍也は響に「借りたままのゲーム返します！」と連絡を貰い響の住まう町へとやってきた。本人としては転生特典でただで手に入れたゲーム――それも人に譲渡したり故障した場合自動的に補充される――なのでそのままあげても良かったのだが、響の方が「ただで貰うなんて出来ません！」と言うために回収しに来たのだ。

ちなみに異性の家に行くのをお互いに躊躇し、三年生で時期的に授業が短縮されている龍也が響の通う中学に行く事になったのだが――

「まさか、目の前で路地裏に連れ込まれるのを見る事になるとは……」

この日、龍也は知らないことだが立花響の学校生活は悲惨の一言だった。

キャロルがヤミーを大量に使役し救助に使った結果、世間では『大量に人が死んだのは怪人が助ける人を選んだ所為』などと言われている。これはむしろキャロルが龍也の父親と協力して情報操作を行った為だ。知名度の無いヤミーを矢面に立たせ、悪印象を持たせる事で生存者から目を逸らさせるためだ。キャロルがセルメダルを集めていたのは龍也曰く「シンフォギア世界のマスゴミは信用できない」との事だったので悪役代

わりにヤミーを用意する為だ。結果、面白いぐらいにマスコミはヤミーに釣られ、生存者の悪評は最低限で済んだ。

その後、キャロルが調べた結果では響の父親の会社の方は取引先の社長令嬢は無事だったらしく、むしろ取引先の社長と意気投合してプロジェクトも成功、会社内の地位は万全となった。

問題は響の学校だった。原作通り男子生徒が死んでいた。原作通りに男子生徒のファンのヒステリックな叫びによって校内では響へのイジめをまるで「正しい事」かの様に行っていた。ここから先は予想でしかないが本来なら父親である洸の事も有って響はこの時期かなり落ち込んでいたはず。それ故にイジめる側も溜飲を下げていたと思われる。だがこの世界では洸の問題は発生せず、生存者に向けられたバッシングもかなり控え目だ。家では平穏に過ごす事が出来る。響の性格上、両親にイジメの事も隠していたが、純粋に無事を喜んでくれる家族と親友、心ない中傷によって生まれる後ろめたさも無い響はイジメに屈せず、その明るさを維持し続けていた。その事に苛立った一部の生徒が遂に超えてはいけない一線を越えてしまった。

その現場を龍也は目撃した。

「……とりあえず様子を見るか」

状況が解らない以上、行動はできない。もしかしたらただのドッキリかもしれない。

そう考えながら龍也は路地裏を覗き込む。
「……？　いない？」
いや、よく耳を澄ますと声が聞こえる。更に奥を見ると男達に車に連れ込まれている響と未来が見えた。
「やべえ!?」
さすがに冗談では済まない光景に龍也は懐から一本のメモリを取り出す。
『ＡＣＣＥＬ！』
スイッチを押してベルトに取り付けられたマキシマムスロットに装填し叩く。
『ＡＣＣＥＬ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「うおおおおぉぉぉぉ!!」
車が動き出したのと同時に龍也はアクセルメモリの力で車を追いかけた。
車を追いかけている内に辿り着いたのは廃工場だった。いかにも場所に龍也の脳内に浮かぶ嫌な予想が現実味を帯びて来てしまったと頬を引き攣らせた。
「おお、思っていた以上にレベル高い」
「こいつは役得だな」
壁に耳を付けると「こんな場所に人は来ないだろう」と言う油断からか嬉しそうに大声で話し合う男たちの声が聞こえてくる。

「こいつらなんでこんな目に遭ってるのか解らないって顔してるぜ」
「ノイズに襲われた時に好きだった男が死んでクラスメイトの女が生き残ったのが気に入らないだとよ。恋人でもないのによぉ」
「女の嫉妬は怖いねぇ」
「……」
　男達の会話を聞いた龍也は顔から表情を消す。無言でスマホを取り出して電話をする。
「もしもし、警察ですか？　男達が廃工場に女性二人を拘束して連れ込んでいるのを目撃しまして……。はい、はい。場所は――です」
　そこまで連絡すると龍也はスマホをポケットに入れて別の電話――スタッグフォンを取り出す。
「あ、もしもしキャロル。ちょっと厄介な事になった。今俺が居る場所わかるか？　うん、それじゃあ誰か――いや、ガリィをこっち来させてくれ」
　連絡を終えた龍也は再び壁に耳を付ける。
「撮影準備完了！」
「どっちも上玉だからな。目一杯楽しむとしようぜ？」
　もう時間が無い。念の為にガリィを呼んで正解だったか。と、嫌な予想が当たった龍

也は腰のベルトに触れる。すると中心に赤い風車が回る白いベルトが現れた。
「変、身」
そう呟いた龍也の服装は黒いライダースーツに赤いマフラー、ブルーグリーンのグローブとブーツ。そこに何時の間にか持っていたダークブルーのマスクを被りマスクの顎をセットする。それと同時に近くの扉を思いっきり蹴った。
「なんだ!?」
突然の轟音に驚いた男達が入口の方を向いた。激しく叩きつける音が響く度に扉が形を歪めていき、爆音と共に扉はUの字に曲がり吹き飛んだ。
「ひ!?」
金属製の扉が拉げた事で男の一人が悲鳴じみた声を上げる
扉が外れた入口からゆっくりと人影が現れる。逆光で全容が見えないが目と思われる部分が桜色に光る。
「な、なんだお前は!?」
「何が目的だ!?」
男達の疑問の声に人影は答えた。
「正義。仮面ライダー1号」

自らを正義であると。

改造人間（ただしどんな改造かは言っていない）

（さて、どうするか）

龍也は一号（Ｔｈｅ　Ｆｉｒｓｔ版）の姿になっている。

だが別に改造人間な訳ではない。

ぶっちゃけ、ただのコスプレである。

もう一度言う。

ただのコスプレだ。

ベルトの機能は自動着替えマシーンでしかなく、ヘルメットと服装を転送しているだけだ。見た目はそっくりなだけで改造など一切無い。ベルトが現れたのもキャロルから貰ったベルトの機能でしかない。

裃龍也は改造人間……ではない。むしろ昭和ライダーで言うならライダーマンである。

別にＩＱ２００は無いが。

ちなみにジーンメモリの能力を使い変身時のみ改造人間化するアイデアも有ったが別にノイズと戦えるようになる訳でもないので止めた。

閑話休題。

龍也が変身したのは変装の為だ。キャロルと父のおかげでコンサートの件で自分に疑いが向くことは無くなった（ほぼ無理矢理だが）。この上で目立つ訳にはいかない。それ故にキャロルが用意した物がこの変身ベルトだ。本来ならこんな物を用意する必要は無いのだが、龍也には特典の所為で呪いの様なモノを掛けられている。

それは――巻き込まれ体質、と言うべきものだ。

龍也は特典を選んだ時点で原作に関わる気はゼロだった。自分が関わって原作より良い結果になる保証などない。むしろ悪い結果になるかもしれない。そう考えていた龍也は原作とは違うところでモブキャラとして過ごそうとしていた。だから戦闘力はいらない。だから特典も完全に趣味の物にした。

だが――

「さすがにそれは面白くないよね」

龍也が転生する直前、神は言った。

「僕は言ったよね？　次に転生する世界は『戦姫絶唱シンフォギア』だけど前世の記憶と特典はいるかい？　って」

それはある意味、自業自得とも言える結果だった。しかし、もしも――

「君はそれに『はい』と答えた。だから望み通りにした」

可能ならば――

「それじゃ次は僕の望みを叶えてもらうよ。楽しませてくれ」

文句を言わせてほしい。

「君には嫌でも原作キャラが関わるトラブルに近づくようにしてあげるね」

最初に言えよぉ!!

『人が人を助けていいのは、自分の手が直接届くところまで』だっけ？　君が最も感銘を受けた火野映司のセリフ。じゃあ手の届く範囲で事件が起きても黙って見ていられるかな？」

この邪神がぁあああああ!!

以上の出来事が有り、龍也の近くでは何らかのトラブルが起きる。幼い頃にキャロルに遭遇したのもこれの所為と言っても良い。

閑話休題。

龍也は構え工場内を見渡す。ピアスや染めた髪などが目立つ男達十五人ぐらいが縛られ薄汚れたマットの上に転がされている響と未来の周りを囲んでいる。

（まずは――）

龍也は前傾姿勢となり下半身に力を込める。

（まっすぐ行ってぶん殴る！）

先頭に立っていた男に向けて跳躍、勢いそのままに男の腹に向けて拳を叩きこんだ。
「がっ!?」
男は体をくの字に曲げて吹っ飛び、響達の頭上を越えてそのまま壁に叩きつけられた。
「なっ!?」
「まっちゃん大丈夫か!?」
「ゲホ！　ゴフォ！　ゲェエエ！」
殴られた男は胃の内容物を吐き出す。痛みに耐えられないのか腹を抑えている。その様子を見て男達の表情は恐怖から怯えている者と仲間をやられた怒りで顔を歪める者、何が起きたか理解できずに戸惑う者に別れていた。
対する龍也はと言うと――
（あれー？）
予想以上に男が吹っ飛んだことに戸惑っていた。
無理もない。
龍也がまともに対人戦を行ったのはこれが初めてなのだ。組手や模擬戦などはよく父親やヤミー相手に行っている。だが、はっきり言おう。
それを基準に殴ってはいけない。

ヤミーは言わずもがな、龍也の父親はＯＴＯＮＡである。さすがに震脚で地面を隆起させる事が出来る風鳴弦十郎ほどぶっ飛んではいないが、その肉体は鋼の如し。ファラ曰く「剣が刺さらないのですが」レイア曰く「コインが金属音を立てて跳ね返るのだが」ミカ曰く「カーボンロッドを素手で受け止めていたゾ」ガリィ曰く「ってか本当に人間ですか？」と言われてしまうほど防御面が規格外である。本人は「鍛錬し続けたおかげだ！」との事。鍛えただけで剣が通らなくなるのはどういう理屈だろうか。訂正、やはりぶっ飛んでいる。

閑話休題。

（もうちょっと手加減しないとまずいか）

いくら殴るのに躊躇しない相手とはいえ龍也にも慈悲の気持ちはある。内蔵に損傷を与えるのは気が引けた。手足の骨を折るぐらいなら躊躇無くできるがそれはそれである。

「このぉ！」

固まっていた龍也に向かって一人殴りかかってきた。龍也は冷静にその拳を掌で受け止める。

「ぐぅ⁉」

そのまま男の拳を掴み腕力だけで投げる。

「がぁ!?」
　男は背中から地面に落ちて痛みに悶える。
「てめぇ!」
　更に三人襲い掛かってきたのを跳び回し蹴りで撃退する。すると――
「あ」
　骨を砕いた感触が足に伝わってきてしまい、龍也は思わず声を上げた。
（もっと手加減できるようにならないと）
　力加減できていない事に脳内で頭を抱える龍也。
（このままグロ画像を生産し続けていたら響達のトラウマになるよなぁ……）
　その悩みは響と未来の心の心配だった。男達？　考慮する必要は無い。殺す気は無いが。
（これはあれだな……投げるか）
　殴る蹴るは手加減が難しいと悟った龍也は投げに徹する事にした。これならばやりすぎないという判断だ。
「調子に乗りやがって……!」
　そう言って男の一人がナイフを取り出した。それに追従するように五人の男が同じようにナイフを取り出す。

（あ、やべ）

凶器を使ってくるのは予想できたのでそこまで驚かない。龍也の心配は無傷で乗り切れない事だ。刀傷を負えば正体がばれる可能性が高い。まあ、メタルメモリを使えば良いだけだが。そう思った龍也は手元にメモリを出そうとする。

「おらぁ！」

その動作を見た男は龍也に向かってナイフを振り上げる。龍也は男の腹に掌底を当てて対応する。だが背後からもう一人近付きナイフを突き出す。それに気づき振り返るが龍也の腹にナイフが刺さる。

「ん――！」

ちょうどその場面を見ていた響が悲鳴を上げる。悲鳴を聞きながら龍也は痛みに耐えつつ男の顔を殴った。

「ごべぇ!?」

歯が何本か抜けていくのを見ながら龍也は腹の状態を確認する。

（っつう……！　怪我は――あれ？）

そこで龍也は気づく。痛みこそあるが血が流れていない事に。

（スーツの表面は傷ついてるけど……腹まで届いていない？）

この時、龍也は知らなかった。この一号スーツ、耐久性、防弾防刃性能が高い。何故

か？　それはこのスーツは風鳴弦十郎に着せる事も考えているからだ。震脚しても傷一つ付かない性能を目指した結果、かなりの防御性能を誇っている。けっして龍也が心配だから性能増し増しにした訳ではない。ないったらない。有ったとしても九割だ。

ちなみにヘルメットも銃弾など軽く弾く。龍也は当然知らない。

（なんでか解らないが、バレてない内にっと）

殴り倒した男が持っていたナイフを拾う。その様子を見ていた男達は武器を持った事を警戒し何人かが響達を人質にしようと近づく。

気づいた龍也は跳んだ。

「ライダァァァ……ジャァァァンプ！」

天井に向かって。

龍也の大声に男達は固まり龍也を見る。龍也はまるで天井が地面かの様に手足を付けていた。重力を無視しているように見えるが握力で体を支えているだけである。伊達にＯＴＯＮＡに鍛えられていない。

「ライダァァァ……パァァァンチィィィ！」

勢いよく天井を蹴り男達に向けて拳を振り上げて落下する。落下地点にいた男は何とか回避する。しかし、龍也の狙いは殴る事ではない。

「……よし」

男と響達の間に立つ事だ。龍也は響に近づきナイフでロープを斬る。
「てめぇ！」
「おっと」
近づいてきた男を蹴り飛ばす。他の男達を巻き込んで吹っ飛んだ。
「これで……よし」
「あ、ありがとうございます」
未来を縛っていたロープも斬り龍也は漸く二人を解放することに成功する。
「お礼は良いから早く避難しろ」
「逃がすと思ってんのか？」
声のした方を向くと男達が廃材など工場内に有った物を持って遠巻きに見ている。
おそらく出入口を塞いで響達を逃さないようにしているのだろう。
「ど、どうしましょう……」
「ふむ……」
残り九人。響と未来を守りながら闘うには人数が多い。守りきれない。龍也はそう判断し、力技に出た。
「よいしょっと」
最初に殴られ壁際で蹲っていた男を抱えた龍也は――

「ソイヤー！」
　男達に向け思いっきり投げた。
「ぎゃあああああ!?」
「まっちゃん!?」
「てめえ、血も涙も無いのか!?」
　お前らが言うな。そうツッコミたくなる言葉を無視して龍也はメモリを取り出す。
『ＵＮＩＣＯＲＮ！』
　そして本来１号には付いていないはずのベルトの横に有るマキシマムスロットに挿して叩く。
『ＵＮＩＣＯＲＮ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「今度こそ……ライダァァアパンチ！」
　叫びながら龍也は壁を思いっきり殴った。ユニコーンメモリの力で強化したライダーパンチによって壁は崩れて人一人は余裕で通る穴が開いた。
「よし、ここから出るんだ」
『は、はい』
　龍也のやった事に呆然としていた響と未来は言われるがままに壁に開いた穴から出ていく。

「……って逃がすか！」

同じように呆然としていた男達は龍也達に襲い掛かろうとするが――

「お？」

パトカーのサイレンの音が近づいてくるのが聞こえてきた。

「やべぇサツだ！」

「ずらかるぞ！」

「逃がすかよ」

そこから響達を救出し必要以上に手加減する理由が無くなった龍也による蹂躙が行われた。警察に捕まった男達の状態はさまざまだったが共通していたのは骨が必ず部位関係なく折れるか砕けているかだけだった。

その後。

「いやー無事でよかった」

「ご心配お掛けしました」

「おかげで助かりました」

響達には龍也は車に連れ込まれているところを見て警察に連絡して待っていた事になった。ちなみにアリバイはガリィが予備のダミーメモリを使って誤魔化した。なぜガリィか。一番演技が上手いと龍也が思っているからだ。

「仮面ライダーって名乗っている奴に助けられたとか聞いたけど」
「はい！　すごかったです！」
「……」
　どうやら響に正体はばれていないことに内心ほっとする龍也だったが、気づいていなかった。最も警戒するべき相手に疑われていることに。
（声、似てるよね……）
　だって声色を変えてはいたが時々素が出ていたし、変声器も使っていなかったのだから。
（まあ、黙っていてあげよ）
　後に正体が明かされる日まで未来は気づかない振りするのだった。

事件後

響達の誘拐事件後、男達に依頼した女子生徒は少年院行きになった。男達に対して龍也が脅しをかけていたからか素直に自供したらしくスムーズに進んだ。また事件の事も有り、二の舞になりたくないのかイジメも収まった。響達に対する態度は変わっていないが、少なくとも直接的な行動は無くなった。

事件の影響で若干の人間不信が見られた響と未来だったがある都市伝説が流れ始めた事で落ち着きを取り戻した。

その都市伝説とは『仮面ライダー』だ。

事件が起きた時、仮面ライダーと名乗る男が颯爽と現れて解決すると言う都市伝説が話題を呼んだ。響の住んでいる町とリディアン音楽院周辺で目撃情報が発生している。その為、響は必要以上に怯えなくなっていった。近場に恩人がいる事に安心感を覚えたのだろう。

余談だが、龍也は自分の周りで起きた事件に原作キャラがいない事に疑問を覚えていた。響じゃないが「俺、呪われている?」と思ったとか。元からだ。ちなみに誰も気づいていない事だが龍也が関わった事件現場の近くには原作におけるリディアン音楽院

での響の友達とクリスのクラスメイトがいたのだが直接事件に関わった訳ではないので気づいていない。もしも神にこの事を確認した場合、こう答えるだろう。「直接関わる事になるとは言っていないよ?」と。実際、放っておけば巻き込まれる事は容易に想像つくので仕方がない。

閑話休題。

最初の事件では過剰防衛が見られた仮面ライダーだが、その事件で仮面ライダーが関わった事は少なくとも不良達から語られる事は無かった。何故か？　それは――

「龍也」

「はい」

「何故俺が怒っているか解るか?」

「解りません」

事件後、龍也は父に正座させられていた。父親は静かに怒りを見せている。

「事件の事だ」

「……」

「お前は犯罪者同然とは言え一般人を手加減無しで殴ったな」

「力加減が解らなかっただけです」

「確かにお前にそれを教えなかったのは事実だ。それは俺が悪い。だが――」

父親は一つ息を吐く。
「お前は相手がどうなっても良いと思って殴っただろ？」
「そんな事は……！」
「正確には浚われた女の子のトラウマにならない程度には考慮した。だが殴った相手の事は一切考えていない」
「……」
「むしろ嬉々として暴力を振るった。悪人相手なら容赦しなくて良いと」
「それは――」
無いとは言えなかった。実際、最初から投げ技に徹していれば男達が大怪我を負う事は無かったのだから。
「そうでなければ女の子達を助けた後に必要以上に傷つける真似はしない。時間稼ぎに徹すれば良い。傷つけたのを気にしているならキャロルに頼んで治療してもらったはずだ」
正論である。確かにあの時の龍也は相手が悪人だからと苦しめと思った。死んでなければいいと残酷な考えを持っていた。
「龍也」
「……」

「それじゃ駄目だ」
　龍也を説得するように父は語る。
「確かにお前が相手していた奴らは悪だ。それは否定しない」
「……」
「だが、悪だからと言って痛めつけていい理由にはならない。それが必要になる時はあるかもしれない。だが少なくとも今回は違ったんじゃないか？」
「……」
「暴力が必要な時は有る。相手を傷つけなければいけない時は有る。しかし――」
「それは守る為だけにしろ」
「誰かを守る時、他に手段が無いその時に振るえ」
「暴力を使って相手を倒すのは楽だ。問答無用でねじ伏せられるのだからな」
「だが、それに慣れてしまえば……誰も傍にいてくれはしない」
「暴力は恐れを生む。だからこそ本当に必要な時にだけ使え」
「使い処さえ間違えなければ理解してくれる人は必ずいるのだから」
「お前にもそう言う人がいるだろ？」
　父親の目線を見て、龍也は後ろを振り返る。
　エルフナインが、紫が、燈が――キャロルが見ていた。

全員が程度の差は有れど怒っていた。
「……俺からは、これで終わりだ」
最後に龍也の頭に思いっきり拳骨を振り下ろした。
「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ!?」
龍也はあまりの激痛に声にならない悲鳴を上げた。しかし痛みは有れど肉体にダメージは一切無かった。どうなってんだ。
「追撃しろ」
キャロルの一言に見守っていた三人が前に出た。
「とりあえず……ライダーを名乗っているくせに何やっているんですか！」
「へぶ!?」
「ヒーローがやる事じゃないでしょ！」
「こふぁ!?」
「もっとボク達を頼ってください！」
「げふ!?」
紫、燈、エルフナインの順でビンタされる龍也。
「最後にオレから――火野映司が言っていただろ？『正義のためなら、人間はどこまでも残酷になれるんだ』と。正しくその通りになったな」

『ＹＥＳＴＥＲＤＡＹ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「反省してこい。とりあえず同じ場面で完璧に手加減できるようになるまでだ」
　痛みで喋れない龍也は顔を青ざめた。
「題して『手加減できるようになるまで起きれま１０』だ。題名通り十回連続成功するまで目覚めないからその心算で」
「ま、まって……」
「では、御休み」
　そしてキャロルによるイエスタディメモリの力でＮＡＲＵＴＯのイザナミの様な事をされた龍也は力加減を無理矢理体に覚えさせられた。キャロル曰く「意図せず人殺しなどしたくないだろ？」との事。そう言われてしまえば龍也も納得せざるを得なかった。おかげで手加減できるようになり殴って骨を砕く事は無くなった。むしろ上手に気絶させられるようになっていた。
「あ、言っておくが男達に仮面ライダーの記憶は無い。精々が謎の不審者にやられたと言う程度だ。さすがにそれ以上は誤魔化せなかった」
「私がキャロルに頼みました。仮面ライダーのイメージを必要以上に悪くしたくなかったので」
　紫がキャロルに頼んだ結果、そういう事になった。

その後、龍也は身近なトラブルに変身して対処していたが、以前と違い痛めつけるような闘いはしなくなった。ある時は引っ手繰りを走って追い駆け投げ飛ばし、ある時は銀行強盗を殴って気絶させ、ある時は変質者の股間に跳び蹴り喰らわせたりとしていたが大怪我を負った相手は今の処いない。変質者？　キャロルが治療したから表向きは無傷だ。裸コートの変態相手では仕方が無いね。

そんな以前よりも何故か増えたトラブルに巻き込まれる環境が落ち着き始めた頃、未来から龍也に一本の電話が掛かってきた。

「進路相談？」

『はい』

予想外の内容に龍也の脳内ではクエスチョンマークが幾つも浮かんでいた。未来の事だから響と同じリディアン音楽院にすると思っていたからだ。ちなみに龍也の家はリディアンと同じ町に有る。どう足掻いても一期のラストに巻き込まれると知った時に気が遠くなったとか。それも有って龍也は受験する高校を実家から電車で三駅程度の範囲を選んでいる。結局、隣町の高校に受かるが。

閑話休題。

響に合わせるはずの未来からの進路相談に龍也はまず話を聞く事にする。

『響は『翼さんに会いたい』って言ってリディアンにするつもりなんですけど……』

「将来的に心配なのか？」
『いえ、そういう訳ではなく――』
「ん？」
　何故か言い淀む未来。龍也も特に追求せずに待つ。
『えーと、その、龍也先輩の進路も参考にしようかなって思って……』
「俺の？　参考にならないと思うぞ？　実家の近くの高校にしようと考えているだけだし」
『龍也先輩の実家って何処ですか？』
「あれ言ってなかったけ？　リディアンと同じ町だ」
『え』
　未来の小さく驚いた声が聞こえる。何故驚いているのか龍也には解らない。
『そっか、それなら良いか』
「？」
『ありがとうございました。参考になりました』
「そうか？　まあ、小日向の役に立ったなら良かった」
『はい。あ、あと――』
「ん？」

『私の事、未来って呼んでも良いですから』
「え」
『それじゃ、失礼しました』
そこで電話を切る未来。
「なんだったんだ？」
未来の態度の変化に理解できない龍也は暫く頭を抱えるのだった。

聖遺物ゲットだぜ!

残り半年。

現時点での『戦姫絶唱シンフォギア』が始まるまでの時間だ。

それまで色々なイベントが有った。紫と燈が龍也と同じ高校に入学したり、響に未来の参加する大会の応援に行くのを誘われたり、父親に修行と称して山に連れていかれたりなど様々な事が起こったが特に語るほどの事ではないので割愛する。

重要なのは残り半年、それは学生にとって最も楽しい時期(タイミング)だ。

何故なら――夏休みだからだ。

と言っても、龍也は体質の所為で夏休みであろうが関係なく精神的に休まる事は無い。

龍也の『巻き込まれ体質』は幾つか条件が有る。

一つは基本的に原作イベントに関わっていると発生しにくい事。もう一つは関係の薄い原作キャラが関わるトラブルが起きやすい事。

解っている範囲ではその二つだ。

更に龍也の日常は大きく二パターンある。

大きなトラブルあるいは接点の無い原作キャラに遭遇するトラブルが一回起きる（発生すると暫くは平穏）か、小さなトラブルが日常的に起きるか。

前者なら今までの傾向で行くとキャロルかエルフナインが何かを災いの元を持ってくる。後者ならキャロルにスパロボが襲い掛かってくる。

え？　後者は小さくない？　ピンチになるほどの戦力が来た事は無いので問題無い。恐らくデータ収集目的の威力偵察だと思われる。

閑話休題。

今回の龍也の夏休みは――

「ここデス？」

「たぶんそう」

（なんできりしらコンビに遭遇しちゃうのかなぁ!?）

前者だった模様。

きっかけは夏休みに入ってすぐの事だった。

「……」

その日、キャロルは『地球の本棚』である物を探していた。キャロルは有る事がきっかけで『地球の本棚』にアクセスできる。何故そんな事が出来るのか？　今はまだ語らない。あえて言うなら……龍也の所為である。

「龍也さーん、何か甘い物無いですかぁ?」
「今プリン冷やしてるから我慢しろー」
「わーい」
　そんなキャロルを気にせず紫がゲームしながらラノベを読んでいる龍也におやつを強請る。龍也の家に来てからすっかり餌付けされているのだ。甘い物は女子の好物だから仕方ないね。ちなみに燈も龍也の言葉を聞いてワクワクしている。そんな時に――
「あ」
　キャロルが何かを見つけたのか思わずと言った感じで声を上げる。
「なんだ?　何を見つけた?　XDに出てきた聖遺物か哲学兵装とか言わないよな?」
「やめてください。洒落になりません」
「安心しろ……とは言えんが、違う」
　キャロルの反応に龍也は真顔で確認し、それに対して紫は嫌そうな顔で止めてくれと口にする。二人の言葉にキャロルが不安を感じる言葉で返事する。
　余談だが存在は判明しているが場所まで解らない聖遺物がいくつか有ったりする。本当なら回収したい処だが何故か場所の検索になると上手くいかなくなる。本棚の性能がオリジナルと違うのか、はたまた何者かによる妨害か……現時点では解っていな

い。
閑話休題。
「前から欲しかった物が有ってな……欠片だが見つけた」
「何を見つけた？」
ラノベを片付けながら龍也はキャロルに質問した。
「アンサラーだ」

そんな会話が有ってから数日が経ち、龍也は米国の山中に居た。
「まさかまた海外に出る事になるとは……」
龍也は頭を掻きながら事前にキャロルから言われた場所へと移動する。
「しかもこんな服装まで……何時作った？」
今の龍也の服装は黒いロングコートと白黒のドミノマスクに赤い手袋。どう見てもペルソナ５の怪盗服だった。何時の間にこんなものを作ったのかと龍也は耳に付けた通信機を使いキャロルに話しかける。
『容姿がそっくりなら着せたくなるものだろ？　お前だって作れるなら作るだろ？』
「全くもって否定できない」

龍也も奏者達にコスプレさせる事が出来るなら全力で用意するだろうからキャロルの意見を一切否定できなかった。そんな下らない会話をしていた龍也だが目的地に付いたため話を本題に戻す。

「遺跡内は俺一人が探索するのか?」

『本当ならオレが行くべきなんだが、今回はお前の訓練も兼ねている』

会話しながら龍也は懐からガイアメモリを取り出す。

『それにオレは近くに有るF．I．S．の連中が来ない様に工作している。』

「……ちょっと待て。それって近くにいるってことだよな?」

キャロルから予想外の言葉を聞き、龍也は動きを止める。

『事前に調べた限りではF．I．S．などの聖遺物関連の組織が周辺を調べる予定は無かった。だから余裕を持って行動できたんだが……もうお前の所為だとしか思えない』

「否定できないから止めろ」

龍也も薄々そうではないかとは思っているが、考えたくなくて現実逃避気味に天を仰ぐ。

『それにあまりオレが表だって行動して目立つのは避けたい。紫と燈は暫く海外に行きたくないらしいからな』

「……オートスコアラー達は?」

『Ｆ．Ｉ．Ｓ．相手に時間稼ぎだ』
「エルフナインは……」
『どう考えてもお前の方が強いだろ』
「ですよねー」
やはり龍也が行く以外の選択肢はないようだ。両親も日本にいるから頼れない。
「仕方ない。さっさと終わらせますか」
『ＫＥＹ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
龍也は腰のマキシマムスロットにキーメモリを入れて叩いた。キーメモリの能力で隠されている遺跡の出入り口を探す。ちなみに龍也の使っているガイアメモリはキャロルが普段使っている物だ。最近は護身に使えそうな物を数本借り、状況によって違うメモリを借りている。
「お、ここか」
傍目にはただの草木に覆われた地面に触れながら龍也は再び懐からメモリを取り出す。
『ＣＹＣＬＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「よっと」
サイクロンメモリの力で風を起こして出入り口の表面を晒す。

「念の為に」
『ＶＩＯＬＥＮＣＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
バイオレンスメモリで腕力を高めた龍也は出入り口の蓋を持ち上げる。重厚な音を出す蓋を龍也はゆっくりと引っ繰り返した。
「よし」
二メートル四方の孔の壁には手足を引っかけるのにちょうどいい長方形の穴が開いていた。
「これを使って降りろ、ということか……キャロル、今から遺跡内に入るからサポート頼む」
『わかった。気を付けて進め』
「了解」
そこから龍也は遺跡内で様々な仕掛けに翻弄された。定番の落とし穴をワイヤーで回避したり、迷路内をアクセルメモリで高速で動き回り、謎解きに時間が掛かったり、他にも命懸けのトラップが幾つも有ったが……全て割愛する！
結果として龍也はアンサラーの欠片を三つ手に入れた事だけを告げる！
「なんか一生懸命頑張ったシーンが無くなった気がする……」
キング・クリ〇ゾンにでもやられたか？　と首を捻る龍也にキャロルから通信が入

る。
『龍也……悪い知らせだ』
「……何が有った？」
『F．I．S．の奏者が二人そっちに向かっている』
「よし、違う道を使って帰ろう！」
『残念ながら一本道だ』
「ちくしょう！」
　結局、原作キャラに遭遇する展開は避けられないのか！　龍也は心の中で叫んだ。
「ここデス？」
「たぶんそう」
「!?」
　出入り口近くの広場に着くと会話らしき声が聞こえてきた。龍也は瞬時に跳躍、そのまま天井に握力で掴まった。
「ここら辺で聖遺物の反応がするけど……」
「なにもないデス？」
　出入り口の方からシンフォギアを纏った月読調と暁切歌が現れた。二人の手には機械らしき物が有る。どうやらその機械で聖遺物を探しているようだ。

（や、やべえ……）

機械で探っているならこのまま奥まで行く可能性は低い。しかし、脱出しようにもゾーンメモリはキャロルが持っている。この状況をどう打破するか龍也は頭を悩ませる。

そうやって龍也は悩んでいる最中にミスをした。

（げ!?）

「デス?」

「ん?」

手に力を入れ過ぎて天井に罅が入った。その音を聞いた切歌と調は上を向いた。

「だ、誰デース!?」

「ひ、人が天井に……!?」

（やらかした!）

見つかってしまった以上は仕方がないと龍也は手を離し地面に降りた。何気に服装を意識してかスーパーヒーロー着地である。同時に切歌と調も龍也から距離を取った。

「何者デス!　こんなところで何していたデスか!?」

「切ちゃん、このカッコいい服装の人から聖遺物の反応がしてる」

「まさかこの人が聖遺物デスか!?　あと確かにカッコいい格好デスけど今気にする処

じゃないデス!?」
「れっきとした人間だ」
切歌の言葉に思わずツッコミを入れてしまう龍也。あと、二人にカッコいいと言われて若干反応に困ったのは内緒だ。
「なら、どうしてあなたから聖遺物の反応がするの？」
「……」
龍也の懐に聖遺物の欠片が有るからだ。だが正直に言う訳にもいかず、悩んでいると――
「考えるまでもないデス！　この人がここに有った聖遺物を盗んだデス！」
（まあ、ばれるよな）
この状況で気づかれない訳もなく、切歌が自身のアームドギアである鎌を龍也に向ける。
「渡すデス！　私達には……それが必要なんデス！」
「悪いが……」
龍也としても苦労して手に入れた聖遺物（アンサラー）をただで渡したくない。それ故に――
「お宝は頂いていく！」
全速力で遺跡から脱出することにした。しかし――

「行かせない!」
調が小型の丸ノコ『α式・百輪廻』を飛ばしてきた。さすがに当てるつもりは無かったのか龍也から一メートルほど先の前方に着弾する。
「くっ!」
それを見た龍也は足を止める。その瞬間、首元に切歌の鎌が添えられた。
「そこまでデス!」
「これ以上抵抗しないで」
「……」
「聖遺物を渡してくれればここで会った事は黙っとくデス」
「だからお願い、あなたが持ってる聖遺物を渡して」
切歌と調からすれば相手はただの人間、シンフォギアを纏っている自分達の相手ではない。そう考え龍也に抵抗を諦める様に告げた。
「……渡せば見逃してくれるのか?」
「もちろんデス!」
「うん」
それに対する龍也の返事は――
「だが断る」

「デス!?」
「え」
「この俺が最も好きな事のひとつは自分のことを強いと思ってるやつに「ＮＯ」と断ってやる事だ」
　こんな性格だったかと思うだろう。ただ単に一回言ってみたかっただけである。
「カッコつけるなデス！」
「あなたじゃ私達に敵わない」
「それは――」
　龍也は足を曲げ姿勢を低くする。
「どうかな！」
　そして足を勢いよく伸ばして跳躍する。
「はっ！」
　更に懐からワイヤーを取出し、天井へと伸ばしてくっつけた。そのままターザンジャンプで切歌達の頭の上を飛び越えた。
「行かせないデス！」
「私達にはそれが必要なの！」
　しかし龍也に向けて切歌が鎖を射出、調も丸鋸を両足に着けて高速移動で迫ってく

る。

「まだだ!」

　龍也は空中で体を回転させて鎖を回避しながら懐からガイアメモリを取り出し腰のマキシマムスロットに入れた。

『ＡＣＣＥＬ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』

　地面に着地すると同時にマキシマムスロットを叩き発動。

「デス!?」

「早い!?」

「さらばだ!」

　そのまま高速移動で遺跡を脱出する。

「追いかけるデス!」

「絶対に逃がさない!」

　しかし切歌と調が遺跡の外に出た時には既にどこにも龍也の姿は無かった。

「そ、そんな……」

「こ、これじゃみんなが……」

　時間制限が来たのか気力が尽きたのか膝を突いてシンフォギアを解除する二人。この後の大人達から受ける仕打ちを想像して悲痛な表情を浮かべるが――

「――デス!?　なんデスか!?」
「切ちゃん？」
突然、切歌が声を上げる。どうやら額に何かが当たったようだ。
「これは――」
「手紙？」
当たった物を確認すると手紙らしき物が入った封筒だった。
「え～と何々」
『楽しませてくれたお礼にお宝を差し上げます。また会いましょう。ｂｙジョーカー』
「デス？」
「あ！」
「どうしたデス調!?」
「封筒の中に入ってるこれ……」
「ちょっと待つデス！」
切歌は調の持つ物に機械を向ける。すると機械は音を立てて反応した。
「聖遺物デス！」
「良かったね。切ちゃん」
「デース！」

二人は聖遺物の欠片を失くさない様に大事にしまって帰還した。
「あれで良かったのか?」
『一つぐらいなら構わん』
その光景を離れた場所で龍也は眺めていた。
「しかし、無駄に疲れた……早く日本に帰りたい」
『ご苦労だった。まあ、これでしばらくは何も起きないだろ』
「お前が無茶ぶりしなければって続かないよな、それ?」
『おっと電波が――』
「キャロルさん!?」
そこは否定して！　と龍也の嘆きが山彦となった。

無印０．５話？

「結局、リディアンに進学したなあの二人」
　時が経ち、響達からリディアン音楽院に合格したと連絡が来た。原作通りの進路に一先ずほっとする龍也。何せここで響が違う学校に進学することになったとしても転生者か、あるいは政府（ＯＴＯＮＡがいればそんな事にならないだろうが）によって結局リディアンに行く事になる可能性が有ったからだ。頑張って合格した意味が無くならなくて良かったと思うと安心したのだ。努力して受かった高校から強制的に転校など無い方が良い。
「原作通りで良かったと思うべきか嘆くべきか悩みますね」
「もう一人の転生者の目的が解らない以上は何とも言えないな」
　雑談しながら某大乱闘を続ける紫と龍也。
「むしろ私達もリディアンに行かなくて良かったのかな？」
「僕もそれを考えたのですが……フィーネに接触する可能性が有るのであまり推奨できません」
　燈とエルフナインも同じようにコントローラーを操りながら会話を続ける。

「よし！　今だ！」
「あー!?　パンチが直撃!?」
「隙有り！」
「今のは青い弾丸!?　燈お前！」
「ふっふーん」
「そこをスマッシュです」
「あー!?」
　ちなみに紫がピンクの悪魔、龍也が隼の名を持つレーサー、燈が岩男、エルフナインは緑色の服装が特徴の勇者だ。
「こんにちはー」
「お邪魔します」
「あらあら、いらっしゃい」
　白熱した戦いを繰り広げていた四人の耳に聞き覚えのある声が聞こえてきた。
『え』
「あ、どうも」
「お邪魔してます」
　声が聞こえた方に四人が目を向けるとそこに居たのはこの世界（シンフォギア）の主人公、立花響とそ

の嫁、小日向未来だった。
「響と未来？」
「はい」
「なんで家に？」
「前に家の住所教えてくれたじゃないですか」
確認するように龍也が話しかけ、何故自分の家に来れたのかを聞く。それに対して響が教えてもらったからと答える。
「学生寮に入ったので今後はこちらに遊びに来る事も有るかと思って」
「いやまあ、色々貸したりしてるから別に構わないけどさ……」
続いて未来と話していると――
『Ｐｌａｙｅｒ　１　Ｄｅｆｅａｔｅｄ』
「あ」
余所見している間に龍也が操っていたゲームキャラは他の三人にフルボッコにされていた。容赦なしである。
「改めまして、唄川紫です」
「双子の妹の唄川燈です」

「私、立花響です！　こっちは親友の――」
「小日向未来です」
　実は響と未来とは初対面である紫と燈が自己紹介を行っている間に龍也は冷蔵庫で冷やしていた角柱型のアイスボックスクッキーを包丁で薄く切っていた。ちなみに燈の双子の妹と言う肩書は表向きの物だ。
「こういう時のために大量に作れるものを常備しといて正解だったな」
「食べる人が多いとどうしても多目に用意する必要が有りますからね」
　エルフナインが龍也の用意したクッキーを焼くためにオーブンに入れていきながら会話する。
「しかし、まさか家に来るとは思わなかった」
「キャロル辺りは予想してそうですけどね」
「クエー（訳：ですねー）」
「お前まだ響といたのか」
　唐突にタカヤミーが現れるが特に驚くことなく対応する龍也だった。
「そういえば前に響が襲われていた時に出てこなかったけどどうしてだ?」
「クエクエ、クエ（訳：出る前に仮面ライダーが出てきたから動揺して固まっていました）」

「なるほど」
「……」
龍也とタカヤミーの会話を何時の間にか近くに来ていた燈が見ていた。
「あのー」
「ん？　どうした？」
「いえ、その」
燈は困った様な表情で言いあぐねている。しかし、何かを決したのか口を開く。
「なんでヤミーの言葉が解るんですか？　私にはクエクエ言っているようにしか聞こえないのですが……」
「え？」
燈の言葉を聞き龍也は無言でタカヤミーの方を見る。
「……」
数分、数十分に感じられるほどの時間が経ち――実際は数秒――龍也が口を開いた。
「なんとなく？」
「……えー」
納得のいかない答えだった。
「あ、タカくん！　また勝手に出てきてる！」

「タカくんって安直な……」
　響がタカヤミーに向かって慌てながら近寄る。同時にタカヤミーの呼び方に龍也は反射的にツッコミを入れた。
「いやー良い名前が思いつかなくて……」
「まあ変に凝った名前にするよりは良いんじゃないか?」
「そうですよね!」
「良いのかな……」
　燈が疑問の声をあげるが、聞こえなかったのかその言葉に賛同する者はいなかった。

「なんか騒がしいと思ったら立花響と小日向未来が来ていたのか」
「キャロル」
　時間が経ちクッキーが焼けた頃に来客がいるため大人モードになったキャロルが現れた。キャロルは龍也の友達など外部の人間がいるときは大人の姿で対応する。見た目が子供のままだと活動に支障が出る為である。余談だが大人姿のキャロルと共にいる処を見られた龍也はクラスメイト達に嫉妬で追いかけまわされたとか。
「この際だからオレも挨拶しておくか」
「そういえばお前も一応面識なかったな」

実際は響にはコンサートで出会っているが目と髪の色が違うので恐らく響も気づかないだろう。
「あ、こんにちは」
「お邪魔しています」
「初めまして。ここでホームステイしているキャロル・マールス・ディーンハイムだ。エルフナインの姉でもある。気軽にキャロルと呼んでくれ」
「解りました！　キャロルさん」
「よろしくお願いします。キャロルさん」
ホームステイと言う事にしているキャロルを普通に受け入れる響と未来。見た目が明らかに外国人なキャロルが居る理由としては納得がいくのだろう。
「日本語上手なんですね！」
「（世界中で活動するために）しっかり勉強したからな」
「凄いなあー。私は勉強苦手で……」
仲良く話しているキャロルと響の姿に龍也は感動していた。原作でもＸＤでも未だ手を握る事が出来てなかった二人の姿に笑みを浮かべずにはいられなかったのだ。
「龍也さん？　どうかしました？」
「い、いや、なんでもない」

　そんな龍也の様子を変に思った未来に話しかけられ咄嗟に誤魔化す龍也。ちなみに紫もどこか嬉しそうに響とキャロルを見ている。龍也と紫の様子に気づいているキャロルは誰にもばれない様に苦笑を浮かべた。
「それにしても……」
「な、なんだ」
「いえ、同居人が多いなと思って」
　しかも女性ばかり、未来は誰にも聞こえない呟きを口にする。
「紫と燈は父さん達の友人の子で、両親が亡くなってから家で世話しているんだ。キャロルとエルフナインも父さんの知り合いでその関係でな」
　その様子に龍也は疑問に思うが、さすがに不自然に思われたのだろうと判断して表向きの理由を説明する。
「そうなんですか?　よく四人も……確かに家は広いから可能だと思いますけど……」
「ああ、それは父さんも母さんも子供は三人の予定だったらしくてなぁ……俺が生まれた時点で大きめの家を買ったんだ」
「とらぬ狸の皮算用……」
「言わないで上げてくれ……」
　結局子供は自分一人なのだから確かにその通りではあるのだが、両親はまだ諦めてい

ないのだ。……年の離れた弟妹が生まれるのも困るが。前世の記憶が有るから年が近くても変わらないかもしれないが。
「そう言えば寮暮らしなんだよな？」
「あ、はい」
　これ以上、同じ話を続けたくない龍也は話題を変えた。
「一人部屋なのか？　それとも誰かと共同生活か？」
「それが響と同じ部屋になったんですよ」
「マジか」
　知っていたが驚いたふりする龍也。原作通りになる保証はないから不安ではあったが。だが未来には不自然に思われたらしい。
「……あんまり驚いていませんね？」
「いや、二人ならそうなりそうと思っていたから」
「どんな予想ですか」
　二人の仲の良さならあり得なくはないと言う謎理論で誤魔化す龍也。
「まあ、共同生活では色々あるだろうが――」
「？」
「何か困った事が有ったら気軽に相談しに来ると良い。特に最初のうちは大変だろうし

な」

　これは龍也なりの考えが有っての事だ。響と未来の仲が原作以上に拗れない様に自分が少しでも関われるように布石を打っておこうとしているのだ。しかし、龍也自身は上手くできる自信は全く無い。ただできる事は少しでも増やしておきたいのだ。

「ええ、その時は遠慮なく頼らせていただきます」

「言っておいてなんだがあまり期待しないでくれよ……」

　未来の笑顔の返答に龍也は苦笑を浮かべていた。

始まりまであと、数日。

戦姫絶唱シンフォギア無印
変わらぬ覚醒

「今日はツヴァイウィングのＣＤの発売日だそうだ」
「と言う事は……」
　原作の本格的な始まり、それは戦いの始まり。
「キャロル」
「ん」
　キャロルは龍也に一つのアイテムを渡す。それはあるフルボトルだ。
「無駄な足掻きかもしれない。意味のない事かもしれない」
　何も変わらないかもしれない。だが既に変わったのならば――
「歌い手を守る為に戦おう」
『Ａｉｒｇｅｔ―ｌａｍｈ』
　フルボトルを変形した義手に差し込む。すると音声と共に龍也は鎧に包まれた。その姿を前世の知識が有るものが見たならばこういうだろう。色こそ違うが――
「原作ブレイクの時間だ」

〝ナイトブレイザー〟と。

その日、立花響はツヴァイウィングのＣＤを買うために走っていた。

「ＣＤ、特典、ＣＤ、特典――」

夢中で走りコンビニの角を曲がって一息ついた時、響の目に映ったのは――

「セイヤー！」

「え？」

黄金のラインが走る銀の全身鎧と赤いマフラーを身に纏った何者かが手に持つ光る剣でノイズを斬り裂く瞬間だった。

「一般人は早く避難しろ！」

「は、はい！」

近くにいた女性が走って離れていく。見れば辺り一帯に黒いものが宙を舞っているのが見える。しかし、響の見える範囲では人が炭化した様には見えない。おそらく響ヨく鎧の人がノイズを倒しているからだと思われた。

「いやー！」

「子供の悲鳴か！」

「！」

「あ、待て！」
子供の悲鳴を聞いた響は鎧の人の静止を聞かずに走り出した。
「ああもう、子供を助けたい気持ちはわかるが――」
鎧の人は周囲のノイズを素早く斬り、響を追い走る。
「少しは人を頼れ！」
少なくともここにノイズと戦える人間がいると言うのに。そう愚痴を心の中で吐き出しながら響を追う。
『龍也！　そっちはどうだ!?』
「キャロルか！」
鎧の人――いや、龍也の耳に付けた無線にキャロルからの通信が入る。
「響と遭遇した！　だけど子供を助けに行った！」
『わかった！　ならばこちらからヤミーを援軍として送る！』
「他の場所は!?」
『鳥型ヤミーは救助、水生系ヤミーには身代わりになってもらっている！』
「そっちのパターンか！」
以前から『ヤミーがノイズに触れたらどうなる?』かの予想は立てられていた。一つはメダルで構成されているからすり抜ける、もう一つは生物として扱われて炭化するか

のどちらかだと予想されていた。人工生命体というカテゴリに当てはまるのならば炭化の可能性が高いと思ってはいたので龍也は然程驚かなかったが、戦力にカウントできないのが辛い。

『ああ、だからいざと言う時はタカヤミーに身代わりになってもらう』

「！　お前まさか……!?　　そのためにヤミーを!?」

『……響には悪いがな』

キャロルは響が原作通りに覚醒するとは保証が出来ないためにヤミーを護衛、いや身代わりにするために響の憑けていたのだ。しかしタカヤミーが犠牲になれば響が心に傷を負う事になるだろう。

「なら、その前になんとかするしかないな！」

龍也の目に響と少女が映る。二人を保護しようと近づくが、そこに割り込むようにノイズが現れる。

「邪魔だ！」

龍也は光る剣、ナイトフェンサーでノイズを切り裂いていく。そして勢いそのままに響達に近づくが――

「！」

足元に黄色く光る矢が刺さった。

「これは……！」
驚いていると更に龍也を狙って矢が降り注いでくる。
「どこの、どいつだ！」
矢が飛んでくる方を見るが太陽が逆光になっていて影しか見えない。
「こんのぉ！」
ナイトフェンサーで斬り払い、避けつつ響達を追うが気づけば見失っていた。
「くそ！」
矢を放っている者はノイズを無視して自分を狙っていることから龍也はこれが転生者の仕業だと察した。
「そこまでして原作通りにしたいか!?」
聞こえるわけもない文句を口にする。ふざけるな。この世界が原作通りにいくと誰が決めた。龍也からすれば邪魔をする推定転生者の考えなど知った事ではないのだ。ただ自分は既に彼女達に関わった。変化させた。原作知識が有りそれと違う明日（未来）を創ったのなら無関係などとは言えない。できることは可能な限りやると決めたのだ。だから――
「邪魔をするな――！」
龍也は自身の倉庫から武器を取り出す。基本的にゲーム機などの娯楽品しかない倉

庫だがキャロルが創った武器やメモリも保管している。その一つを取り出した。取り出したのはエンジンブレード。仮面ライダーアクセルの武器だ。
「行くぞ！」
『ＥＮＧＩＮＥ！』
『Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「エースラッシャーだ！」
　龍也の叫びと共にエンジンブレードの刀身からＡ形のエネルギー弾が発射された。それを見た敵は回避するためにその場から離れた。
「今のうちに……！」
「龍也さーん！」
「ん？」
　声が聞こえた方を向くとそこには――
「はあ、はあ、やっと着いた」
　仮面ライダーレーザーバイクゲーマーレベル１が居た。
「燈か？」
「はい、キャロルさんに、作ってもらった、爆走バイクを、使いました」
　息を切らしながら燈は自身の姿について説明する。どうやらガシャットの作成に成

功していたようだ。龍也も幾つかのガシャットが作られているのは知っているが爆走バイクは初めて見た。
「と言う訳で、二速」
『ガッチャーン！　レベルアップ！』
『爆走！　独走！　激走！　暴走！　爆走バイク！』
「乗ってください！」
「よっしゃ！」
　レベル2となりバイク形態になった燈に龍也は首のマフラーを鎧内に収納してから跨った。ちなみに免許は冬休みに取っている。
「行くぞ！」

「ひぃ!?」
「きゃあ！」
　ノイズから逃げた響と少女はある工場に辿り着いていた。建物の屋上まで上り漸く逃げ切ったと一息ついた時、再びノイズが目の前に出現した。既に体力の限界が訪れた響達に最早逃げる術はないと思われた、その時――
『爆走クリティカルストライク！』

「ライダーブレイク！」
「え」
　仮面ライダーレーザーに乗った銀色のナイトブレイザーがバイクでノイズを轢いた。ちなみに紫が持っていたガシャットは神からの特典の為かノイズと戦える。それを参考に作った他のガシャットでもノイズに対抗できるのでレーザーでもノイズを倒せるのだ。
「とお！」
「あ」
　突然、龍也はレーザーから飛び降りて響達の前に着地する。その様子は配管工が恐竜を乗り捨てしたときの様だった。いや、この世界なら防人のように、と言うべきだろうか。
「え、ちょっと、ああ～!?」
　運転手が居なくなったレーザーは慣性の法則に従い、その勢いのままノイズの群れに突っ込んだ。そして数多のノイズを轢き殺しながらレーザーは屋上から落下した。
「後で覚えてろー！」
　あんまりな扱いにキレた燈の叫びが下から聞こえてくるが龍也は聞こえないふりをした。

「あ、あの――」
「そこでジッとしてろ」
ナイトフェンサーを構えた龍也はノイズに向き合う。
「悪いが覚醒イベントとか関係ない」
横一閃、数体のノイズが炭へと変わる。更に振るう。近場に居るノイズを切り裂き、蹴り、殴る。
「来いよ雑音共。命を奪うと言うならまずはイレギュラーである俺からだろ。だから――」
龍也は体勢を整えて響達とノイズの間に立ち――
「歌姫に手出すんじゃねえぞ」
ただ一言呟いた。その呟きは誰にも聞こえなかった。だがまるでノイズは龍也の言葉に慄いたかのごとく動きを止めた。それと同時に――
――――。
「む!?」
それは聖詠。立花響のガングニールの聖詠。
「あ、あ――――!?」
「起動しただと!?」

響の胸から昼間と錯覚しそうになるほどの眩い光が放たれる。そして光が止むと――

「あ、あああああぁぁぁぁ!?」

体から機械を出現させながら、シンフォギアを、ガングニールを纏う響がいた。

『変わらず、か』

龍也の耳にはキャロルの小さな呟きが大きく聞こえた。

第23話

……これがデジャブなのかな？

響は目の前の光景を見て既知感を覚えた。以前にもこうやってノイズに囲まれたような気がする。いや、記憶は曖昧だが実際にツヴァイウィングのライブで同じ目に遭ったのだからおかしくは無い。だが、同時に頭に過るのは何者かが自分の胸を叩きつける瞬間。それはキャロルの記憶処理だけでなく、響本人が思い出したくないと最も深くに封印した記憶。

――嫌だ。

金属で出来た何かが自分を襲う光景を。

――来ないで。

流れ出る血と迫りくる死の恐怖を。

――怖い、コワイヨ。

恐怖が脳内を満たそうとした瞬間――

「ライダーブレイク！」

「え」
バイクに乗った騎士が現れた。騎士はノイズを蹴散らしながら自分と少女の前に立つ。その姿に思い出す。
「そこでジッとしてろ」
その声で思い出す。
「あ――」
命懸けで戦う背中を。自分を守る為に傷つく誰かがいた事を。自分の為に戦い続ける姿を。
「そうだ――」
その時に自分が何を思ったのかを。
「私は――」
絶望した自分の中に芽生えた思いを。
「――生きるのを諦めない！」
その瞬間、響の胸から光が放たれ、シンフォギア奏者として覚醒した。
「……っく、マジか」
数秒ほど呆けていた龍也は正気に戻るが動揺を隠せずにいる。

「え、え!?　なんで!?　私、どうなっちゃってるの!?」
「お姉ちゃん、カッコいい！」
　そんな会話が聞こえるが龍也の耳に入ってこない。再び変えられなかった事に自身の無力さを感じずにいられないのだ。
（やっぱり俺では――）
『いつまでも後悔している場合か！　ノイズが動くぞ！』
「！」
　キャロルの言葉に龍也はノイズに向き直る。ノイズが響達や自分に近づいてくるのが見えた。
「ッ！　その子を抱えてろ！」
「え!?」
　そう言って龍也は剣を仕舞うと女の子を抱きかかえた響をお姫様抱っこする。
「え、え!?」
「しっかり掴まってろ！」
　屋上から大ジャンプした龍也はノイズが少ない場所まで二人を運ぶ。慣れてない響に逃げさせた場合、女の子の負担がどうなるか解らないが故の判断だ。
「よし。ここなら……」

「あ、あの――」
「説明は後だ。お前はその子の傍に居ろ」
「は、はい」
「今のお前ならノイズ相手でも即死することは無いはずだ」
「え？」
　龍也は響の疑問に答える事無く、屋上から飛んでくるノイズを撃退していく。その背後で別方向から襲ってきたノイズに自らの拳が当たり倒した響の姿も有った。
「さすがに俺一人では厳しいか……」
　こんな事なら燈を、レーザーをレベル1にしておくべきだったと龍也は後悔した。しかし仮面ライダーの知識が無いならレーザーが人型になると想像できないはずなので可能なら隠し玉としてレベル2以外をできるだけ見られないようにしたいと言うのも有る。紫はクリスの事が有るからまだ見られる訳にはいかない。現状、龍也一人しか表だって行動できないのが悩ましい。
「む」
　そうしてどうすべきかと考えながら戦っていると二台のバイクの音が聞こえてきた。よく見るとノイズを弾き飛ばしながらバイクで疾走するツヴァイウィングがこちらに向かってきていた。

「え」
二人は響の横を通り過ぎるとバイクから跳んだ。
「あ――」
そして二台のバイクはその先にいた巨大ノイズの足にぶつかり爆発した。
（二人揃って乗り捨てしちゃうのかぁ……。そっかー）
翼だけでなく奏まで同じ事をするのかと、実はアレ経費で落ちるのか？　とかどうでもいい事を考えながら龍也は二人を眺める。
「よく頑張ったな」
「あとは私達に任せて」
「え、あ、はい」
響を安心させる様に話しかけたツヴァイウィングはシンフォギアを纏い二人同時にアームドギアから衝撃波を放つ。それにより二人の目の前にいたノイズの大半が爆発に飲まれた。更に追撃と言わんばかりに跳躍した二人は無数の剣と槍を降らしノイズ達を貫く。
「そういえばＸＤで奏が使う技って翼と同じのが多かったなぁ……」
そこからはもはや無双ゲーと言わんばかりにノイズ達を殲滅していくツヴァイウィング。二人の息の合ったコンビネーションはまるでダンスを踊っているようだった。

「すごい……翼さんも奏さんも……」
最後は巨大ノイズをまたまた二人揃って巨大化したアームドギアで貫いた。
「……今のうちにっと」
そして龍也は隙を見て燈の元に向かい――
「さて、後は二課に任せるとしようか」
「……コノウラミハラサデオクベキカァ」
「……うん、俺が悪かった。今度、スイーツを奢るから勘弁してくれ」
燈に恨み言を呟かれ続けながら龍也はレーザーに乗って帰還した。
「あれ？　さっきの人は!?」
後に気づいた響が叫ぶ頃には既にその姿は見えなくなっていた。

「ただいまー」
「おかえり」
自宅へと戻った龍也はリビングにいたキャロルに帰宅を告げる。
「状況は？」
「ん」
キャロルの目線がテレビに向いたのを見て龍也もそちらに目を向けた。

『あ、ははは』
『無理して笑わなくていいからな？』
『落ち着いて――と言うのも無理よね』
　画面の向こうではエレベーターに乗った響と奏と翼の会話が行われていた。
「……なんか違和感」
「風鳴翼の対応が違いすぎるからじゃないか？」
「あー」
　キャロルに言われて思わず手を叩く龍也。言われてみればノイズとの戦いの場に現れた時も響への対応が違った。
「やっぱ奏が生き残っているからか？」
「他に風鳴翼が変化する理由は考えられないな」
「まあ、響への初期の対応の理由って大概は奏が理由だしな」
　しかし、これが良い変化なのか悩みどころである。
「しばらく様子見かな」
「だな」
　そう言って二人は再び画面に目を向ける。
「そう言えばこの映像どうやって撮ってるんだ？」

「インビジブルメモリを使ったヤミーに撮影させてる」
「ちょっと待て、何時創った!?」
「この時の為に色々用意しといた」
　どうやらまたガイアメモリの種類を増やした模様。便利だから仕方ないね。
「お、二課に着いたみたいだな」
「歓迎するのは一緒か」
「エレベーターに乗ってる全員が呆れているな」
「まあ、空気読んでるのか読んでないのか解らん対応だしな……」
　彼らなりに気を使ったのだろう。
「だが、そんな事はどうでもいい」
　しかし、キャロルにはどうでも良かった。
「オレはわざわざこんな茶番を見る為にヤミーを侵入させたわけじゃない」
「ですよねー。しかし、よくＯＴＯＮＡ達に気づかれなかったな……」
「ふ、何のために響にヤミーを着けさせていると思っている」
「え？」
「いくら奴らが規格外でも最初からいる気配に疑問も持たんだろう！」
「なん……だと……!?　まさか!?」

「龍也のすぐそばに侵入用ヤミーを憑け、お前が響の近くに移動した時にこっそり響と一緒に行動していた！」
「何時の間に!?」
「さらに！」
　そう言ってキャロルが画面を指さす。すると、そこには響の鞄から、数枚のセルメダルが誰にも見られない様に転がっていく。
「こっそり響の鞄に自壊機能付きセルメダルを忍ばせていた！」
「自壊機能!?」
「いざと言う時は証拠も残さん！　当然、遠隔操作も可能！」
「無駄に機能追加してやがる！」
「と言う訳で行け！　メダル共！　内部構造を調べろ！」
　キャロルが転がるセルメダルに命令を下す。その指示に従いセルメダルはリディアンの地下を虱潰しに探索していく。
「ふっふっふ。セルメダルが通った場所はこっちの機械に情動的にマッピングされていく」
「あの小さいメダルにどんだけ機能を詰め込んでるんだよ……」
　最早セルメダルの形をした何かである。

「コアメダル作成の過程で色々試している内にな……」
「どういう過程を辿ったらそうなる」
「何故だろうな……。時々爆発したし」
「本当に何をしたらそうなる！」
「ただもう一度創れと言われても無理だ。徹夜明けのハイテンションで創ったからどうやったか解らん」
「そんな事だろうと思ったよ！」
「予想だがメダルの形をしたシフトカーみたいな物になっている……気がする」
「もう何でも有か」
　そんな雑談をしていると、キャロルの持っている端末から警報が鳴る。
「む、人に見つかったようだ」
「そんなことまで知らせるのかよ……」
　もう本当にメダルじゃなくてシフトカーのプロトタイプと思った方が良いだろう。
きっと今回の件を活かしてシフトカーを完成させる日は近い。
「!?」
「どうした？」
「砕かれた……だと」

「？」
「メダルが砕かれた」
「ちょっと待て、二課の人間がセルメダルを砕くのはおかしいだろ」
　二課にはキャロルがセルメダルを渡している。増やし方も教えてないのでわざわざ使えなくする理由は無い。ちなみに量産型メダジャリバーはノイズ相手に時間稼ぎなどが多い自衛隊が使用している。
「つまり――」
「違う奴がいるな」
　メダルが砕かれた場所まで透明化したヤミーを誘導する。そこには既に誰もいなかった。
「しかし解らん」
「何がだ？」
「セルメダルを砕けば屑ヤミーが生まれる。あれを砕く事が出来ると知っている人間がそれを知らんとは思えんのだが――」
「セルメダルに擬態したコアメダルと思ったとか？　いや、無いか？」
「勝手に動いていたからそう思った可能性も否定できんな……。確認の為にやったのか？」

疑問が湧くが答えが出ず、頭を悩ませていると画面に唐突にある物が出現した。
「！」
「こ、これは――」
それはライダーの知識が有るものなら少なくともどの作品か一目で解る映像だった。
それが映ってすぐにヤミーからの映像は途切れた。
「……」
「なあ、キャロル」
「お前の言いたい事は解る」
「今のは――」
――レモンだ。

迷い藻掻きながら

「さて、予想外の敵が現れたわけだが」
「正直、最悪以外の言葉が出てこないんだが……」
　キャロルの言う通り予想外であり、龍也の言う最悪の理由は他でもない「ヘルヘイムの森が存在するかもしれない」と言うことだ。もしそうなった場合、あの世界の植物やインベスなど危険すぎる存在がこの世界――いや、この星というべきだろうか――に現れるかもしれない。もしそうなれば人間どころかそれ以外の生物もインベスと化す。もしこれが転生特典だとしたら「鎧武をちゃんと見ていたのか!?」と文句を言いたい。
「大丈夫だ」
「なんでそう言える?」
「鎧武を知っている奴がロックシードを特典に選ぶリスクを考えないわけないだろ?」
「それは――」
「よく知らない奴はそもそも選ばん」
　キャロルの言う通り、言ってはなんだがモチーフの一つがフルーツである鎧武をよく知らない者が選ぶとは言い難い。

「少なくともヘルヘイムの森に関しては問題無いだろう。何の対策も無く利用できるものではないからな」
「いや、だけど――」
「何、最後の手段は有る」
「そ、それは？」
「ソロモンの杖を使ってヘルヘイムの森に全ノイズを投入する」
　怪人であるヤミーが炭化した以上、元人間（というか異星人）が多いであろうインベスはノイズに炭化されて終わりだと思われる。そうキャロルは判断したのだ。
「だからそっちは気にするな。問題は相手が何処まで出来るか、だ」
「と言うと？」
「まあ、高確率でレモンエナジーアームズ……デュークかバロンだろうな」
「ああ、確かに普通ならどっちかだな」
「さすがにレモンアームズは無いだろうしな」
「となると」
「一番注意すべきなのはロード・バロン、だな」
「ライダーのままならスペック的に紫と燈がＸＸになれば勝てると思うけど……」
「あてにならない」

「だよなー」

仮面ライダーのクロスオーバーではスペックなど飾りである。代表例で言えば電王だろう。後は変身者の身体能力や技量でいくらでも埋められる。そもそもキャロルの創った物ですらオリジナルとは違う事もできるのだ。相手もオリジナルより強い事を想定して動くべきだろう。

「今できる事は――」

「とりあえず鍛えとけ」

「ですよねー」

全てのライダーは変身者の身体能力の上昇に比例して強くなる――と思われる。まあ、鍛えるのは無駄ではない。体が強くなれば負担も減るのだから。

「はあ、まあ今考えても仕方ないし何時も通り鍛えますか」

「その意気だ」

今はそれしかできないのだから。

「ところで燈は?」

「……部屋でふて寝してる」

翌日。

『ＺＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
「行けヤミー！」
　キャロルはリディアンの地下にヤミーを転送した。何故、前日はこの方法を行わなかったかと言うと基本的にゾーンメモリは転移させたい物や場所など把握できていないと上手く能力を使えない。それ故に事前にヤミーを侵入させる必要が有ったのだ。
『でも私はその聖遺物と言う物を持ってません。なのに何故……』
「ふむ、どうやら響に説明しているところだったようだな」
「タイミング良いなおい」
「狙ったからな」
　その為、前回リディアンの地下を調べたのは直接転移できるようにするためだ。今回の様に秘密裏にヤミーを侵入させ情報を集めるのともう一つ、デュランダルの保管場所の正確な位置を割り出す為だ。しかし、邪魔が入ったので不明なままだ。
「で？　今回はどうすんだ？」
「特に何も」
「え？」
「今回は原作と違う響がどうするのか確認するだけだ」
　保管場所の確認はしたいが今は無理だ。恐らくフィーネ側に付いているロックシー

ドを使う何者かは地下におり、透明化していたヤミーすら見つけられる。それ故に侵入は難しい。インビジブルメモリに強化アダプターを使うと言う手もあるが、前回のヤミーによってガイアメモリの存在は確実に知られている。相手に利用されない為に自壊させたが対策はされるだろう。

閑話休題。

「最悪な形で融合症例になってしまったからな。どうなるのか予想がつかない」

「まあ、な。殺されかけた様なものだしな」

あまりにも無理矢理なやり方で融合症例にされた響の心情はわからない。しかし、戦える様になった理由を考えると――

『……少しだけ時間をください』

響きはすぐに戦えるとは言えなかったようだ。

響は悩んでいた。

自分にはノイズと戦える力がある。

そう言われ、力を貸して欲しいとも言われた。できることなら自分もツヴァイウィングと共に戦いたい。

だが自分が力を手に入れたきっかけを思い出してしまった。聖遺物を見たこともな

いロボットに無理矢理埋め込まれた。
それが怖い。
まるで自分がノイズと戦えるのは誰かの思惑通りとなっているかのような気持ち悪さも感じてしまい戦うのを躊躇ってしまう。
だがノイズと戦うべきだと思う自分もいて結局、保留以上の答えを言えなかった。
「私、どうしたら……」
響は未来の元にすぐ戻る気にもならず学園の屋上に無断侵入して考え込んでいた。とにかく一人で考えたかったのもあるだろうが、その様子はどこかにいる相談できる誰かを探しているようにも見えた。
「こんなところにいると風邪引くぞ」
それ故に様子を見に来た男は思わず声をかけた。
「え……えええええええ!!」
響は声が聞こえた方に目を向けるとフェンスの上で両腕を組み、月を背にしている鎧の男がいた。はっきり言うとロム立ちしている銀色のナイトブレイザーがいた。
当然ながら龍也である。本当なら来るつもりは無かったのだがライブの時の記憶を思い出しているか確認するために響に会いに来たのだ。
「そんなに大声出すな。別に何もする気はない」

「え、え、あのどうしてここに？」
「それは――」
なんて言おう？　龍也は考える。変な理由を言うと引かれるからできるだけ考えて回答しなければと。
「……ちょっとあるものを探している」
「なんですか？」
「ロボット」
「!?」
「知っているみたいだな……」
やはり思い出していたか、と龍也は溜息を吐く。忘れたままの方が良いのか今後の事を考えると思い出している方が都合良いのか、龍也には判断がつかなかった。
「え、えっと……」
「ああ、言いたくないならいい。自分で探す」
そう言って背を向けて去ろうとする龍也だったが――
「待ってください！」
「ん？」
呼び止められ頭だけ僅かに響の方に向ける。

「どうした？」
「その、あなたはノイズと戦っていましたよね？」
「……それが？」
「怖く、無いですか？」
　まさかそんな質問されるとは思わなかった龍也は鎧の下で目を見開く。
「私は、怖いです」
「ノイズが、か？」
　龍也の言葉に響は首を横に振る。
「自分の力が、です」
　そう言って響は自身の震える両手を見る。
「私がノイズと戦えるのは偶然じゃなくて、誰かが私に戦わせようとしている気がして、怖くて、怖くて仕方がないんです……！」
　よく見れば顔も青くなっている響にどう答えるべきかと龍也は悩む。
「……」
　なんて答えれば良いのか。綺麗事を言うのは簡単だが、それで納得するとは思えない。
「生きるためだ」

だから正直に答えた。
「生きる、ため？」
「そうだ」
ただそれだけのために？　と響の脳内は疑問で埋め尽くされていた。そんな響にもう一度、龍也は自分が戦う理由を述べる。
「できるだけ後悔無く、生きるためだ」
「後悔無く？」
「ああ。できることが、やれることが有る。誰かを助けられるかもしれない、救えるかもしれない。そんな何かを持っているのに何もしないのは嫌だから、そんな後悔しながら生きたくないからだ。それに……」
「それに？」
それは二度目の生で決めたこと。
「叶えたい願いが有るのに叶える努力をせずに諦めるのは止めたんだ」
「願い？」
「とりあえずは家族や友達、失いたくない人達を守ることだ」
「あ――」
その言葉を聞いて響は思い浮かべる。家族を、親友を、友達、みんなの顔を。

「見も知らぬ他人のためじゃなく身近な誰かのためでしか俺は戦わないんだ」
「それで良いんですか？」
「戦う理由なんてそんなものだ」
　そう言って龍也は今度こそ去ろうと完全に背を向ける。
「例え誰かの意図であろうと力を使うのはお前自身だ。力の使い方なんて自分で決めてしまえばいい」
「……」
「少なくとも俺はその答えを正しいかどうかなんて言うつもりは無い。ただ、間違っていると思ったら止めてやるよ」
「……その時はお願いします」
「ああ」
　響は龍也に背を向けて走り出す。同時に警報が鳴るのが聞こえた。
（私は、未来を、お父さん達を、みんなを守りたい！）
（きっと私は誰かに利用されているのかもしれない。だけど！）
「Ｂａｌｗｉｓｙａｌｌ　Ｎｅｓｃｅｌｌ　ｇｕｎｇｎｉｒ　ｔｒｏｎ」
「今、守りたいと思うのは私の意思だ――！」

「焚きつけるつもりは無かったんだがな……」
「そういう割には嬉しそうだな」
「そりゃな」
ノイズの現れた場所まで跳んでいく響。その表情は――
「あの顔を見れば少なくとも悪いことではなかったとは思えるからな」
迷いを振り切った笑顔だった。

増える謎

　響が二課に協力することになってからしばらく経ち、もうすぐ流星群が起こる時期になった。
「で、クリスちゃんは発見できていないと」
「紫」
「……わかっていますよ。フィーネ相手じゃ難しいのは」
　クリスを発見できない苛立ちから攻撃的な言動している紫。諌めている燈も表情は暗い。
「やはり原作と同じタイミングしかないか？」
「こうも見つからないとそれ以外無いだろうな」
　龍也もキャロルも時間があれば町中を探し回っていたがクリスを見つけることは出来なかった。
「仕方がないからそれ用に対策するしかないな」
「と言うと？」
「こいつだ」

キャロルの手にはメモリガジェット、スパイダーショックが乗っていた。

「龍也さん、何か隠していますよね？」
その日、龍也は未来に呼び出されていた。
「何のことかな？」
「惚けないでください」
嫌な予感がし誤魔化そうとする龍也だがそれを許さない未来。
「別に龍也さんが何をやっていても関係無いんですけど……」
「だったら――」
「それに響も関係しているんじゃないですか？」
当たらずとも遠からず。ノイズやクリスの事は確かにいずれ響に関わることではある。
「なぜそう思うんだ？」
「乙女の勘です」
怖いわ。龍也はそう思った。

「別に全部教えて欲しいわけじゃないです。ただ――」
「ただ？」
「響が危険なら止めたいんです」
　そう言われると龍也は知らぬ存ぜぬでは通せない。
「あー、その……」
「……」
「……危険なのは間違いないな」
「――やっぱり！」
　立ち上がりかけた未来を龍也は無言で座らせる。その目は「黙って聞け」と言っている様に未来は感じられた。
「危険だが響を止めるのは無理だ」
「どうしてですか!?」
「あいつは守ることを選んだからだ」
「守る？　何を……」
「未来や家族を」
　龍也の言葉に目を見開く未来。自分達のために危険なことをしていると思ったのだろう。

「ああ、勘違いするなよ。別に人質だとかで脅されたわけじゃないから」
「じゃあ――」
「はっきり言えば自分と同じ目に遭わせたくないからだろうな」
本人から直接聞いたわけじゃないがノイズやロボットに襲われた響の戦う理由はなんとなく理解できた龍也はそう述べた。
「……まさかライブと関係が？」
「……」
未来の独り言は龍也に聞かせるつもりは無いのか小声だった。龍也自身は知っているが響や未来とはそこまで話していないので知らないものとして対応し、今の言葉も聞こえなかったことにした。
「なんで龍也さんはそこまで詳しいんですか？」
訊ねたのは私ですけど、と未来は疑わしそうに龍也を見る。未来が龍也に響のことを聞いたのは龍也が仮面ライダーの格好をしていたのを知っているからだ。実際、龍也がリディアン音楽院と同じ町に住んでいるから響に何かあっても助けてくれるだろうと打算的な考えで響の希望通りに進学したのだから。
「残念ながら今は話せない」
「……いずれ話せるんですか？」

「まあね」
　フィーネさえどうにかすれば、と注釈は付くが。
「わかりました。だったらそれまでは聞きません」
「助かる。……ああ、それと――」
　話が終わったタイミングで龍也は小袋を未来に渡す。
「これは？」
「クッキー。甘い物でも食べれば少しは落ち着くだろ」
「……ありがとうございます」
　最後にそう言って未来は去って行った。

　未来と会った次の日、それは響と未来が流れ星を見る約束の日。そして――
「雪音クリスが現れる日なんだが……」
『このタイミングで来るということは、そういう事だな』
　その場合、十中八九フィーネの味方になっているということだ。
「説得できるか……？」
『さあな。紫次第だ』

キャロルと話しているうちに響がノイズと戦っている地下鉄に辿り着く。
「まあ――」
『Ａｉｒｇｅｔ――ｌａｍｈ』
「まずは会って話してみるしかないな」
龍也は人のいない地下鉄の入り口近くで鎧を纏った。
「さて響は――あ」
龍也が出入り口に目を向けるとちょうどシンフォギアを纏いノイズと戦っているところだった。
「しまった！　遅れ――」
急いで響に協力しようと飛び出そうとした瞬間、上から何かが降ってきた。
「！」
バックステップで回避し降ってきた何かを確認すると――
「ロックシード!?」
ロックシードと気づくと同時にクラックが開き初級インベスが五体現れ、龍也に向けて戦闘態勢を取る。
「……？」
だが龍也はそれよりも気になる事が有り、考え込んでしまう。

（今のクラック……森じゃなかった？）
クラックの向こうの景色が森じゃなかったことに疑問を浮かべる龍也。考え込んでいるうちにインベスが近づいてくる。
「おっと！」
意識を戻した龍也はナイトフェンサーでインベスを斬り付ける。しかし、インベスから火花が出るだけ大したダメージになっていない。
「一撃じゃ無理だろうから……こうだ！」
『ＮＡＳＣＡ！』
龍也が取り出したのはナスカメモリ。形状はＴ２メモリと同じである。
『ＮＡＳＣＡ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
それを本来のナイトブレイザーには無い腰に追加されたマキシマムスロットに入れてマキシマムドライブを発動させる。
「行くぜ……！」
龍也は目にも止まらぬ速さで五体のインベスを斬り刻んだ。そして一瞬の間を置いてインベス達は爆散した。
「⁉　これは！」
爆散したインベスの破片が龍也の鎧に当たると甲高い金属音が響き、すぐさま龍也は

破片を確認する。
「機械!?」
　それは生物であるインベスではあり得ない金属片とケーブル、どう見ても機械の部品だった。
「なんで、って考えるまでもないか」
　スーパーロボットがいるなら機械のインベスが居ることにも特に疑問を持つことは無い。造ったという事だろう。
「ただ……」
　それでも違和感は有る。それを解消するために龍也は無言でキャロルに連絡を取った。
『機械のインベス、か』
「やっぱりおかしいよな」
『ああ』
　キャロルも自分と同じ疑問を持った事で龍也も自身の感じたものが間違っていないと判断する。
『スーパーロボットを造れるような奴がわざわざインベスを造るとは思えん』
「だな」

音声しか聞けないがキャロルが眉間に皺を寄せているのが龍也には容易に想像がついた。
『ロックシードならば自分で使うためだからと言える。スーパーロボットも戦力として考えればおかしくない』
「可能性としては生産が楽だとかコスト面の問題が考えられるけど」
『無いな』
キャロルは龍也の挙げた可能性を切って捨てる。
『今まで戦ってきたスーパーロボットが何で出来ているかお前も知っているだろ？　だから生産面での負担など実質無い』
「じゃあ、これは？」
『回収して調べない限り何とも言えん』
話はそれで終わりだ、と言わんばかりのキャロルは結論を述べ、それを聞いた龍也は破片を自身の収納空間に入れた。
『ところで響はどうした？』
「！　そうだ！」
インベスの事で頭が一杯になっていて忘れていた響の事を思い出しすぐさま移動を開始した。

その頃、響と合流した翼と奏の前にネフシュタンの鎧を纏った雪音クリスが現れていた。その姿に翼や奏が驚き固まっている中、響は別の事が気になっていた。

（なんだろう、あれ？）

それはネフシュタンの鎧とは不釣り合いな腕輪、いや手枷。あれではまるで罪人では無いかと響は思い、更に観察すると鎧を纏った少女の表情に気づいた。

（あれ？　なんで――）

さっきから挑発的な言動しているのに――

（口しか動いてない？）

表情が少しも変化していなかった。

混戦①

「奏さん！　翼さん！」
　それは響が追っていたぶどうノイズ（正式名称：セルノイズ）が飛行していた翼の斬撃によって一刀両断されたタイミングだった。
「おう、響。無事か？」
「あれが最後でいいのかしら？」
　奏は響の無事を確認し、翼は他にノイズがいないか周りを警戒している。
「はい！　大丈夫です！　それに今のノイズで最後です！」
　それに元気よく返事する響。憧れのツヴァイウイングと親しく会話できていることが嬉しいのだ。
「そうか。なら帰り送ってやろうか？」
「え？」
「約束があるんだろう？　実はこの近くに便利なのがあるんだ。見たら驚くぞー」
　一緒に戦っているうちに親しくなった奏や翼には未来との約束の事も話している。奏が死亡していた場合は、翼が拒絶しているためにそんな会話すらできなかったが、生

き残っている事で三人はちゃんと協力し合ってノイズと戦っている。
基本的には奏が響の指導をし、翼が二課で活動する上で必要な知識を教えるといった様に順調に響は強くなっている。少なくともこの時点では奏がいない世界よりも実力を付けている。さすがに弦十郎の指導を受けた状態には程遠いが。
閑話休題。
最後のノイズを退治したのを確認した奏はキャロルから二課にメダジャリバーと共に譲渡されたある物を使おうと提案した。
「奏、あれは非常時用――」
「まあまあ、いいじゃんか。頑張ってる新人を少しぐらい贔屓したって」
奏の思惑に気づいた翼は止めようと声をかけるが奏は気にせずに移動しようとする。
「その前にあたしの相手をしてくれよ」
すると近くの森の方から声が聞こえてきた。
「誰だ?!」
翼が大声で声の聞こえた方に問いかける。本来ならノイズの出現で避難が終わっているので奏者達以外の人間はいないはず。それにも拘わらずこの場にいる人間に翼と奏は警戒せずにはいられなかった。
「な!?」

「あれは!?」
　月明かりに照らされて現れた声の主の姿に翼と奏は驚きの声を上げる。響は戸惑いながらその様子を見ることしかできない。
「ネフシュタンの鎧……!」
「お前、なんでそれを?」
　翼が驚きながらも鎧の名を呟き、奏が鎧を纏っている少女に問いかける。
「わざわざ教えるために出てきたとでも思うのかよ?」
「ならば――」
　奏の問いに嘲るように答える少女に翼は自らのアームドギアを構える。
「力づくで聞きだす!」
　その様子を見ながら奏は翼に小声で話しかける。
「響はあたしが守る。任せて大丈夫か?」
「当然よ。防人の名は伊達ではないわ」
　お互いの役割を即座に決め、翼は少女に斬りかかり、奏は響の前に自身を壁にするように立つ。
「止めてください翼さん!?」
「ジッとしてな」

そう言って響を抑え込む奏。しかし、響は目の前の状況に納得できないのか奏に自身の疑問をぶつける。
「でも、相手は人ですよ!?」
「落ち着けって」
そんな響に奏は諭すように状況を説明する。
「あのネフシュタンの鎧は完全聖遺物、分かりやすく言うとシンフォギアより危険なもので、元々は二課で管理していたんだけど、二年前に盗まれたんだ」
「え？　という事は――」
「そう、あいつは盗品の危険物を装備しているんだ」
響は奏の言葉を聞き、翼と戦っている少女が少なくとも味方とは言い難いことは理解できた。だが、それでも完全に納得できない。
「だからってなにも戦わなくても……」
「響の気持ちも分かるけど危険物を装備している奴に、それも明らかに戦う気が有るんだぞ？　これが警察なら取り押さえてもおかしくないだろ？」
奏の言葉に響も「確かに……」と納得する。戦う理由に納得できた響から奏は目を翼の方に向ける。
「ほらほら、どうした？　一人でどうにかできるんじゃないのか!?」

「くっなめるな！」
（苦戦しているみたいだな）
シンフォギアと完全聖遺物の性能差、だけでなく鎧を纏っている少女自身も強い。奏は助太刀に行こうとする。
「あの、奏さん」
しかし、響に呼び止められ足を止めた。
「どうした？」
「あの手錠みたいなのも完全聖遺物なんですか？」
「手錠？」
響に言われて鎧の少女を見ると確かに鎧とは不釣り合いな枷が両手首に付けられている。
「それにさっきからあの子、表情が全く変わっていないような……」
「なに？」
響の言葉にさすがにおかしいと思った奏は少女の顔をよく観察する。
「ちょせえ！」
「このぉ！」
「……確かに」

戦いに集中しているならおかしくないが、話し方と声に籠った感情などを考えると不自然と言えるほど表情が変化していない、剥離していた。
「変、ですよね？」
「変だな」
明らかにおかしい。それは奏にも分かった。
「とりあえずあのあからさまな手錠から壊してみるか」
それが原因かもしれないならこれ以上戦わずに済むかもしれない。そう判断しアームドギアを構え走り出そうとした瞬間――
「！」
突然、奏と響の方に杖を向け閃光を放つ。直撃せず二人の周囲の地面に当たると光の中からノイズが現れた。
「ノイズが操られている？」
「響！」
奏と分断される形でノイズが召喚され、孤立した響は予想外の状況に固まる。そこをノイズが襲い掛かろうとする。
『ＡＣＣＥＬ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
だが次の瞬間には響の姿がその場から消えた。

「え、えええええー!?」
　奏が響の叫びが聞こえた方に向くと離れた場所で赤いマフラーに銀色の鎧を身に纏った人にお姫様抱っこされている響が居た。
「え、なんで私、こんな事に!?」
「落ち着け」
　そう言って響を下す。咄嗟に抱き抱えたが気恥ずかしくてすぐに下したのだ。
「あ、ありがとうございます。えっと――」
「？　ああ、ブレイザーとでも呼んでくれ」
　そう言えば名乗ってなかった事に今更気づいた龍也は鎧の名前で答えた。
「はい、ブレイザーさん！」
「おう」
　響の元気良い声に返事しながら龍也はネフシュタンの鎧を纏う少女、雪音クリスを見る。
（どうやら思ったよりも状況は悪いな）
「で？　ブレイザーだっけ？　お前、何者だ？」
　何時の間にかノイズを退治した奏が龍也のすぐ近くまで近づいていた。
「あー、二課の協力者の部下。そう思っといてくれ」

「協力者？　ってもしかして――」
「おっと、名前は言うなよ。許可が無い相手には秘密にするように言われているだろ？」
二課の協力者。当然、キャロルの事である。
「それに俺の事よりも彼女の事だ――！」
話している途中、龍也の足元に黄色く光る矢が飛来する。
「こいつは――」
「やれやれ、これ以上余計な真似するのは止めてもらえるかな？」
それは何もない空間から突然現れた。
「ステルス機能まで付いているのか……。いや、そのライダーならあり得るか」
龍也は現れた者の姿を見て、「まだましか」と自分に言い聞かせる。性能を考えれば楽では無い事は百も承知。だからこそ負けるわけにはいかないと闘志を燃やす。
「初めまして、〝ナイトブレイザー〟。その姿を見るとロードブレイザーはいないみたいだね」
「そう言うそっちはメガヘクスでもバックについているのか？　〝仮面ライダーデューク〟」

混戦②

「か、仮面、ライダー？」
響は驚きで目を見開きながらデュークを見る。
仮面ライダー。
それはかつて響を不良から助けた者が名乗った名。やった事は褒められたことではない。だが、響からすれば自分を助けるために手を汚した恩人を忘れてはいなかった。
「な、なんで……」
「おや？　仮面ライダーを知っているのかい？」
動揺している響の様子にデュークは驚きながらも冷静に問いかける。
「という事は既に他の転生者にでも会ったのかな？」
「て、転生者？」
「そんなことより――」
デュークの言葉を龍也は遮った。転生者の情報を響達に与えても混乱を招くだけだと考えたからだ。

「俺に用があるんだろ？　デューク」
「あからさまな話題転換だけど乗ってあげようか」
そう言いながらデュークはソニックアローを構える。
「要求はただ一つ、僕の実験を邪魔しないでもらいたい。聞いてもらえるかな？」
「当然――」
瞬間、ブレイザー――龍也はナイトフェンサーを構えデュークと対峙する。
「断る！」
「だろうね！」
龍也がナイトフェンサーで斬りかかり、それをデュークがソニックアローで受け止める。
「はあ！」
龍也が二刀流で斬りかかる。しかし、デュークはソニックアローでそれを防ぎつつ距離を取る。
「ふん！」
透かさず頭上に向けて矢を放つ。矢は空中でレモン形のエネルギーへと変化した。
「ちっ！」
『ＱＵＥＥＮ！』

龍也は舌打ちしながらクイーンメモリを取り出す。同時にレモン形エネルギーが弾け、無数の矢が龍也に降り注ぐ。
『ＱＵＥＥＮ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
龍也はマキシマムドライブを発動させてバリアを生成し防ぐ。
「ガイアメモリか……ならこれはどうかな！」
『レモンエナジースカッシュ！』
バリアを張ったことで身動きが取れなくなった龍也にデュークは近づきながら必殺技を発動させ、ソニックアローにエネルギーを纏わせて直接斬りかかった。
「おっと！」
「む」
だがそこで蚊帳の外だった奏が間に割り込み槍でデュークのソニックアローを受け止める。
「邪魔しないでもらいたいんだけどな」
「そう言わずにあたしの相手もしてくれよ！」
奏は押し返すと同時にデュークの腹部に蹴りを加える。
「ぐっ!?」
「そこだ！」

『ＣＹＣＬＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
　その隙を逃さず龍也は数メートル押し出される様に吹き飛ばされるデュークに向けてマキシマムドライブを発動させながら拳を突き出す。
「ぐお!?」
　突き出された拳から強烈な風が吹き出し、その風圧によって更に遠くにデュークは飛ばされていく。
「助かったよ、天羽さん」
「気にすんな。あと――」
「ん？」
「天羽なんて呼びにくいだろ？　名前で呼べばいい」
　名前の方が呼び易いだろ、と言いながら奏は龍也に向けてウインクする。それは堂に入った動作だった。
「じゃあ、遠慮なく。奏さん」
「なんだ？」
「頼みが有る」
　デュークの方を見ながら龍也は奏に頼みを告げる。
「奴の足止めをしてほしい」

「……理由は？」
「あの娘を助ける」
未だに翼と戦っているクリスの方に一瞬、目を向けて龍也は自身の異能である倉庫からある物を取り出す。
「助けるか……。できるのか？」
奏もクリスが何かされているのは理解できる。だからと言って即決で「ＯＫ」の返事はできなかった。
「少しの間だけで良い」
「……わかった」
顔は見えないし言葉も少ないが本人の態度から何か手段が有るのを理解した奏は龍也に任せる事にした。
「あの……」
「立花響」
戸惑い口出しできずにいた響が龍也に声を掛けた。
「君はノイズの相手をしてくれ」
「……それは」
龍也の言葉にどう答えたら良いのか分からずに戸惑う響。そんな響を無理矢理納得

させるために頼み込む。
「人間相手と戦うのを躊躇っているんだろ？　そっちは俺達に任せておけ」
「……どうしてですか？」
　困惑した響の声を聴き龍也は顔を向ける。
「どうして相手は人なのに戦うんですか!?」
　ノイズ相手ならともかく人間相手に敵対する理由は無いはずだと考えている響には龍也達の考えていることが分からなかった。危険な武器を持っているから取り押さえるという考えは分からなくもない。それでも完全に納得することなど響にはできなかった。
「……」
　そんな響に対して龍也は――
「本当は戦いたくなんてないさ」
「え……？」
　本音で語ることにした。
「戦わずに済むならその方が良い。誰だって怪我したくないし、命の危険があるなら猶更嫌に決まっている」
「だったら、どうして？」

響の言葉に龍也はクリスの方を見ながら一言呟く。
「誰かが助けを求めているから」
続いて奏と戦っているデュークを見る。
「間違っている誰かを止めるため」
そして再び響の方を見る。
「理由なんていくらでも有る。だが、結局のところ俺がそうしたいからだ」
「そうしたいから……？」
予想外な理由に響は呆然とする。
「助けたいから助ける。正したいから正す。ただ、それだけだ」
「それ、だけ？」
「ああ」
自らの掌を見ながら龍也は語る。
「本当はもっといい方法が有るのかもしれない。だが、それを探す時間あればこそだ」
その手に光と共にバックルが出現する。
「それでも譲れない思いが有って俺達が間違っているなら止めればいい」
「それだと、私は邪魔になるかもしれませんよ？」
手に持ったバックルを鎧の上から装着する。ベルトが巻かれ右腰にフリスビーに似

た円形のアイテムがセットされる。
「〝だとしても〟だ。お前の意思を否定する気は無い」
バックルに三枚のメダルをセットする。
「キャストオフ！」
オースキャナーを構えると同時に龍也が叫ぶと鎧が閃光と共に弾け飛んだ。
「何!?」
「なんだ!?」
予想外の光に思わずその場にいた全員が目を閉じた。
「響」
「は、はい！」
「俺を止められるなら止めてみると良い」
「え……」
「変身！」
その隙に龍也はメダルのスキャンを終える。
『タカ！　トラ！　バッタ！　タートーバ！　タ・ト・バ、タ・ト・バ！』
謎の歌が聞こえデューク以外のその場に居た者達の表情が困惑したものになってい
た。

「……え、え」

目を開けた響が龍也の方に目を向けるとそこに居たのは上から赤、黄、緑の三色の戦士。

「仮面ライダーオーズ……」

「仮面ライダー……!?」

響からすれば三人目の仮面ライダーが現れた。

「俺は、俺のやり方で助けを求める人の手を掴む！」

仮面ライダーオーズ、タトバコンボ参戦。

混戦③

「オーズか……ガイアメモリとナイトブレイザーに酷似した鎧、それが君の特典かい？」
奏と鍔迫り合いをしながらデュークが龍也に尋ねる。
「律儀に答えるとでも？」
「思わないさ。口を滑らせてくれたらとは思ったけどね」
龍也の言葉に特に気にするでもなく余裕な態度を崩さないデューク。
「あたしを無視してんじゃねえ！」
「おっと」
奏の振るう槍をソニックアローで受け止める。
「今の内だな」
デュークの意識が奏でに向いている隙を狙って龍也はバッタレッグに力を込め高く跳躍する。
「おらぁ！」
「な!?」
横跳びの形で翼と戦っているクリスに跳び付く。

「抱きついてんじゃねえ！」
「うおっと」
　そのまま一緒に転がっていくとクリスが殴ろうと拳を振り上げた。それを見て龍也は素早く離れる。
「何を――」
「悪いな」
　横槍を入れられた翼は文句を言おうとするが、龍也に制止される。
「あの娘の相手は俺にさせてもらう！」
　翼の返答を聞くことなく龍也はクリスに近づく。
「今度はお前が相手か？」
「ああ」
「シンフォギアでもないそれで――」
　クリスは鞭を振り上げながら叫ぶ。
「アタシ様に勝てるつもりか!?」
「勝つつもり？　違うな」
　振り下ろされる鞭を龍也はトラクローで弾く。
「助けるつもりだ」

タカアイを光らせながら龍也はメダルを取り出す。
「何が助けるつもりだ！」
再び鞭を振るうクリスを見ながら龍也はベルトのメダルを取り換える。
「やれるもんならやってみろ！」
「なら遠慮なく」
『タカ！　トラ！　チーター！』
メダルをスキャンしタカトラーターに変化すると同時に龍也は走り出す。
「おらぁ！」
トラクローでクリスの腕に付いた枷を狙う。
「ちょっせえ！」
「ぐぅ！」
しかし、避けられカウンター気味に蹴りを腹に入れられる。そのまま蹴り飛ばされた勢いを利用して距離を取る。
「やっぱりまずは動きを止める必要があるか！」
そう言って龍也は倉庫からある物を取り出す。
「頼むぜ！」
『ＬＵＮＡ！』

取り出したのはルナメモリとメモリガジェット『スパイダーショック』だ。
「行ってこい！」
『ＬＵＮＡ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
ルナメモリを挿されたスパイダーショックは勢いよくクリスの方へと跳んでいく。
「く、蜘蛛!?」
スパイダーショックは黄色い糸を吐き出しながらクリスの周りを高速で動き回り、クリスを縛り上げる。
「はあ?」
あまりの早業に驚くことしかできないでいるクリス。
「今の内に」
『タカ！　カマキリ！　チーター！』
その隙を使って龍也はタカキリーターにメダルチェンジする。
「行くぜ」
『スキャニングチャージ！』
龍也の眼前にリング状のエネルギーが三つ並ぶ。
「はぁぁぁ――」
リングを潜る様にクリスに向かって走り出す。

「この!?」
何とか避けようとするクリスだが、スパイダーショックの出した糸があまりに頑丈でネフシュタンの力でも引きちぎることができないでいる。
「セイヤーッ!」
クリスの傍まで接近した龍也はカマキリソードでクリスの枷の一つを的確に斬り裂く。
「もう一丁!」
チーターレッグによる加速を殺さない様に方向転換しながら再びクリスに向かう。
「くそ!? 動けねえ!?」
クリスはその場から動こうとするが既にスパイダーショックが逃げられないように固定している。クリスにできるのはそのまま龍也によって枷を斬られるのを待つだけだった。
「ハァー!」
クリスのもう一個の枷を斬り裂いた龍也はすぐに振り返りクリスの様子を観察する。
「……」
まるで電源が切れたかの様に俯くクリス。明らかに先ほどと様子が違うために龍也は警戒しながらゆっくりとクリスに近づく。

「……だ」
「ん？」
　クリスの元に近づくと小声で何かを呟いているのが聞こえ、龍也は足を止める。
「……ダメなんだ」
「駄目？」
「ここにいるアタシを止めても意味が無いんだ」
「何――が!?」
　クリスの言葉の意味を理解する前に背中に衝撃を受けて勢いよく地面を転がっていく。
「全く……余計なことを」
　声の聞こえた方を見るとソニックアローを構えたデュークが龍也達にゆっくり近づいてくる姿が見えた。デュークの後ろの方を見るとデュークが召喚したであろう初級インベスの群れを相手している響達の姿が有った。
「お前、クリスに何をした？」
「おや？　タカメダルの力なら見抜けそうな気もするが……流石に内部までは見えないかな？」
「……」

デュークの言葉に押し黙る龍也。龍也の使っているコアメダルは未完成品であり本物に比べれば性能は低い。それ故にデュークの言うタカメダルの力すらも劣化しているのだ。
「さっき言っただろ？　実験をしている」
「どうせ碌でもない内容なんだろ？」
「そんな大したものではないさ」
余裕綽々の態度で語るデュークを仮面越しに睨みつける龍也。次のデュークの言葉に凍り付く。
「機械で作った体でも『ソロモンの杖』は使用できるのか試してみたのさ」
「――は？」
デュークの言葉を、内容を理解できず龍也は呆然としていた。
「色々試してみたが機械の体にコピー人格では上手くいかなくてね……人格そのものを移し替えないとフォニックゲインが発生しないものでね。やはり魂が本物でなければいけないという事だろうか、困ったものだ。しかし、その所為か思い通りに動いてくれなくてね……今回は枷で無理矢理操らせてもらったよ」
「――――雪音の、雪音クリスの肉体はどうなった？」
デュークの実験内容を聞き、最も気になる事を龍也は質問した。

「ああ、厳重に保存しているよ？　まあ、機械に繋いでこうやってコピーロボットに人格を移しているけどね」
「そうか」
　クリスの状態を聞き、龍也は静かにメダルを取り出す。今の龍也はクリスの事を考えていた。
　コピーロボットの言動は作られた肉体だから好き勝手操られていた。それでも彼女は抵抗したのだ。枷を付けられて体の自由を奪われても、僅かにでも抵抗し、それが表情と言う形で出た。それが彼女の、雪音クリスの精一杯のＳＯＳだったのだと。
「お前だけは……」
「うん？」
「お前だけは倒す！」
『クワガタ！　カマキリ！　バッタ！』
「何!?」
『ガ～タガタガタ、キリッバ、ガタキリバッ！』
　話に夢中になっていたデュークの隙を突き龍也はガタキリバコンボにチェンジする。
「クッ!?」
　デュークは素早くソニックアローで攻撃しようとする。

「ハッ！」
「しま――!?」
デュークの攻撃をバッタレッグの力で高く跳躍して避ける。
「その場を動くな！」
『スキャニングチャージ！』
響達に動かない様に指示すると同時に必殺技の態勢に入る龍也。スキャンすると同時に分身が出現する。その数、本体を含めて２５体。
「はぁぁぁ、セイヤーッ！」
分身を含めてキックの態勢に入りインベスの群れに突撃する。キックが直撃したインベスは全て爆散し、その爆発に巻き込まれた近くのインベス諸共スクラップに変わった。
「やはり、ガタキリバコンボ相手では初級インベスをいくら集まっても無意味か！」
自身のミスに声を荒げるデュークに対して龍也はもう一度ガタキリバキックを使おうとするが――
『そこまでだ。引け』
キャロルに声で制止される。
「でも――」

『今は引け。怒りをぶつけるのは今じゃなくていいはずだ』
「……分かった」
『ＺＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』
　キャロルの言う通りに龍也はゾーンメモリを使って響達と共に（本人達の意見を聞かずに）転移した。
「逃げられたか」
　残されたデュークはインベスが爆発した煙の方へとソニックアローを構えていたがマキシマムドライブの音声を聞き、ソニックアローを下した。
「まあ良い。こっちは実験のデータを少しでも集めるのが最優先だ」
　そう言ってロックシードによってクラックを開くと、動かないクリスを無理矢理立たせて移動しようとする。
「――何？」
　その途中、誰かに話しかけられたかのような反応をするデューク。しかし、周りには誰も居ず、クリスも無言のままだ。
「まだ、諦めていなかったか……他の転生者に会って希望でも抱いたか？　無駄な事を。私に、我々に勝つ方法など無い」
　その言葉を最後にデュークはその場を去った。

偽物と本物

気づけば見知らぬ場所にいた響は周りを確認し奏と翼が居るのを確認する。幸い怪我などは無いようだが信じられない情報を幾つも聞いたために三人共呆然とした表情を浮かべている。

「機械の体……」

デュークが龍也に告げた雪音クリスと呼ばれた少女の精神が機械で作られた体に移し替えられていること。信じられない内容だがシンフォギアと言うノイズと戦える物まであるなら不可能ではないのだろうと響は思った。

「どうして……」

だが、可能だとしてその技術を利用する理由は何なのか、響にはまるで理解できず、唯々困惑することしかできずにいた。

「少なくとも五体満足の人間に使うような技術では無い事は確かだな」

困惑する三人を見ながら龍也は気づかぬ間にブレイザーの姿に戻っていた。

（やはりコンボは長く持たないか）

龍也は掌の上のガタキリバコンボに使ったコアメダル三枚、それが消えゆくのを見な

がら誰にも聞こえない声量で呟く。
　龍也の使ったコアメダルはキャロルの試作品であり大量のセルメダルで作ったものだ。それ故に欠陥が多数あり、その一つが時間制限だ。無理矢理コアメダルの形にしてそのエネルギーで肉体変化させているために変身している間は常時コアメダルのエネルギーが消費され続ける。そしてエネルギーを消費すればコアメダルも形を維持し続けることはできず最終的には消滅する。具体的に言うなら仮面ライダーバースが使用した後のセルメダルと同じように消える。
　何故そんな物を使ったかと言うと、操られているために抵抗するクリスを傷つけずに枷だけを破壊するならタカヘッドの能力を使った方が良いと判断したからだ。
　結果的にその配慮に意味は無かったが。
「ブレイザーさん……何がどうなっているんですか？」
「……」
「わけわかんないですよ。人の心が機械に移されて、好き勝手に操られてる。それも仮面ライダーって呼ばれている人がやっているなんて」
　俯いていた顔を上げて龍也を見る響。その目は不安げに揺れている。
「何が起こっているかわからないんです……！　わかんないよ……」
　響からすればノイズを操る謎の少女が現れたと思ったら、その少女も操られていて、

少女を操っているのは自分を助けてくれた人と同じ「仮面ライダー」と呼ばれている上に、なぜだか分からないが助言を何度かしてくれたブレイザーも仮面ライダーになるという、あまりにも多い情報に理解が出来ずにいる。

「――ハァ」

流石に可能な範囲で説明すべきかと溜息を吐いた龍也はゆっくりと響の前に座り込んだ。

「ブレイザーさん？」

「何が聞きたい？」

「え？」

「出来る限りの事は答える。知りたい事を質問してくれ」

「は、はい」

「まあ、時間も遅いからあまり説明もできないけどそこは我慢してくれ」

そこから一問一答と言う形で響は龍也に質問する。

「え、えっとそれじゃ、ブレイザーさんは何者なんですか？」

「俺か？　まあ、今はあんまり説明できないが一言でいうなら『二課の協力者の仲間』。今はそれで納得してほしい」

キャロルの事を話しても良いが響に知られるとそのまま龍也の正体まで芋づる式に

バレる事になるので話さないでおく。当然、二課にも黙っておくように言ってある。
「そ、そうですか……そのブレイザーさんが使っていたＵＳＢメモリみたいなのは？」
「これの事か？」
「は、はい」
　響は龍也の持っているガイアメモリを見つめる。以前にも龍也が仮装した１号が使っていたのだから気になるのは当然だろう。
「ガイアメモリと言ってな……何て言えば良いかな、仮面ライダーの使うアイテムだとしか……」
「仮面ライダー……」
「立花？」
　響は数秒ほど俯くとやがて顔を上げて、最も気になっていた疑問を口にする。
「仮面ライダーって結局どういう存在なんですか？」
「……」
「あのデュークと呼んでた人もブレイザーさんが変身していたオーズも仮面ライダーなんですよね？」
「ああ」
「見た目全然似てないのに？」

「デザインとかは気にしても無駄だぞ」
同じ作品内のライダーですら見た目が全く違う場合もあるのだから。
「仮面ライダーはそうだな……」
なんと説明すれば良いのかと頭を悩ませながら龍也は自分なりの答えを告げる。
「人それぞれかな」
「え……」
その答えに響は思考停止する。
「それは――」
いくら何でも適当すぎる、そう声を荒げて文句を言おうとするが――
「ある人は愛と平和のための力と答えるだろう」
その前に龍也の言葉で言うのを止めた。
「別の人は人の命を救う力、また別の人は友達のために使う絆の力、あるいは――助けを求める人の手を掴む力と答える人もいるな」
手に持っているオーズドライバーを見ながら龍也はそう答えた。その答えは響にとって耳触りの良い言葉だろう。しかし、龍也の言葉はまだ続く。
「だが別の奴に聞けば星を滅ぼすための力だと答えるだろうな」
「え」

それ以前まで話していた内容とはあまりにもかけ離れた言葉に響の思考は再び停止する、
「ただ単に人を殺すための力と答える奴もいるな」
「……」
あんまりな内容に響は何も言えない。
「結局、使う人次第なのさ。悪人でも仮面ライダーを名乗るなら仮面ライダーになる。『本物』かどうかは別にして、な」
「本物？」
龍也はオーズドライバーを響に見えるように持ち上げながら語る。
「そう『本物』……『誰かのために戦える者』だけが真の意味で仮面ライダーと呼ばれる存在なんだと俺は思っている」
「誰かのために戦える……」
龍也の言葉に響は考え込む。
「……ブレイザーさんも、あの青い仮面ライダーも誰かのために戦っている『本物』なんですか？」
「デュークは分からないが、少なくとも俺は『偽物』だ」
「……え？」

予想外の答えに響は一瞬呆けてしまう。肯定するものと思っていたからだ。
「所詮、俺は『ヒーローごっこ』しているだけの『偽物』だ。本当なら使う資格も無いはずなのに、それでも憧れを捨てきれずに変身しようとしている」
「……」
「だから俺から言えるのは唯一つだけ」
そう言って龍也は立ち上がりゾーンメモリを取り出す。
「『偽物』とか『本物』じゃなくて信じたい方を信じると良い。俺もデュークもやりたいことをしているだけだからな――それと」
「え？　――あ」
龍也は響に向かって使用済みのタカメダルを放り投げる。
「ターくん？」
そのタカメダルを響に憑いているタカヤミーが受け取り、体内に取り込んだ。
「これでタカヤミーも強くなったはずだ」
「えっと、何のために？」
「護衛は強い方が良いだろ？」
タカヤミーがいるのは融合症例のために攫われる可能性のある響を守るためだ。それ故に試作品のコアメダルを与えてタカヤミー強化させた。

「気休めだが無いよりは良いだろ」
『ＺＯＮＥ！』
　ゾーンメモリのスイッチを押して、その場を去ろうとする龍也。
「待ってくれ」
　しかし、龍也は奏に呼び止められて足を止める。
「二課に協力してくれるあんた達には感謝している」
「そうか」
「だからこそ分からない」
　奏に続いて翼も問いかける。
「なぜ私達の、二課に来て共に戦ってくれない!?」
「……」
　その疑問が浮かぶのは何も知らなければ当然のことだろう。しかし、フィーネの存在を知っている龍也からすれば下手なことは言えない。
「今は無理なだけだ。……それで納得してくれ」
　それだけ言って、龍也は更に言い募ろうとする翼を無視してマキシマムドライブを発動させる。
『ＺＯＮＥ！　Ｍａｘｉｍｕｍ　Ｄｒｉｖｅ！』

「またな」

龍也はそう言って転移した。

取り残された響達三人は龍也が去った直後に二課からの迎えが来て帰宅した頃には夜明けとなっていた。